
ナビゲーション・セイリング

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナビゲーション・セイリング

【Nコード】

N7673G

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

『ソリル』は地球から移民してきた男性のみが生存する惑星。そこに住む的場晃は、その惑星を統治しているとも思われる『ネオ・ロマンサ』に疑問を持ち、地球へと親友一色夕貴と共に旅立つ。主人公晃の周りで起こる事を航海日誌としてそれをベースに描かれた異色SF。

#1 カセットテープ

移民暦458年。8月15日。

この事実を我が子孫に送る。

今から記す事を、我が子孫が知ってどう思つかはこれからの生き方に一任することになるだろう。

オレはこうして、未来に託す。

だから受け止めて欲しいと思っている。

一つ心残りなのは、上層部の手にこの事が放置されている事だ。持ち上げなければならなかったであろう、この真実を：

▼カセットテープ

移民暦360年。8月15日。

今は夏休み。気持ちの良い朝に、気持ちの良い空気。まだ心地よい眠りの中。オレ、まじはこう的場晃はその空気を身体に感じながら、ベッドの中で寝返りを打っていた。

「晃！朝よ。起きなさい！今日は登校日でしょう！学校に遅刻するわよ！」

包まっているオレの布団を引っぺがすオレの母親。めぐむ恵。今まで、閉ざされていたカーテンが溢れるくらいの光を持ってオレの目に飛び込んで来た。

そうこの日は、オレの誕生日。晴れて16歳になったのである。

「うーん…恵……分かったから退いてくれないかな……重いんだけど」

オレの上に覆いかぶさって、オレの顔面ギリギリに顔を寄せている恵は、端正な顔だちをしている。それを見上げるのは俺の日課。そしてオレのその言葉に、いつものように恵は呆れ顔でオレの身体から下りる。

「晃。誕生日おめでとう……もう16歳なんだから、一人で起きら

れるようにしてよね。下に朝食できてるから、食べ終わったらちゃんとキッチンの流しにつけておきなさいよ。私は早番で、もう出掛けるから」

一度腕組みをして威厳を残し恵はこの部屋を後にした。

オレは、言われた通り朝食を済ませ、一度大きく背伸びをしてから学校に出掛ける事にした。

「おっはよう！ 晃！」

玄関で鍵を締めている時、聴き慣れた声に振り返る。門の所に隣の家に住む一色夕貴^{いっしきゆうき}が、門の上に腕を乗せて頬杖を付いてこちらを見ていた。

「おう。はよう」

オレは、いつもの挨拶を交わす。

ちなみにこの夕貴は、オレの公認の恋人らしい。らしいというのは、オレ自身がまだその気になってないからであった。愛らしい顔をした、オレより頭一つ低い背格好をした夕貴。学校でも人気があるって、よく、噂に上っている。それもそのはず、学年ナンバーワンの成績は伊達ではない。

しかも、愛嬌良し。

そんな夕貴と幼馴染で、仲が良いとあっちゃあ、他の奴から言わせると気分が良い訳はないであろう。オレはよく他の生徒達に睨まれるが、もう今となっては気にもならない。

「どうしたの？ 今日早いね」

学校は、隣街の南田中に有る『市川学口』オレと夕貴は、その一年生である。

「ああ。恵が早番だから、いつもより早く起こされたんだ……おい何だよその顔！」

学校へ行くのにはいつも自動自転車を使って通学している。

「だって、いつも恵ちゃんと一緒に起こしに行ってるから、拍子抜けしちゃったんだもん！」

ちょっと膨れっ面をしてみせる夕貴。可愛い顔もこれじゃあ宝の持ちぐされとオレは思う。

「いつもいつも、お前達に起こされてたらオレの身が持たないっての！」

オレは通り過ぎて行くいつも見なれた景色に視線を流した。今の夕貴は、きつと膨れっ面を歪ませているに違いない。

「所で、今日は晁の誕生日だったよね？ 帰りに、学校前の喫茶店でお茶でもしない？ 奢るから！」

突然の切り返しにオレは、

「へえっ。奢ってくれるんだったら行くぜ？ それじゃあ、部活が終わったら一緒に行こう。オレあそこの焼そばが好きなんだ！」

「知ってるよ。喫茶店なのに何故だか絶品の代物だって事。そして晁がそれを好きだって事も！」

オレ達の日常の一コマは、平凡な物であった。そう何処にでもあるような日常一コマ。

「で、あるからして……」

普通夏休みの登校日には、授業なんてないはずなのに、この学校はその授業をする。

一学期に間に合わなかった分を埋めるためだとか言ってるが実の所、二学期の範囲にまで辿り着いてしまうのが現状だ。

一時間目からダレてしまっているオレは、それでも、四時間目のこの歴史の授業にだけは聞き耳を立てていた。

「記念すべき移民暦1年。こうして我々は『地球』と言う惑星を離れ、この地『ソリル』に足を踏み入れたのです。しかし、女性と言う種族を欠いてしまった我々は、子孫を作る事が適わなくなりしました。そこで開発チーム『ネオ・ロマンサ』が開発したシステムにより、期する計画が実行に移されたのです。未だ我々にはその実態は明らかにされてはいないものの、いろんな可能性に秘めていると言う事だけは、『ネオ・ロマンサ』の発表により明らかに成り来る

ことでしょう。おっと、チャイムですね。それでは、授業を終わります」

チャイムの音と共にざわめく教室。この学校の授業への時間配分は間違いがないくらい徹底している。

「そうそう、夏休みの課題提出忘れるなよ！」

その言葉に、違うざわめきが起こる。やっと、開放されたのに嫌な事を思い出させるなど言わんばかりだ。

そんな折、オレは窓際から校門前に有る、初恋の相手を眺めていた。

『ビーナス像』それは、気高くしなやかにオレ達を見守ってくれている。このオレ達の惑星にはいない、伝説の女性を型どった像。オレは一目見た時に、自然と引きつけられた。その類い稀な美しさに。そして、なぜ、オレ達種族しか生き残らなかったのかと言う疑問と共に。

昼までの授業を終えたオレは、一目散けで陸上部の部室へと駆け込んだ。

「晃。待ってたよ！さあ、昼食をとって、練習に励もう！」

と、部屋のドアを開けたとたん飛び込んできた夕貴の笑顔は、まさに待ってましたと言わんばかりである。

「えらいはりきってんだな……」

オレは呆れた感じで荷物を簡素なロッカーに入れる。

「もちろん。だって、部活を終えたら食べに行くんだよ。はりきらずにいられようか？」

すでに、着替えを終えた夕貴は、椅子に座ってこちらを見ている。「んだよ……見てんじゃないぞ！」

視線が注がれている事に気付いたオレは、思わず夕貴の意識を反らせようとした。

「ちえっ。いいじゃん。減るもんじゃなし」

オレの言葉に、なんとか分かってくれたようで、夕貴の視線が違

う方に動いた。

着替えを終えたオレは、弁当を持って夕貴と共に部室を後にした。そして、部活が始まるまでの一息を入れたのである。

「的場！タイムちよつと遅れてるぞ！」

「最近伸び悩んでるな……基本をもう一度こなすようにするか？」

部長の南さんが、百メートルのタイムを測ってくれている。

「すみません……最近調子が良くなって」

実際オレは、この所の暑さに参っていた。

「しょうがないな。体調は自分で整えておけよ。それも実力の内なんだからな！」

副キャプテンの岩泉さんは、オレのライバル的存在。

そういうオレは、春の市の大会で、高校新記録を出してしまい、今ではプレッシャーに潰されてしまうかと思うくらいの期待を担っていたりする。そして、そういうオレの事をちゃんとこの二人は知っていてくれる。

「わかりました。少し流して来ます」

オレは、トラックで、軽く流しに入った。

そんな折、トラックの角で幅跳びをやっている、夕貴の姿が目に入った。

夕貴は、高校記録に一步届かないまでも、良い記録を春の大会で出した、期待の新人だ。しかし、本人はオレみたいには気負っていない。いつも自然体でいる所は見習わなければならないと思わされる。

そして夕貴は、あの、『ネオ・ロマンサ』を親会社頂く『一色グループ』の御曹司。まったく、何でもそつなくこなしてしまう夕貴が何でこのオレなんか惚れてしまったのかは疑問である。

ただ家が隣だと言うのが、決定打だったのかも知れないなど、最近つくづく思ってしまう辺り、オレも感化されて来ているのかも知れない。

そんなこんなで、この日の部活は事なく終了した。

「さあ、たと召し上がれ！」

オレと夕貴は、学校前の喫茶店『マイム』に来ていた。

「そんじゃ、遠慮なく頂きまーす！」

オレは、遅ばれて来た焼そばを箸を手にガツキ始める。その様子を、夕貴は楽しそうに見ていた。

「うめーやっぱここの焼そばは絶品だ！」

思わず口から溢れてしまう程にここの焼そばは旨い。ソースが上手く蕎麦に絡んで、しつこくない程に濃い味付け。全く何と言う美味さであろうか。言葉ににしがたい。

「喜んでくれて、ボクも嬉しいよ。ところで、もっと喜んでもらえる情報を持ってるんだけど……聞きたい？」

夕貴は、手元に有るレスカのストローを摘みながら意味ありげな視線をオレに送って来た。

「?……何だ?その情報って?」

オレは、蕎麦を口一杯にほおぼってボソボソと問い返した。

「当てられたらね？」

楽しそうに、意地の悪い事を言う夕貴。一口レスカを飲む。しかしオレには全く予測がつかなかった。

「ヒント！」

「えーしょうがないな。今までさんざん言ってた事なのに忘れたの?」

「! まさか?」

オレの目は希望に『キラン』と光っていた。

「そのまさかさ。父さんから、許しが出たんだ!一週間後の昼1時に、『ネオ・ロマンサ』を見学して良いって。良かったね? 晃。夢が叶って!」

オレはその決定的瞬間に、立ち上がり両手を振り上げていた。これほど嬉しい事はなかったからである。思わず、歴史の夏休みの課

題はこの事にしようとか心に決めてしまいうくらいに。

「ありがとうく夕貴！やっぱ持つべきものは友達だな！」

「なんだって？友達？……まあ良いけどさ」

夕貴は、肘を付いてぶつくさ言っているようだったが、オレにはほとんど聴こえてなかった。それ程、心は一週間後に飛んでしまっていたのである。話に弾んでしまったオレ達が、この『マイム』を出るのは、日も暮れた頃であった。

「ただいま！」

玄関の戸を開けて、中に入る。

父が帰って来ているかのようで、奥の部屋の明かりが付いていた。

「あれ？早いね、望」

オレは、奥の部屋のドアを開けて、久し振りに顔を合わせた父に有り体の言葉を掛けた。

「ああ。晃か。久し振りだな……元気にやってるか？」

パソコンに向かっていている父が、ノポーツと振り返り言葉を返してくれた。

「うん。元気にやってるよ。望は、仕事の調子はどう？一週間も、館山に籠ってたからだいぶ進んだんだろ？」

「ああ、あと三分のくらいかな。フィニッシュは、明後日ぐらいがメドだよ」

オレの父、望はイラストレーターと言う職業をしている。そのせいか、一見ぼんやりしてはいるが、結構神経質。そのせいで、仕事に入る時は館山の別荘に籠り仕事に没頭している。

「へえ。珍しい。フィニッシュを家でやるの？」

「いや、そう言う訳じゃないんだけど。ちょっと忘れ物をしたから取りに帰ったんだ。それに今日は、晃の誕生日だろ？」

「わざわざそのために帰って来たんだ？」

そう言えば、父はそう言う人であった。仕事には熱心だけど、家の事となると仕事は二の次。つまり、なんだ……愛妻家な上に、狂

子家なのである。

「そう言えば、恵がお前宛に荷物が届いてるとか言ってたな。聞いてみると良い。今、キッチンでケーキを作っているはずだから」

荷物？オレ宛？珍しい事が有るものだとかオレは、父に挨拶をしてこの部屋をさっそく後にした。

「あら、お帰りなさい。今ケーキを作ってる所なんだけど、夕食は？」

生クリームを泡立てているのか、しきりにウィーンと言う音が響いていた。

「夕食は食べて来たよ。ところでさっき望の所に顔出して来たんだけど、オレ宛に荷物が届いてるって？」

恵は、自動泡立て器のスイッチを切り、キッチンの入り口に立っているオレの方を振り返った。

「そうなの。夕貴ちゃん家で預かってもらってたのよ。晃の部屋の机の上に置いてるから中開けてみたら？何が入ってるのか私も見たいんだけど、手が離せないから後で見せてね！」

好奇心旺盛な恵は、楽し気に再びモーターのスイッチを入れた。

オレは、なんだかはやる気持ちを抑えながら、自室に足を運んだのである。

「あっ。晃だ！」

部屋に入って電気を点けてみれば、夕貴が勝手に入り込んでいた。

「夕貴！お前、何をしてるんだ！」

ベッドの上に寝っ転がって手ごろな所に置いてあった雑誌を読んで振り返る夕貴の頭に一発平手を食らわす。

「イタッ！酷い！」

「酷いじゃねえ！ここはオレの部屋だ」

「だって、窓開いてたよ。気を付けた方が良いよ？不用心なんだから」

窓の方を指さして訴える夕貴。

「お前が言うな！夏だから部屋に熱が籠るのが耐えられないからこうしてるの！」

オレは、窓から入って来る自然な涼しい空気が好きだった。

「……っと、こうしてらんないんだった。荷物、荷物」

オレは、机の上に有る、手の平サイズの宅配便に日を奪われた。

その宛名は確かにオレ宛で：しかし、肝心の送り主の名前が、アルファベットで『M・A・I』とだけしかなかった。もちろん、住所も白紙である。

「『M・A・I』？」

オレは、知っている限りの名前を思い出していたが、こんな名前を語る者知らない。仕方がないので、その小包を開けてみる事にした。その様子を、夕貴はじっと見守っている。

そして小さな箱におさめられた小箱を開けようとすると、

「ドカーン！」

夕貴がふざけて、そんな事を言っただけだ。思わず吃驚したオレだったが、何の異変も起こらなかった。

中にはプラスチックで出来た、長方形の物体が入っていた。

しかし、これが何なのか分からないオレは、近くでクスクス笑いしている夕貴に、

「何だろうな、これ？」

と、問いかけていた。しかし、夕貴にも分からないらしく、二人はこの物体を眺めながら座り込んでいた。

「この中央の丸い二つの穴は何なんだろう？」

「ていうか、この黒いセロファンは？」

思わず引き出してみる。結構長いものらしく引き出している指が疲れた。しょうがないので元のように巻き取る。

「ねえ、思っただけど、恵ちゃんなら分かるんじゃない？」

二人して考えても分からないところ、夕貴の提案で、オレ達はキッチンにいる恵の所に足を伸ばした。

「へえ。カセットテープじゃん。どうしたの？これ？」

その、カセットテープと呼ばれるらしい物体を手に取りながら、恵は、関心していた。

「で、何するものなの？」

実の所オレの中に有る、押さえ切れない好奇心を、早く恵に何とかしてもらいたかった。

「これはね、今あるデジタル信号を発するCDとか、MDとかとは違って、磁気で信号を読み取るテープなの」

「それじゃ、もしかして、これで音楽が聞けるのか？」

オレは、謎の物体に、不思議な感覚を覚えていた。

「音楽か、音声が入ってるのだとは思うんだけど、このままじゃ聴けないわね。そう言えば、望ちゃんがアンティークでテープレコーダー持ってたような気がする。ちょっと待ってて！」

そう言い残すと、恵は奥の部屋にパタパタと駆け出して行った。

「こんなもので、音楽が聴けるんだ」

まじまじと見つめてる夕貴。好奇心はオレにも負けない程ある。

「らしいな……一体どんな音楽が入ってるんだろう」

勝手に音楽と決めつけているが、結局の所それはビンゴであった。

恵が、テープレコーダーと言う物を持って来て間もなく、オレ達は隣の居間で向かい合いそのテープをセットして聴く準備は整った。
「それじゃあ、押すわよ！」

恵が決意するかのように一瞬気合いを入れ人さし指で再生ボタンを押す。すると、ジーンという雑音から、などこかの民族音楽のようないんストロメンタルが流れ始めた。どんな楽器を使っているのかはオレには想像もつかなかったが、凄く透き通っていて懐かしい物を感じた。いや？懐かしいというより、実際どこかで聴いた事が有るのである。身体の中でそれが点滅していた。

そのテープに入っているのは、ただ一曲だけだったのであるが、オレの中にその音楽はたちまち満たされた。何故だか安堵感さえ生

まれていたのである。

「綺麗な音楽ね」

「なんて曲なんだろう。ボクは聴いたことないよ。晃は知ってる？」
夕貴は、呆然としているオレの顔を覗き込み、問いかけて来た。

「聴いた事がある気がするんだけど……何故だろう、何処で聞いたかなんて、全然思いつけない」

そう感じると思わず齒がゆくなってくる。

それより、一体何故こんな物を送って来たのか……それが、今のオレにとって一番の疑問であつた。オレの心の中の何かが呼び寄せている。この事を調べなければならぬような気がして……

「さてと、このテープの謎も解けた事だし、晃ちゃんの誕生日会でも始めますか？」

オレの気持ちをよそに、恵は提案していた。

「ボクも、一緒に良いですか？あつても折角の水入らずが台なしになっちゃうか……」

夕貴も、その恵の提案にはまっている。

「大丈夫！夕貴ちゃんは、晃ちゃんの未来のお嫁さんなんだから！大歓迎よ！」

オレの周りはだんだんと違う話題で盛り上がって行く。そんな中、何だかわけがわからないオレに、一つの案が浮かんた。それを実行するのは今は無理だと気付いた為、

「なあ、夕貴！明日、部活休みだろう。オレに付き合つて『香之淵』の図書館に行かないか？ちよつと調べたい事があるんだ！」

盛り上がつてゐる夕貴は、テンションそのままに、

「何？デートの誘い？行く！」

と、返事する。

それが、どういう結末を迎えるかは明日になつて分かる事である。しかし、今は夢を見させてやろうと、オレは、心の中で笑っていた。
「じゃあ、オレの誕生日祝いのケーキは出来たんだな？早く用意してよ。何だか小腹が空いて来ちゃたよ！」

そこでオレは、今の楽しみに心を動かす。

「じゃあ、晃ちゃんは、望ちゃんを呼んできて。私と、夕貴ちゃん
は、用意してるから」

恵が仕切ると、三人はバタバタと忙しく動き始めたのであった。

#1 カセットテープ（後書き）

ゆっくり更新していきます。

MACからWINに機種変更した頃の商品ですので、化け文字を直すのに一苦労しそうです。

ゆっくり、見たたちがどうなっていくのかを、楽しんでいたければ幸いです。

#2 図書館

▼図書館

昨日のドンチャン騒ぎは、夜の12時過ぎまで続いた。流石にそのせいで、翌日となった今日は朝起きるのに苦労する。

そうは言ってもいつもの朝のように、恵に叩き起こされたオレは、どうにかこうにかベッドから這い出し机の前に立っていた。そう、昨日送られて来た謎のカセットテープの曲を探し出すために。

夕貴との待ち合わせ時間、オレは久し振りに隣の一色家に足を伸ばしていた。

ピンポンとチャイムを鳴らす。

こんな大きな家で、このチャイムの音がちゃんと聴こえるんだろうか？と、小さい頃から疑問であった。それにどういう訳かこのオレは、夕貴の部屋を見た事がなかった。普通だったら友人を部屋に招く事を拒むなどないはずなのだが、夕貴の家は違うらしい。

あれだけ人の家には身勝手に上がり込むくせにと思いつつ、最近ではそれも一色家に重要機密があって、人をみだりに入れさせないためであるからなのかも知れないと思い始めていた。

「どちらさまですか？」

その声が、よく庭を手入れしている敬三の声だと気付くのに時間は掛からない。

「すみません。隣の的場ですけど、夕貴君いらっしゃいますか？」
オレはいつもながら緊張するこの対応に敬語を思い出していた。

「ぼっちゃまですか？少々……」

一瞬途切れた声の奥で、

「晃？ちよっと待ってて。今行くから！」

かん高い声が大きな声を張り上げてるんだと分かるくらいに、マ

イクがぶれた。

一分と経たない内に玄関から夕貴が元気よく飛び出してくる。

「ごめん。お待たせ」

一瞬視線をはずしたくなるほどの軽装で夕貴が現れた。

「お前。半ズボンなんかはくなよ。目のやり場に困るだろ！」

オレは、ガラにもなく顔から火が出そうな気持ちに陥った。

「だってデートだろ？ 良いじゃんこのくらい。あゝ！ 何真っ赤にな
ってるんだよお」

オレの顔を下から覗き込むようにして顔を近づけて来る夕貴に、
なぜか心臓がバクバクし始める。

「莫迦言ってないで、早く行くぞ。そうしないと、探し出すのに時
間が掛かるからな！」

オレは、意味ありげな夕貴の視線を上手く交わして、香之淵にあ
る、オレ達の地区で一番大きな図書館へ出かける事にした。

自動自転車を、最寄りの駅の自転車置き場に止め、地下鉄に乗り
込む。

香之淵は隣街、南田中から二駅目に有る街であった。

オレ達が乗り込んだ地下鉄の中は、冷たい空気で、思わず引いて
行く汗を身体に直に感じ、風邪をひくかと思う程冷房がガンガンに
効いていた。しかし程なく、オレ達を乗せた電車は、目的地に辿り
着いた。

地下鉄をおりると、アスファルトの焼けた臭いが、ムワツとした
熱気と共にオレ達にふり掛かる。オレは思わず、顔をしかめた。

周りは建ち並ぶ高層ビルで、思わず見上げる。そうして歩いてい
ると、肩がこってしまふ。高校受験前よくこの道を歩いたものだ
が、建物の外装がかなり変わっていた。移り変わりの激しさと言う
ものが感じられて、何だか取り残された気がして、オレはちよつと
寂しい気持ちに陥る。

今、警察署の通りを右に曲がる、その先には香之淵図書館が聳え

建っていた。その建物を眼前に、オレ達は行き交う人々にまぎれて、足早にその図書館へと急いだ。

中は、寒くならない程度の冷房が程よく掛かっている。

「夕貴、二階のCD検索室に行こう」

オレは、夕貴の肩をぽんと叩いて階段を上るように進める。

「何？もしかして、昨日のカセットテープに入ってた曲を検索するつもり？」

「まあな。民族音楽っぽかったから、そんなに大変な作業じゃないと思うけど、夕貴も手伝ってくれるかな？」

今すれ違った人が、オレ達を眺めて行く。

「そんなに気になる訳？」

「まあな、だって、送り主の名前が『M・A・I』だけじゃ、何の事だかさっぱりだぜ…きつとこの裏には何か隠されているんだとオレは思うんだ」

いきなり探偵じみ事を考えるオレを、夕貴はヤレヤレという表情でオレの顔を見上げている。

「わかったよ、付き合うよ……」

最後にはお手上げと、両手を上げて夕貴は、オレの横に並んで歩き始めたのである。

CD検索室は夏休み後半にもかかわらず、大盛況であった。部屋に入ると、クーラーが効いているのか効いていないのか分からないくらいに、人で埋め尽くされていた。

「どうするの？これじゃ、検索機使えないよ。使えたとしても、閉館する頃じゃないかな……」

夕貴は、人に押しつぶされないように、必死に自分の身を肘で守っている。

「しょうがないな……」

「何？諦めるの？」

ちょっと嬉しそうな夕貴の顔に、ムツとしたオレは、

「CD図書館に移るぞ。こうなったら、意地でも探し出してやる！」
半ばヤケになって隣のCDを保管している部屋へと足を伸ばそうとした。

「ちょっと待ってよ！ボクも行く〜！」

夕貴は慌ててオレの後に続こうと人混みをかき分けていた。

隣の部屋はいたって静かであった。オレと、夕貴は民族音楽と配されているコーナーへと足を運んだ。

「げっ！こんなに有るの？」

ズラーツと並んでいるCDが目飛び込んだ時、オレ自身思ってもいない程の量に目眩がした。こんなことなら、やっぱりCD検索室で待ってれば良かったかも知れない。昨日の夜、カセットテープから曲をRに焼きつけた努力も水の泡であるのだから。

「あきらめた方がよいよ。晃？」

夕貴はもう疲れたと言わんばかりに、その場にしゃがみ込む。確かに諦めるより仕方ない。と、思いに到っていた時、

「やあ、的場に、一色じゃないか。お前達、民族音楽に興味でもあるのか？」

聴き慣れた声がオレ名を呼んだ。

「あっ。南キャプテン……それに、岩泉さん！」

オレと、夕貴は驚いた表情で二人を振り返っていた。こんな所で会うなんて、なんとも奇遇である。

「なんてCD、探してるんだい？」

小柄な南キャプテンが問いかける。

「ええ。一応探している曲のコピーは録って来たんですが、何しろ曲名が分からなくて、困ってるんです」

オレは正直に答えた。

「真迦だな。だったらCD検索機でCDをシンクロさせて来たら良いじゃないか」

「ええ、そうしたいんですが、余りの混みようで時間が掛かりそう

なんですよ!」

夕貴はちよつとムツとした表情で、岩泉副キャプテンに言い放っていた。夕貴はこの岩泉副キャプテンのことが余り好きではないらしい。普段から、夕貴にしては愛想をもって接しない所から判断する所だが。

「へえ。じゃあちよつと聴かせてくれないかな?俺、実は民族音楽オタクなんだ。もしかしたら聴いた事有るかも知れないから」

朗らかに言ってくれる南キャプテンは、いつもながらなんて温厚なんだろうと俺は思った。

「これなんですが……」

オレは、背負っているリュックを下ろし、中から一枚のRを取り出した。

「へえーどれどれ……」

ウオークマンのヘッドホンを耳に掛け、南キャプテンはオレのRを聴き始めた。暫くすると、

「これは……」

と、目を見開く南キャプテン。

「どうしたんです?何か分かりましたか?」

オレと、夕貴。そして岩泉副キャプテンは、そんな南キャプテンの顔を覗き込んだ。

「分かったよ、確かこの辺りに……」

南キャプテンはまるで生き字引のようにCDを探し始めた。その行動を見守っているオレ達三人、

「有った。これだ!」

南キャプテンの手が止まった先を覗き込む。

そこには、『時間よ永久に……西園静』というラベルのCDが目に入った。

「透き通った綺麗な曲だろ?実は、俺のお気に入りとして、家にあるんだ。なんでも、輸入盤で、この作曲者はオレ達がいる惑星ソリルの住人ではないらしい。まったく貴重なCDだよ。それにしても

良かったな、借りられてなくて」

「へえ……」

そのCDを棚から抜き出して、南キャプテンがオレに差し出してくれた。オレはそれを受け取り、まじまじと眺めていたのである。

「それじゃ、明日部活で会おう。くれぐれも体調は崩すなよ!」

そう言い残し、南キャプテンと岩泉副キャプテンは、この場を立ち去って行った。

オレと、夕賃もこのCDを借り終わると、速やかにこの図書館を後にしたのである。

#3 西園 静

▼西園 静

オレは家に帰宅すると早速借りてきたCDを聴き始める。カセットテープより音質の良いこの曲は、すんなりオレの心を満たした。そして、何度聴いてもこの曲は、懐かしい気持ちをオレにもたらしにくれた。

CDに入っている他の曲も何故だか聴き覚えが有る。それを何処で聴いたのかさっぱり分からないオレは、ケースに入っているインデックスを手に取り眺めていた。

そこには、この曲を作曲した人について簡単に記されてあったのである。

『西園^{にしぞのしずか}静。地球。日本。東京都出身の民族音楽研究大学出身。数多くの民族音楽を研究し、自らも民族音楽を手掛ける。西暦2590年今に到るまでに58曲もの曲を発表。多数の支持者に受け入れられている』

この紹介文を読む限り、結構有名な作曲家らしいが、オレはその人を知らない。しかし『地球』という文字がオレを引き付けて止まなかった。

『地球』それは、オレ達種族がここ『ソリル』に移民する前の惑星。もう滅んでいるもの。ならば、移民する時にこのCDは一縮に運ばれたのであろうか？

オレは歴史の教科書を取り上げる。オレ達が、この『ソリル』に移民した年と見比べてみようと思ひ立ったからだ。

すると分かったこと。地球の歴史で言う所の西暦2230年が、オレ達種族の移民した年に当る。つまり、このCDが発表された年は、移民後の『地球』の年に当るということになる。

これは、地球が滅んではないと言う事の証ではないのか？

じゃあ何故オレ達は、地球を離れなければならなかったのか？その辺りは全く歴史の教科書には記されていない。肝心な所が抜けているのである。オレは齒がみしていた。何とも言いがたい自分の知識のなさに……

しかし、送り主である『M・A・I』はこの曲で一体オレに何を伝えたかったのであろうか？全く分からない。差し詰め、このように地球という惑星に関して疑問を持った事ぐらいいしか収穫は無かった。

いや、このことが問題であるのかもしれない。オレは階下にいる恵に訊いてみようとその部屋からから足を踏み出したのである。

「地球の事が知りたい？」

恵は突然何を？という表情でオレを見ていた。恵はというと、出版社から帰ってきて急いで夕飯の準備をしていた。

「そう、地球。一体何でオレ達はこのソリルに移民して来たんだ？」
カレーを煮込んでいるらしく、匂いがキッチン中に立ち籠めていた。

「さあ、何故かしらね……授業じゃ習わなかったから、気にも止めなかったわ。地球が滅ぶ危機だったからじゃないの？」

当然と言えば当然の事である。

「それが滅んだ訳じゃなさそうなんだ。昨日のカセットテープの曲名を探しに、今日図書館で擦して来たこのインデックスに、地球の年が書いてあったんだけど……」

オレは恵にそのインデックスを見せた。

「ふーん。なるほど……確かに変だわね。地球が滅ぶ危機でない以上わざわざ危険を覚悟に、このソリルに移民する必要なんてないわよね」

恵は、お玉を持ち直して考え込んでいる。

「でも、実際移民している。何かの試みがあったのかな？そう書えば、『ネオ・ロマンサ』って一体どうやってオレ達子供を生み出し

てるんだろう？女性と言う種がないのに」

オレの中に次々と疑問が生じて来る。しかしこの疑問は、今に始まったことではなかった。

「それに関しては、生物で習ってるんでしょう？両親の精子を、『ネオ・ロマンサ』にあらかじめ登録して、ある方法……つまり、科学的な方法を用いて子供を作る。確かにこの方法を私達には公表してはくれないけど」

グツグツ音を立て始めたカレーが気になるのか、恵は視線を鍋に戻す。

「そりゃあ習ってはいるけど、やっぱり不思議じゃないか……実際そんな事ができるのか？」

「その結果、晃はここにいないじゃない？」

終には呆れ果てたように、カレー鍋に身体を向ける恵。

「ほらほら、いつまでも下らない事考えてないで、夕飯出来たわよ。手を洗って来なさい。夕飯にするから」

恵は再び忙しそうに動き始めた。

仕方なくオレはこれ以上恵に話し掛ける訳にもいかず、言われた通り、手を洗いに洗面所に足を向けた。

何かやっぱ腑に落ちない。何かが間違っている気がして来た。

それがなんなのか分からず、モヤモヤした気持ちでオレは夕食を頬張っている。それは生きるために必要なことだ。分かってる。だが、何か肝心な事が欠けているような気がして来る。一体なんだろう？

そして俺は、その、『ネオ・ロマンサ』を見学できるその日まで、もやもやする事となるのであった。

#4 ネオ・ロマンサ

▼『ネオ・ロマンサ』

それから一週間、オレはモヤモヤの訳が解らず日々を過ごしていた。夏休みの後半は、思ったより早く過ぎて行く。

まるで、この時を急いでいるかのよう……

部活ではそのモヤモヤのせいもあるのか、オレの記録はやはり伸び悩んでいた。

その事に気付いているのかいないのか、夕貴はオレに合わせて会話をして来る。オレは、そんな夕貴に感謝していた。

「悪いな、夕貴。気を遣わせて……」

水飲み場で、タオルを浸しながら礼を言う。

「いいよ、何か考えごとがあるんでしょ？それくらい判ってるんだよ。一体何年ボクと付き合ってると思う？お見通しだって！」

夕貴は、顔を洗い終わり、水飲み場の壁に寄り掛かりながらそう答える。

「そうだな。夕貴がオレの家の隣に引っ越して来てから十年経つか……」

オレはその時の事を思い出していた。

小学一年生の時、よく一人で遊んでいた隣の広い空き地に前触れもなく、大きな家が建てられる事になった。オレは、その愛着の有る空き地に入る事が出来なくなり、大いに悲しんでいた。

そんなある日、その家に住むであろう家族が、その空き地の外から作業の様子を見ていることに気付き、自分の部屋の窓から眺めていたのである。

その家族の中の一人の少年は、作業の様子を見ている中、ふと、

視線を泳がせた。そしてその視線の先にオレの姿を見付け微笑んできた。

オレは、その笑顔にどう応えたら良いのかすぐには判断できず、目を見開いていた。

しかし、少年は何を思ったのかオレに手を振って来たのである。

戸惑ったオレだったが、その少年の笑顔に吊られて手を振り返した。その少年こそが、夕貴であった。

そんな夕貴は、引越し早々オレの家にやって来て、オレに挨拶を交わして来た。

その次の日も、次の日も、毎日のようにやって来る。オレはどう対処すれば良いのか悩んでいた。今まで友達というものがいなかったからだ。

そんな時、

「晃くん。友達になってください!」

と惜し気も無くハッキリ言ったのである。

一週間も通わせて、嫌だ。とは言い切れなかったオレは、流されるまま夕貴と友達になった。

夕貴は、利発な子供で、いろいろな事を知っていた。そんな夕貴を見て来たオレは、すぐに夕貴に魅かれて行き、何でも話し合える本当の友達になれたのである。

「実は……」

オレは、色々と生じて来た疑問を夕貴に打ち明けた。しかし、こんな誰も不思議と心に止めないような事を考えているオレの事を、夕貴は笑ったり呆れたりしない。

「悩みごとはそう言う事だったんだ。だったら明日の『ネオ・ロマンサ』を見学する時にでも訊いてみたら良いんじゃないかな?きつと教えてもらえる事が有ると思うよ」

夕貴は、コロコロと微笑みながら、オレにそう言った。

「でも、質問しても平気かな?」

「大丈夫だよ。見学に行くんだよ？ちゃんと答えてくれるって！」
夕貴がそう言ってくれると、なんだか無理な事も可能になって来る気がしてならない。

オレは、明日に気持ちが飛ぶ。そう、どんな質問をしようか。オレの心の中は、夕貴に感謝する事と、その質問の事で一杯になっていったのであった。

「ところで、明日の事なんだけど……」

こうした夕貴の言葉で、部活の終わったこの時間、体育館横の水飲み場の階段に座り、オレ達は明日の段取りを相談する事に夢中になったのであった。

次の朝、恵に起こされることもなく早く起きたオレは、下の洗面所で顔を洗い、歯を磨き終えてキッチンにいる恵に挨拶を交わす。

「あら、早いね。雪でも降るのかしら？」

恵はキッチンの奥に有る出窓から外を眺めるようにしてそう答えた。

「昨日も言ったじゃないか。今日は、念願の『ネオ・ロマンサ』に見学しに行くって！」

オレは、恵の行動にちよつと頭にきて声にドスをきかせた。

「あら、そんなことは知っているわよ。やあね、ちよつとしたジョークなのよ。私が起こさなかったって、ちゃんと起きられるって事で証明できたじゃない？これからも、私の手を煩わせないようにしてくれたら有り難いんだけどなあ？」

恵は、味噌汁を、おたまでかき混ぜながら、オレを背にして答える。

「そうそう、今日、望ちゃんが帰ってくるから夕飯までには戻って来てね。久し振りに三人で外食するわよ」

恵は何かしら楽し気である。

「あっ。今日だったっけ？望帰って来るの……何だかんだ言って、一週間延びてるんだから、しょうがないよな……」

二、三日が、今まで延びているのは、君々と望むが、望が我が俤を言ったせいであろう。今に始まった事ではないが……

「そうよくだから早く帰って来てね。久しぶりの親子水入らずなんだから！」

力を込めて発言する恵に同情して、

「分かった。早く帰ってくるよ。あつ、味噌汁煮立ってる」

その言葉に、慌てて火をとめる恵。その様子に、何だか微笑ましい気持ちちが溢れ出す。そんな気持ちをそのままに、オレは十時まで今まで溜まりに溜まっていた夏休みの課題を一部片付けて、待ち合わせの時間になると、オレは早々に切り上げて玄関を後にした。

門前に、夕貴が歩いて来るのが見えて、オレは声を掛けた。夕貴は目をパツと輝かせ、そしてほころんだ顔でオレを見た。

「昨日打ち合わせしたように、秋野山まで、電車を乗り継いで行くよ」

自動自転車で、オレ達が利用する駅、南田中駅まで、足を伸ばしている時であった。夕貴は昨日の事を振り返りながらオレに話し掛けている。

「それは分かっているって！所でさ、本当に時間までに着くのかな？」
オレは自信なく問いかける。

今、額から頬に掛けて一筋の汗が流れ落ちるのが感じられた。何とも言いがたい、夏の晴れ渡った青空がオレ達の上に覆い尽くしている。

「うん。昨日も言ったように、ここから一時間半もあれば到着出来る所だよ。三十分もの時間を余分に見込んでるんだから、心配しないで大丈夫！」

風で揺れている夕貴の前髪の下に覗いている額にも、汗が光っている。

「夕貴が自信持ってるようだから、大丈夫だよな。ワリい。心配する事でもないか」

オレは、話題を摩り替えようと、

「ところでさ、夕貴？」

「ん？」

「夏休みの課題は、出来てるか？」

当然やってくるであろう夏休みの終わり。まだオレは、半分以上の分量が残っていた。

「うん。あと研究課題が残ってるだけで、他は済んだよ……まさか、晃。今年もボクのをあてにしてるとかって言うんじゃない……」

オレの方を疑いの眼で見ている夕貴。そんな夕貴をしり目に、

「そのまさか。なんだな……へへへ」

オレは実際の所を唱えた。呆れた夕貴の顔には、もう仕方ないな……という色が見え隠れはしているものの、怒りもあるようで、トゲトゲしい口調が耳にたこができるかとも思える程だった。

「しょうがないな。帰ったら、ノート持って行ってあげるよ……でも、丸写しは許さないからね！」

オレは今年も、夕貴の世話になることができるようである。

南田中駅に着き、自転車を近くの駐輪所に止めると、オレ達は急いで駅のプラットホームへと急いだ。

「南田中。南田中この電車は、桑折灘終点です」

駅のプラットホームでのアナウンスが周りに響き渡る。

「御園神前で、一旦電車を下りるよ」

夕貴は、オレの腕を掴んでそう言うのと、今到着した電車に乗り込む。オレは、言われるがまま夕貴に従った。

その時、誰かに見られている視線を感じ、オレは電車の中を見回した。しかし、誰一人として、オレを見ている者はいなかった。

「どうしたの？ここ空いてるよ、晃。座ろうよ」

夕貴は、長旅になるであろう事を考えて、席を確保しようとしていた。

「……ああ」

オレは、言われるがままその席に着く。しかし、何だか気持ちが落ち着かない。確かに視線を感じる。

「でさ……」

オレの隣に座っている夕貴の言葉も耳に入らない。伺だろうこの感じは……悪意とは違う何だか、オレの事を観察しているような視線。

「ちょっと聴いてる？ 晃く！」

オレの顔を両手の平で挟み、夕貴は自分の方を向かせるようにぐいと力を込めた時、オレへの視線はフツと消えた。

「あっごめん……何？」

大きく膨らんだ頬を突き出した夕貴の顔に驚いたオレは、

「夕貴、ごめん！ 何！？」

慌てて、謝り直した。その後、何度も頭を下げたオレは、視線の事も忘れ、ただ御蘭神前まで夕貴の顔色だけを伺っていた。

御蘭神前に到着した電車は、オレ達が降りた後速やかに走り去って行った。その様子を見送る事なく、次により換える電車が来るホームへと急いだ。

その時、オレに注がれる視線の主が誰であったのかを探る為、キョロキョロと辺りを見回してみた。しかし、誰一人見知った者はいないようで、オレは居心地の悪い感じを受けつつも、夕貴について行った。

「七番ホームだから、この階段を上がった所だね」

説明を加えながら、夕貴は先導してくれている。そしてオレ達は、七番ホームの梓川行き電車に乗り込んだ。

その電車は、サラリーマンが、会社間を行き来しているらしく、スーツ姿の人達が多く乗っていた。

「夏休みだって言うのに、社会はこんなに仕事をしている人がいるんだな」

オレは、ボソリと呟いた。

その言葉に、夕貴は、

「まあね、この地帯で仕事している人は、もっぱら工場と会社を行き来してる人が多いんだよ。何たって、工業地帯だからね」

流石に、夕貴はよく知っている。

そんな時、何処からか、あの曲が流れて来たのである。オレは耳を疑った。

何故こんな所で？

再びキョロキョロと、狭い電車内を見回す。しかし、大人達の誰一人として、ウォークマンなど聴いている様子はなかったのだ。それでも、オレは必死に捜そうと目をこらした。

「さっきから、一体誰を捜しているの？」

そんなオレの様子に、夕貴は不審げに問いかけて来た。

「何だか視線を感じるんだ……それに、あの曲が……」

心ここにあらずのオレに問いかけた夕貴は辺りを見渡した。

「曲なんて聴こえないよ……幻聴じゃない？」

そう。幻聴だったら良い。しかしこんなにはっきりと、オレの耳には届いている。

「いや、確かに聴こえるんだ……何でオレだけに聴こえる？」

そんな時、ドアの近くに立っている一人の少年が、ヘッドホンを身に付けているのに気が付いた。

「あいつだ！」

オレは、混雑している中その少年を見付けたのである。まだ、中学生ぐらいの小柄な少年が顔を隠すように深く野球帽を被っている。ラフなフードつきTシャツに半ズボン。何処から見てもあやしい、そう言えば、御蘭神前の駅でもこの少年を見かけたような気がする。オレは何かを訊き出さなければならぬような気がして、いてもたってもいられなくなっていた。しかし、人が多すぎてこの場から動く事は適わない。

そんな時、一瞬少年はオレの方を見て、何か言いたげな表情をしていたが、直ぐさまそのドアの前から、オレの視界から外れるよう

に身を引いた。オレの见えない所に身を隠した少年は、オレ達が次に降りる駅、梓川駅までこの状態は続いたのである。

「やっと、梓川に着いたね。って、ねえ、晃！どうしたの？」

オレは、駅に着くや否や、今まで我慢していた気持ちを押さえ切れず、少年の姿を捜していた。しかし、プラットホームに降りている人の中に、少年の姿は見受けられなかった。

「変だな……」

「変なのは、晃だよ！」

オレの不審な行動を、夕貴は腕組みをしながら見守っていたのである。

「こんくらいの背格好をした少年が、オレの事を見てたんだよ……絶対あいつだ！」

それでもオレは引かなかった。

「晃！『ネオ・ロマンサ』と、その少年と、どっちが大切なの！」

そう、オレの痛い所を突かれて曖昧な気持ち揺らぐ。

「今は、そんな少年の事より、目的地に着くことの方が優先だよね？ だったら早く、秋野山に向かおうよ！これが最期の乗り換えなんだから！」

夕貴はオレの手を取り、引っ張るようにして秋野山終点の電車に乗り込もうと五番線のホームへと夕貴はオレを導いた。

その後、あの少年の姿は見当たらなくなった。

何のつもりで、オレの前に現れたのか？結局この時は分からずじまいだったのである。

秋野山終点まで、何事もなくゆったりと、電車で揺られながらオレ達は旅を続けた。

小一時間もすると、アナウンスが流れる。

「次の駅が終点、秋野山だよ。忘れ物はない？」

「ああ、大丈夫だよ」

オレは、手荷物のリュックをしっかりと抱えて夕貴に答える。電

車は、ゆっくりと目的の駅に到着した。

「この駅を出ると、駅の指示に従って、北口から五分の所に『ネオ・ロマンサ』の研究所があるんだ。まだ、三十分程の余裕が有るけど、このまま研究所に向かう？それとも腹ごしらえでもして行く？」

オレは、お腹の調子を伺ってみる。

すると、昼飯を食べてないお腹がキューッと鳴るのが分かり、後者を選ぶ事にした。

「実は、ボクもお腹が空いてたんだ。駅近くに喫茶店くらい有るだろうから、寄って行こう！」

夕貴の言葉でオレ達は、駅向いのハンバンガーショップへと駆け込んだのである。

腹ごしらえをしたあと、話も盛り上がりオレ達は、『ネオ・ロマンサ』へと足早に向かった。時計の時間は、約束の時間15分前をさしている。十分余裕の有る時刻がオレ達には有った。

『ネオ・ロマンサ』の研究所は、遠目からもハッキリと分かる判るに程に大きな敷地にある。

白を貴重とした、モダンな建物。それに、宇宙空間にでも来たような、薄黄緑色の透明なドームがあちこちに立ち並んでいる。この時のオレには、なんとも言いがたい程未知の領域であった。幅広い門の所で検問をしているらしく、一時足止めを食らうこととなる。

「今日、1時に見学をする事になっている、一色夕貴と、的場晃ですが……」

夕貴が、身分証明書を。つまり学生証を胸ポケットから取り出して、証明している。

「晃も、学生証出して！」

夕貴の指示通り、オレはリュックから学生証を取り出し、守衛のおじさんに見せた。

「連絡が入っております。分かりました。中にお入り下さい」

そう勧められて、オレ達は、門を潜る事が出来た。

ガーツと、横に開いて行く門。なんとも嚴重な構造であるのか、重たそうな門は高さも兼ね備えている。いや、後で知る事となったが、その門に仕掛けられている有刺鉄線には人が感電死するほどの高圧電流が流れているらしかった。

そんな門を潜り抜けると、道に沿って真直ぐ進むオレと夕貴。次第に建物の中に入るための入り口が見えて来た。自動ドアの前で、オレ達は名乗りを上げると、すんなりと開かれたドアの前には、受け付けのカウンターがある。

すると一人の男が、

「一色様、的場様、よくお越し下さいました」

と、深く一礼する。その男の様子で、夕貴の存在を改めて知らしめられたような気がした。

「ボク達は何処に行けば良いのかな？」

さっそく問いかける夕貴。オレはなすすべも知らずに、夕貴の行動を見守っていた。

「これから御案内致しますので、わたくしに着いて来て頂けませんでしょうか？わたくしはこの通り、松永と申します……おいつ、オレはこの方々を案内するから後の受付は任せたぞ！」

胸に付けている、名札を誇張してその男は、名乗りを上げ、その後奥にいる人に一声かけると、

「どうぞこちらです」

オレ達の道案内を始めた。

廊下もやはり白を貴重とした色彩で、天井が高く、所々監視カメラが設置されていた。

オレは緊張しながら夕貴の隣を歩いている。

「かなり嚴重な設備なんですね……」

オレは、思ったままの事を口走ってしまう。

「『ネオ・ロマンサ』の機密を他に流す事は出来ませんかね。十分な配慮がなされております。外の検問近くにあった壁には高圧電

流を欠かさず流していたりしますので、くれぐれもお気をつけ下さいね。そう、今日見学して頂く所は、そう機密に開わるような所ではありませんが、良い勉強になって頂ければ幸いです」

そんなことを話しながら歩く。暫くすると、灰色の透明な自動ドアが立ち上がった。

「登録ナンバー209です。見学のお客さまをお連れ致しました」
ドアに向かって言ってるのかと思いきや、ドアの上にあるスピーカーに向かって言っているらしかった。どうやら、音声入力で、開くドアらしい。

ドアの向こうには、ドーム状の建物があるらしかった。

「音声確認。209お入り下さい」

抑揚のない、機械音が流れ、オレ達は中に入って行く。

「この先は、わたくし達が、まだ地球に住んでいた頃に生息していた動物がいる地区です。もちろん、今わたくし達が住んでいる『ソリル』には生息していない種も居ますので、じっくり見学して下さい結構ですよ。それと、『メス』と君う種族もいます。これは、『ソリル』にはいない種ですので、できれば後学の為見ていただければと思います。30分の間は自由時間ですので、30分後ここに戻って来て下さい。それでは失礼します」

そう告げられると、オレ達二人は、覆い茂った草むらへと入っていったのである。

「『アフリカ』って、『地球』のどこなんだろうね？」

近くに有る透明ボードにそう記されている。しかし、それがどう言った所なのか分からないオレ達は、きっとこんな風景の所があったんだとしか理解に苦しむ他なかった。

足下は、少し水で湿っていて、歩きづらい。しかも、異様に暑い。

「あっ、あそこに何かいる！」

夕貴は、フェンスの奥に潜む、首？の長い黄色い物体を指差した。
「『きりん』だってさ。こんな首の長い生き物見た事ないよな」

オレは、近くに浮遊している透明ボードの解説を読み上げながら答える。

「あっちには、鼻？の長い生き物がいるぞ！」

大きな牙に、その上にのっかるように長く垂れている鼻。

「『アフリカ象』だつてさ。でっかいな」

鼻を自由に動かして、高い所にある植物を採って口にはおり込んでいる。初めて見る生き物達は、オレ達の未知なる想像力を掻き立てて行く。

どんどんと、道に従って進んで行くオレ達は、いろんな動物を見た。ライオンに、かばに、マウンテンゴリラ。それに、ラクダに、コブラに、ハイエナに……思わずカメラを持って来たら良かったと思わずには居られないほど程たくさんの動物を見て回った。

そんな中、興奮が冷めないまま時間が来たので見学途中では有るが、引き返す事になったのである。

「どうでしたか？この『ソリル』にはいない動物達がひしめいていたでしょう？」

「はい。もっと時間が有ったら、ゆっくり見学していたい気分です！」

オレは、心からそう思っていた。

「でも、どうして、『ネオ・ロマンサ』でしか生息していないんですか？」

次に見学する場所に導かれている途中、夕貴は疑問を持ちかけた。「それは、ここですか、生きられないからです。わたくし達の住んでいる『ソリル』では、ネコ、犬、鳥などのベツトしか生息するとは適いませんでした。しかも、なぜか、『オス』という種しか生臯できません。それに、虫すらも生息が出来ませんでした」

「虫？」

オレ達には分からないものがあるのだと知り、オレは問いかける。「そう、蚊、ゴキブリ、蟻、蠅、蜘蛛などをさします。さっきの動物たちが生息するところで飛んでいたり、木に生息していたのです

が、気付きませんでしたか？」

「あっ、そういえば、小さな物体が飛んでいたような……」

夕貴は思い出したかのように頷いた。

「あれが、虫？」

「正確に言えば、蠅ですが、他にもいろんな種類の虫がいます。図書館に行けば、もしかすると古い図艦などから調べる事が出来るかもしれませんが……近代的な図書館で残っているのは、数少ないかも知れませんね」

そういうと、またもや、第2のドアが目の前に立ちふさがった。

松永は、再び音声を入力する。

「ここには、『地球』のジオラマがあります。滅多に見られる代物ではございませんので、これを機会に、よく見て来て下さい。同じく、30分後にこの場所に集合して下さいね」

中に入ったオレ達は、暗い部屋の中、ボーツと浮かび上がる、青い惑星を象どった大きなジオラマを見た。

その惑星の下には『地球』と書かれた透明ボードがライトニングされてあった。

「西暦2230年。この惑星は核戦争の為、生息不可能となるだつてさ……」

夕貴がそのボードの文字を読み上げた。

変だ……核戦争が起こったなら滅んだはず。あのCDは何故存在するんだ？オレの中でフツリとあの疑問が蘇った。

「ちよっと先に進んでみようよ！」

オレ達は、地球のジオラマを後にして次のセクションに進む。そこには、光る地図が、大きく貼り出されていた。

「これって『地球』の地図だよ。あ、この『アフリカ』てのは、さっき見た動物達が居た所じゃないかな？」

夕貴は、直ぐさま地図に飛びついた。

オレはというと、肩に引っ掛けているリュックから持って来たCDを取り出し、インデックスを見つめる。そして、日本と言う地名

を探そうと思い立ったのである。

すると、地図のまん中あたりに、その地名を見つけ出した。

「あった……東京ってのは何処だ？」

オレは、小さなその日本という地名の中から東京と言う地名を擦そうと目を見張った。

「ここだよ」

背後から突き出された指が指し示した。

「ありがとう、夕貴」

オレは、背後にいるであろう夕貴に礼を言おうとしたのだが、何だか違和感を覚えて、振り返った。するとそこには、電車の中で見た少年が肩ごしにオレの後ろから手を差し出していたのである。

「お前……一体誰だ……？」

オレは、身を引く形で、地図に寄り添った。

「舞。まい西園舞。にしそのまい やつと会話ができるね」

その甲高い声は、まだ少年の物であり、色白い肌は、不思議とこの暗い部屋に浮かび上がるようで、まるで幽霊を見ているかのようだった。

「何か用かよ？ お前ずっとつけてたんだろう？ というより、何でここに入れたんだ？」

オレは、何を話しているのか自分でも判っていない。ただたくさんの疑問が溢れだして来る一方だったから。

「君に会うのが目的だったから、今ここにいます。君は、何故ここに

いるの？」

その問いかけに、
「オレは、何故地球が減んでもないのに、減んでるなんて言う事になってるのか知りたいからここに……後は『ネオ・ロマンサ』に興味があったからかな……」

素直に答えた。というか、とっさにそうとしか答えることが出来なかった。

「ところで、夕貴は？」

オレは、夕貴のことを捜した。つい先ほどまで、『アフリカ』を探し出して、喜んでいたのにこの場にいる様子がない。

「夕貴って？」

「オレと一緒にいたやつだよ。お前！夕貴をどうしたんだ！」

オレは、その舞と言う少年の胸ぐらを掴んで揺すった。

すると、その少年の帽子が床に落ち、束ねられていた長い髪がバサリと舞い落ちた。そして、今初めて顔がハッキリと露になった。

「！」

オレは、その顔を見て驚いた。

「お前……一体誰なんだ……？」

そう、オレは驚愕してしまったのだ。

その顔は、学園の守り神とも言うべき、憧れのビーナス像と瓜二つであったからである。それに、よく考えると、『西園』という名前に覚えがあることに気付く。

オレの手は、その少年から離れ、空を彷徨っていた。その隙に少年は、床に落ちた帽子を拾い上げて被り直す。

「ねえ。舞と言う名前に覚えがないかな？」

途方に暮れていたオレの意識は、その言葉に気付き、

「舞？……えっと……」

と、考え直していた。

「じゃあ、この曲の事は？」

ヘッドホンを取り出し、オレの耳に掛けて来る。

「この曲は、オレの所に送られて来た曲……もしかして『M・A・

I』って、舞と読むのか？」

驚きの余り、声が上がった。

「御名答〜！」

「じゃあ、君が、あの小包を送って来た張本人ってこと……？」

オレにはさっぱり分からなかった。

何故、舞と言うこの少年はこんな回りくどい事をしたのか？

「君には知っていて欲しかったから……この世界が作り物であるっ

て事を……」

舞と言う少年はぼそりとそう言った。

しかし、オレには何の事だか、さっぱり分からなかった。

「じゃあ、この先の見学を楽しんでよ。その先に見る物は、決して、嘘じゃない。そんな世界を君は体験出来る事になってるから……舞が、導いてあげるよ？その真実を君がどう受け止めるかは、君自身にかかってるけどね？」

少年の姿が暗闇にかき消されるかのように、消えて行く。オレが手を伸ばした時には、すでに消え去った後であった。

まるで、夢を見ているかのようにであった。そんな立ち尽くすオレに、

「どうしたの？ 晃。こんなところで、ボーッと突っ立ったりしてさ？」

横から肩を叩く夕貴がいる事に気付き、オレは我に返った。

「お前何処にいたんだ？」

「何言ってるの？ 老人じゃないんだから、ボケないでよね……ずっとここに居たよ。それより時間だよ。早く戻らないと！」

オレの背を叩きながら夕貴は行こうと足を踏み出している。

それに気付きオレも足を動かした。幻を見ていたのか？とオレの中で混乱が生じる。

しかし、幻にしたら余りにもリアルすぎて気持ち良い物ではない。それにあの意味ありげな言葉……この先のオレの行動を予知しているかのような……

オレの心は揺れていた。この先一体何が起こると言うのか？ 果たして、どんな真実が分かると言うのか？

その事を踏まえると、今の疑問なんて吹き飛んでしまいそうだ。しかし、『地球』は滅んではない。その事をオレは問いたただいたかったのである。

#5 西園 舞

▼西園舞

再びオレ達は、松永に連れられて真っ白な廊下を歩き始めていた。オレは、地球の事を知りたいと、頭の中で緑り返し、呪文のように読み上げていた。しかし、行動に出るのには勇気が必要であったのである。その黙ったままのオレに夕貴は気を利かしてか、

「晃。何か質問が有るんじゃないの？」

と、訊いて来たのである。

「何ですか？質問が有るのですしたら、わたくしの答えられる範囲で宜しければ何なりとお訊き下さって結構ですよ？」

松永は、にこやかにそう答えてくれた。

しかし、その笑顔もオレの質問を聴くと、少し深刻な表情へと変化して行ったのをオレは見逃すことは出来なかった。

「『地球』が滅んでいない？そんなことはありません。確かに核戦争で滅んだとの史実が有ります。先ほどの部屋で、そのことはお分かりになったでしょう？」

「しかしこのように、CDのインデックスに記されています！」

「ご丁寧に持って来たそのCDのインデックスを渡したオレは、『西暦2590年』と記された文字を、三人で確認した。

言葉を詰まらせているようだった松永は、何を考えてか、

「これはきつと、誤植ですね。『西暦2590年』が存在するはずはありません。コンピューターの誤作動で引き起こされた核戦争の為、我々はこの惑星『ソリル』に移住した。これが真実です。よって、存在するはずのないCDが、今この場所に有るはずはないのです。良いですか？変なデマが生じてはいけません。このCDを何処で取得したのですか？売っている物では無さそうですね……」

その紙を眺めながら、問いかける松永。

「『香之淵図書館』です」

オレは、正直にそう答えた。

「図書館にこんな物があったのか……他にも何か間違えた物があるかも知れませんか……取り敢えず、これは返しておきますよ。この事は間違いであるので、これ以上騒がないように……」

それはまるで、オレ達に口止めをしているかのようだった。

オレは納得がいかなかった。

その理由は、西園舞という人物の、『作り物の世界』という言葉が引っ掛かっているからでもあった。このままオレは、その真実にこの先辿り着く事が本当にできるのであるのか？それを考えて、黙ったまま松永の後を歩いていたのである。

「晃……まだ考えてるの？」

オレが下を向いたまま物思いに耽っている様子を見て、耳もとで夕貴が囁き掛ける。

「ああ。どう考えても納得が出来ないよ」

オレの中で渦を巻く疑問が鳴り止まない。

「うん。ボクも納得がいけない……きっと極秘事項の一つに違いないよ」

夕貴も、今となってはオレに賛同してくれている。そんな時、オレ達は緑色のドアの前に立ちどまったのである。

「ここから先は、自由行動は慎んでもらう地区に入ります。わたくしの後に続いて、中にお入り下さい。わたくしが先導し、説明を加えます」

機械音が反響し、静かにドアが開かれる。

オレ達は、松永の後を適度な距離をとってついて行った。中は、精密な機械や、顕微鏡、試験管、ベルトコンベアーがあり、まるで科学研究所のような設備が整っている。そんな中、白衣を身に着けた人々が熱心に作業している姿が目に入った。

オレ達は研究所のガラス張りの通路をその様子を眺めながら、静

かに歩を進めて行った。

「ここは、貴方達が生まれたともいえる場所です。あちらに見える試験管や、冷却装置は、貴方たちの御両親の精子が保存され且つ研究材料として、この場所で安置されているのですよ。交配の方法については未だ発表段階にできませんのでこのまま説明は省かせて頂きます」

それだけ言うと、再び歩を進める。

「あのベルトコンベアーは？何処に繋がっているの？」

オレは、先ほどから気になっている事を尋ねる。

「あれは保管室へと繋がっているのですよ。保管するのは、子供をもうけたいという両親の意向もかねて、その日が来るまで大切に安置されるのです。知っていますよね？二十歳を過ぎたら結婚をした人達を中心にこうした精子登録がなされる事は？」

「はい。その事は学校で習ってます」

松永の問いかけに答えるオレは、授業で習ったことを振り返った。そう、『ソリル』では二十歳になるまでは結婚は出来ない。

ましてや、子供をもうける事も出来ない。

今は未来の事より今の事で精一杯のオレにとったら余り関係のないことではあるが、興味はある。そして今その保管室は、オレ達が進んで行く通路に従って繋がっている。

「保管場所は見せてはくれないのですか？」

夕貴はこのまま繋がっているであろう部屋のことを尋ねた。

「氷点下になる部屋にですか？」

「是非見せて頂きたい物です」

オレの興味は、一心に注がれた。

「防寒着を着用していただければ、中に入る事は可能です。入られますか？」

松永は、ちょっと気乗りしない様子であったが、オレ達の意志を汲んでくれたらしい。防寒着を身に纏ったオレ達は、自動ドアの前で少し足止めを食らったものの、上手く中に入る事が出来たのである。

る。

中は氷が試験管にこびり着くかのようになって安置されていた。どの試験管にも全て番号が記されており、どれが誰の物であるかの印が刻まれていた。オレ達はこの部屋をくまなく見回ったが何も不審な所はなかった。

「どうです？ 不思議な感覚に陥るでしょう？ このわたくしも、初めはただただ驚かされましたよ。こんな管理下に、わたくしと言う存在が生まれたかと思うと……」

松永は、額に腕を持ってゆき擦っている。

実際この目で確かめない限りこの異常な現象は納得できないであろう。

「そろそろこの場所を出ましようか？ 防寒着を身に着けているとはいえ、身が凍る思いがしますからね」

松永は、オレ達に声を掛けてこの場を去ろうと、ドアに向かって歩き始めた。

その時、

『お兄ちゃん……』

確かにささやかにオレに語りかける声が聴こえた。

振り返るオレ。するとまたもや声が聴こえて来た。

『この部屋を出て、機関室に向かって。そこで落ち合おうよ……舞、待ってるから』

その声は、聞き覚えのある声。確か、ジオラマがあった部屋に現れた少年の……しかしオレにしか聴こえなかった声だったらしく、立ち止まったままのオレに、

「晃！ 出るよ。もうここには用事はないだろう？」

夕貴の声で意識が戻る。

機関室？

オレは何の事だか分からないまま、この部屋を出た。それから、松永に連れられてオレ達は、この『ソリル』に移住したと言われる

場所を案内された。

そこは、宇宙船がある、だだっ広い空間であった。中央に備え付けられている宇宙船は、一体何人の人々をこの地『ソリル』へと移民させたのであろうか？

まるで、昔読んだ、ノアの方舟の話。人類滅亡の危機にノアとその一族、そして、罪のない動物達の冒険談。今でもオレの頭の中に大事にしまわれている。

「この船が私達の祖先が乗ってやって来た宇宙船です。当時、百名程の人々がこの船に乗り込んで来たそうですよ」

松永はその宇宙船のブリッジにオレ達を案内してくれた。中はオレには理解できないような機械類で埋め尽くされている。座席は二つあり、パイロットと、指揮官の為の椅子である事が判明したのである。

それからオレ達は、この船の乗客席へと導かれた。個室がいくつもあり、ロビーともいえる部屋には、テレビが配置されていた。テレビと言っても、この宇宙船の中での動向をみんなに報告する為の物であるようだ。まるで、小規模な映画館のような感じさえ与えて来る。

オレと夕貴はその部屋を出ると、食料を保存していたのであろう部屋へと導かれて行ったのである。

「ここは、核戦争が始まる前に保存していた食量が保管されていた部屋です。今では冷凍保存される事もなく只の部屋と化しています。適度な量の食量が用意されていたことでしょう。もちろん宇宙食ではありませんが」

「まるで、全てを見越していたかの用だな」

「備えあれば……ですよ。いつ何時、非常事態が起こりうるかも知れませんか」

「ところで、この宇宙船に乗った人達以外は一体どうなったんですか？」

夕貴は疑問を投げかける。

「他にも、宇宙船がありました、きっとわたくし達のように、何光年も旅をして、安住の地を探し当てた事でしょう」

しみじみとした空気がオレ達の中に広がる。

「オレ達は、運が良かったってことか……」

つぶやきがオレの口から零れた。

「もちろん、犠牲者となった方々もいますよ。逃げ延びることが適わなかった人達。そう考えるとわたくし達は運が良かったのです。神に感謝しないといけませんね」

松永は、両の手の平を組んでみせる。

オレは神なんて信じなくなかったけど、運命の尊さをこの時初めて感じた気がした。

「ところで、この宇宙船はもう使われる事はないの？」

改めて、オレは問い掛ける。

「機関室が、故障している以上、この船は動く事はありませんし、もっと最新式の船が設備されています。御覧になりたいですか？」

階段を降りながら語ってくれた松永の後を追いつけながら、

「良いんですか？」

オレ達は興味を覚え、是非見てみたいとそう言った。

「もう使用している船もありますよ。これからは、宇宙に出て行く時代なのです。もちろん『地球』から移住した者達と交信する為という目的もありますから……第一、女性と言う種族も、いずれかに住んでいる可能性も無きにしもあらずですからね？未知なる世界は、繁栄への第一歩だとは思いませんか？」

納得のいく考え方だった。

この不自然きわまりない世界は、オレ達にとって、本当に良い事なのだろうか？あのヴィーナス像。その面影に憧れるオレは、きつと……間違いでは無いと思われて来る。

「今、三時ですね。後一時間もあれば、御案内出来る事でしょう。その船は、三十分後に出立する予定ですから……」

オレは、何だか無性に身震いを感じた。そう、謡が上手く出来過ぎていたような気がして。

「こちらですよ」

松永は、オレ達を率いてこの宇宙船を後にした。

その時オレの耳に再び聴こえてきた声。

一望んでるいる答えは、今その扉を開ける――

ふと、今降りてきた宇宙船を振り返る。しかし誰一人としてそこにはいなかった。

『西園』……それはあのCD作曲者の名字。『舞』はその血縁者なのでは無いかと言う疑問。それがやっと飲み込めて来た頃、オレ達は旅立とうとしている宇宙船のハッチから階段を上っていた。慌ただしくかけ下りたり上ったりしている艦員達。その中をかいぐぐつてオレ達は中に入り込んだ。

「まだ時間に余裕がありますね。危険な所以外ならば、自由に行動しても構いませんよ。時間になったら、放送が入るはずですから、必ずここに戻って来て下さいね」

オレ達はその言葉に、あらゆる好奇心に満ちた気持ちを高ぶらせて、中に入り込んだ。始めに、エレベーターで三階まで乗り上げ、ブリッジに侵入。

艦長が、オレ達の婆を見て『何だこいつら』という視線を流す。

その雰囲気を押されそうで一瞬身構えた。

「見学に来ました！これからどの惑星に行くんですか？」

夕貴は興瞭深々に問いかけていた。

「……まず、この惑星『ソリル』の衛星『ディアノ』と、『トリル』に立ち寄り、その後、恒星の軌道上の惑星を探索する予定です」

この場合の惑星とは何処をさすのか？

「惑星って？『マルバトロス』や、『カイト』『ミトラポス』などです」

天体の事に疎いオレにも、何とか分かる惑星の名前だった。

「そこって、人間が住むことができる惑星なの？」

夕貴は目を爛々として問いかけた。

「未だ下り立った事は無いが、余り期待は出来ないな。さてと、そろそろ良いかな？」

せわしなく席を立つ艦長。中央にあるレーダーを確認するために席を立ったようである。まわりでは、通信の確認をとるための艦員が、何やらマイクに向かって話している。その時を見計らって、オレ達はブリッジを後にした。

ブリッジを後にしたオレと夕貴は、下に降りるためのエレベーターに乗り込んだ。

先に乗っている艦員がすれ違い様下りた。やはり訝し気にこちらを見ている。ちよつと気になったオレは、後、どのくらいこの船内を見学出来るのかを訊いてみた。すると、

「あと、十五分もすれば飛び立つよ。なるべく出口に近い所にいた方が賢明だね」

少し苛立ったような口調がオレの心に響いた。確かに現場の人にとつたら、オレ達はお荷物に違い無い。そうオレが痛感したわけである。

その話を聞いた夕貴は、

「まるで邪魔者扱いだね！仕方ないけどさ……」

と、肩をいからせ、膨れっ面でオレを見ていた。

「機関室って、何処にあるんだろうな？」

おもむろにオレは口に出していた。

「機関室？」

何故そんな所に？とでも言いたげな夕貴の顔は、オレの顔をまじまじと見つめた。

「そこで、あの少年が待ってるんだ……」

何故だか自分でも何を言っているのか分からない。そう、熱に魘された病人のように身体が言う事を効かない。果ては、勝手に地下

三階に行くボタンを押していた。

「ちょっと。晃！どうするつもりなの！」

夕貴はオレの身体を播さぶっているが、そんなことお構い無しにオレは、自分の中に潜む何かに押されて行動していた。

ガーツと、エレベーターの扉が地下三階で開かれると、一本道の通路が目の前に広がった。所々、青白い蛍光灯が縦長く灯っているの、なんとか歩いて行けそうだった。誰一人としてこの通路を通る者はいない。何だか不自然な気さえして来た。

「ねえ、ちょっと帰ろうよ。晃！ここは入っちゃいけないんじゃないかな？」

オレの腕にすがりつくようにして夕貴は喚いた。しかし、その言葉にも動ぜず、ただただその通路を歩いて行った。その先には、白い扉が立ちはだかっている。オレはその前で立ち止まった。その扉の上の部分には機関室と書かれたプレートがあった。

「……中に入るにはどうすれば……？」

自動ドアと言う駅には行かないらしく、どうしてもそのドアは開かない。

そんな際、通路の明かりが一斉に消えた。そして、

『機関室へようこそ』

まず手の平がスーツと出てくると、そのドアをすり抜けるようにしてあの西圈舞がオレ達の前に現れたのである。

「ひっ！」

夕貴は、オレの後ろにおびえるようにしてその舞から身を隠した。「約束どおり、やって来たぜ！それじゃ、聞かせてくれるよな？」

オレは、考えが纏まる事もなく呆然としたまま、意朧の固まりだげでただ核心をついた。

「誰？この子！」

夕貴はオレに問いかけてくるが、そんなことよりも舞に集中していたオレは、硬直した身体を動かす事さえ適わなかった。

『こちらに来て……』

舞は、オレの手を取りドアへと引き込もうとする。

「ちよっと、晃！」

引きずり込まれようとしているオレの身体を必死に止めようとしている夕貴。

「オレの身体は、このドアを通り抜ける事は出ない。止めろ！」

その瞬間、ドアがシュンツと開かれた。

勢い余って、機関室に倒れ込むオレと夕貴。そこには青白いオーラに包まれて、舞は宙に浮いていた。その様子を倒れた拍子に打ち付けた頭や腕を擦りながら見上げているオレと夕貴。

『もうこれで、後戻りは出来ないよ……秘密を知りたければ、その代償が必要になって来るのだから……』

空中でひらりとひと回りしてみせる舞。実に楽しそうである。

「西園舞！お前のいう真実とは何なんだ！約束通りここに来たのだから教えてくれても良いだろう！」

「ちよっと待ってよ！ボクにもちゃんと教えてよ。この子一体なんなんだよ。晃！」

オレの腕を揺すりながら問いかける夕貴。

『的場晃くん。お友達が舞の事聞きたがってるよ？教えてあげなきゃ！』

舞は野球帽を脱ぎ払うと、長い髪の毛をが宙を舞った。相い変わらず、青白いオーラが舞の周りを漂っている。

「……こいつが……舞がああテープを送りつけてきた張本人なんだよ……」

「えっ？」

揺すっていた腕の力が止まる。

「そして、この世界が『作り物』であるから、その答を知りたければこの機関室に来て伝言をオレに託したんだ……」

「……『作り物の世界』……？」

夕貴には、何がなんだか分からないとでも言うかのような表情でオレの前に飛び出た。

「何だよそれ！なめてんのか！冗談、ぽいっ！だよ。何の権利があってそんな事言ってるのか知らないけど、ボク達はちゃんとこうしてここで生きてるんだ！」

言ってる側から見る見る顔が赤く染まっているのが分かる。

何故だか息巻いている夕貴をオレは、初めて見るので、驚きの表情が隠せない。

『なんだか、この子、嫉妬してるみたいだよ。的場晃？』

「ムッカー！嫉妬して何が悪い！ボクは、晃のことが好きなんだ！後から出て来た君になんだかんだ言っただけで欲しく何か無いね！こうやって、晃やボクをからかうのもやめて欲しいよ！」

そんな中、サイレンのような音が聴こえて来た。

『そろそろ、出発の時間だよ。でも誰も君たちの事はもう記憶に無い。それがこの旅の代償。これから先は君たちのその目でちゃんと真実を見届けて来て欲しい。そして、出会った者達に、真実の愛を！』

舞は再びオレの前から身を隠した。静かな時間が過ぎ去って行く。

「ねえ……晃。あいつの言っていた事は本当なの？」

この暗い機関室の中で、オレと夕貴は壁にもたれて座り込んでいた。

「さあ、それは分からない。だけど、実際この船は動き始めている」
機関室の歯車はひっきりなしに回転を始めていた。

「ボク達が居たという記憶を抹消することなんて出来るものなのかな？」

ますます弱気になっていく夕貴の身体は震えていた。

思わずオレはその肩を抱いた。

「珍しいね。晃がボクに優しくしてくれるなんて……思わず甘えたくなるよ」

肩口に夕貴は顔を埋めて語る。

「オレだって恐いから……この先どうなるかなんて分からない……」

あれから一向に、舞はオレ達の前には姿を見せなかった。夕貴の鼓動が聞こえる。そして、幽かなシャンプーの香り。

何だか不思議な感覚に陥りそうになる。きっと、夕貴にもオレの鼓動が聴こえているだろう。そう思うと照れくさくなった。

「なあ、この部屋を出る事ができるかやってみないか？もしかしたら、艦員や艦長が何とかしてくれるかも知れないし……」

オレは夕貴に提案した。

「まずこの部屋に入る事ができたのは、あいつ……舞の手によっても知れないけど、出るのは案外簡単かも知れないし……」

オレは照れくさいのも手伝って、行動を開始した。

「ちよっと待ってよ！ボクも行くよ！」

オレの腕に捕まり立ち上がる夕貴。オレ達は、機関室入り口のドア前に立った。

するとシュンツと開かれたドアの先にはあの通って来た通路があった。

エレベーターへと繋がる通路。しかし、一度消えた蛍光灯は灯っている。ただしその光は薄暗く感じられた。

「ねえ、晃……手繋いで良い？」

後ろを歩いている夕貴が心配げに問いかけて来た。

「仕方ないな……ほら！」

オレは、夕貴に向かって手を指し伸べた。

その手に飛びつく夕貴。

カッーン、カッーンと、オレ達二人だけの足音が響くフロアー。

エレベーターは、このフロアーに止まったままのようで、上に行くためのボタンを押すと、直ぐさまウィーンと開かれた。

三階のブリッジへと足を進める。

何だか静かな……物音一つしない通路。

オレ達は恐る恐る歩き続けた。きつとブリッジには艦長や艦員達が目的の地へと急ぐために作業をしているはずである。

「大気圏突入。作動モード変更！」

掠れた機械音がオレ達の耳に届いた時、無重力状態に陥った。瞬間、宙に浮くオレと夕貴。しかし、あっという間にその無重力状態は解除された。

「ピツクリした！」

お尻から落ちたオレ達は痛いのを我慢して立ち上がり、ブリッジへと歩いて行った。

ブリッジのドア前に来るとかれたドアの先を覗き込みオレ達は脱力したのである。

そこには誰一人いなくて、ただ機械だけが作動していたからである。オレ達は、どう言う事か分からずに立ち尽くしていたが、瞬時、機転を利かし中央に配置されているレーダーへと走り込んだ。

青白く浮き上がっているレーダー。

中は暗くて目が慣れるまでに姑くの間時間が掛かった。

「ねえ、この行路で行くと、何処につくんだろう？」

「確か、衛星の『ディアノ』に向かうって言ってたよな……」

オレは反芻するかのように、顎に手を持って行って考え込む。

「じゃあさ、この緑色に点滅しているのが、『ディアノ』ってこと？」

赤い点はオレ達が乗っているこの宇宙船であるとしたら、そうであらう。

上手く、『ディアノ』への軌道に乗っているらしい。

オレ達はその後、前方のスクリーンを映し出そうと、あらゆる機類に手を伸ばした。もちろん、分かる範囲の操作しか出来ないから余計な事をしないようにと、頭を働かせながら。

「晃！このボタン、前方スクリーンに関係がありそうだよ」
夕貴は、前列にある赤いボタンを指差している。

「落ち着けよ……取りあえず、落ち着いて押してみよう！」
オレ達は、ゴクリと唾を飲み込み緊張した。これ以上になく真剣だったのである。

カチリと、音がした後、前方のスクリーンがパツと点灯した。暗

い宇宙空間に、青白い光が目飛び込んで来た。

「これが『ディアノ』」

でこぼこのクレーターが隆起し、半欠けの球をしたその星は確かに、オレ達が夜になると見る事ができる月であった。

「こうして見ると、でっかいんだね！」

夕貴は目を輝かせて、感動している。確かこいつは、天体マニアでもあった事を忘れようもなかった。

「宇宙服、何処にあるんだろうね？こんな機会絶対ないよ！降りて探索だ！」

夕貴がその気になれば、もうこうなったら納得させる事なんて出来ない。

「そんな降り立つ事なんてできるかどうかなんて分からないぞ……そんなに期待して、できませんでしたじゃ、期待外れで落ち込むのが関の山だ！」

オレはできうる眼りの助言をしたつもりだったが、全く夕貴の耳には入って無かった。

そんな事より、この状況下だ。こんな不自然な事があって構わないのか？誰一人として、この宇宙船に乗っていないなんておかしい。それとも無人船？何のためにこのような宇宙船をあてがったのか？基本的な事が抜け落ちているのだ。

「おい。夕貴！艦内を探索しよう。あまりに不自然だ……まさかオレ達しか乗ってないなんて事にでもなったら、一大事だぞ！」

未だに『ディアノ』に見惚れている夕貴の腕を引っ張り、オレはブリッジから連れ出したのである。

まず、二階に行ってみた。そこは、医療施設のように、透明ガラスの向こうには、ベッドが配置されている。そして、その側には、アンドロイド型のロボットが、デスクに座っていた。

何をするとする事も無いのにただ座っていたのである。

オレ達は中に入って行った。

『あなた方はどなたですか？』

オレ達の気配を感じ取ったそのアンドロイドの瞳の光が緑色に光る。まるで、オレ達を見比べて観察しているかのようだ。

「ここには誰もいないのか？」

『はい。この宇宙船は、無人旅行用です。それなのにあなた方が乗り込んでいる事自体が問題ですね』

「無人？でも、それならば何故、お前はここにいるんだ？病人が出る駅でもあるまいし！」

『私の役目は、この先に辿り着いた時用のアンドロイド。惑星には、多くの病んだ人間がいるかも知れませんが……それに、この医務室はわたくしの管轄に入っています！』

そういうと、アンドロイドは腰から銃を引き抜いた。

「何を？」

『計算外の侵入者には、制裁を！覚悟下さい！』

ズギューンとオレの顔横すれすれを、レーザー銃の光線が通り抜けて行った。

「やばい！夕貴、逃げるぞ！」

オレ達は一目散に、二階のエレベーターまで掛け出した。そして、一階のフロアーへと足を踏み込んだのである。

どうやら、あのアンドロイドは追いかけて来る様子は無かった。

自分の領域を汚す者を追い払ったという事があのアンドロイドにとつての最優先事項だったのであろう。

一階は、食堂のようなカウンターが設置されていた。まるで憩いの場だ。そしてセルフサービスののような流れで食事を注文する手はずになっているようだった。

そんな折り、クーッとオレの腹は情けないことに音をたてる。

「何か食べようか？」

夕貴がオレの肩を叩きながら前に進むように促す。

広い室内。きっと、惑星から乗り込んで来る人達用に設けられた領域なのだ。

無人の機械の前でオレ達は、持ち寄ったお金を取り出してその機械

に放り込む。

「カランカラン」と唱り響く先に、

『御希望の食券をお求め下さい』

というメッセージが流れる。

オレは、無性に肉が食べたくなったので、ハンバーグ定食のパネルを押した。

隣の機械の前にいる夕貴は暫く考えているようではあったが、生春巻き定食を選んでいた。相変わらずの菜食主義者だ。

パネルを押し終わったオレ達は、食券が出て来るのを待っていないければならないのかと立ち尽くしていたが、どうやら、この機械はそういう仕組みでは無いらしい。

『テーブルにおつきください。料理が出来次第、お席にお運び散します』

オレ達は、その言葉の通り、テーブルへと歩を始めた。

途中、コップ一杯の水を調達して、オレと夕貴はお互い向い合せに座る。その内かい合った中央にはベルトコンベアーが動いていた。「まさか、この上に飯が流れてくるってんじゃないんだろうな……」

正直、困惑する。こんな飯が美味しかったらオレ達の食生活は何だか嘘寒いものに感じられたからだ。

「無人の宇宙船だから仕方ないんじゃない？誰もいなくてのんびり賃し切り状態で、食事にもありつけるんだし」

何をのんきな事を……と思いはしたが、敢えて口には出さなかった。

「おっと、注文の品が流れて来たよ！」

「早いな……」

湯気をたてながら現れたのは、確かにオレの頼んだハンバーグ定食と、夕貴の頼んだ生春巻き定食であった。

オレ達は急いでその器を取り上げる。そうしないと、取り損ねてしまうからだ。テーブルに座わっている皿を取り上げてオレは無我夢中にハンバーグの肉を割った。そして、供え付けられたキャベツ

にソースをかける。良い香りが鼻につく。食べてみると、案外イケたものであった。しかし、肉を保存しておく事なんてできるのであるか？どれだけの日数の旅が待ち構えているかなんて分かったものでもないのに。

食べ終わったオレは、オヤジ臭い格好で、椅子にもたれ掛かっている、両足を大きく開いていた。

夕貴は、野菜を包んだ、生春巻きをじっと観察するかのような真剣な目つきで見ている。

「どうしたんだ？食べないのか？」

オレはその夕貴の不可思議な行動に目を疑った。

「こんな食材、『ソリル』にはないよ……」

じっと見つめているその先には、何かの香辛料の葉っぱが、見え隠れしていた。

「えっ？どれどれ……と、オレが見たって分かるものでもないか……どうしてそんなことが分かったんだ？」

「味。さっき食べた春巻さの中に何だか分からない、変な味がしたから……」

「大丈夫か？夕貴。気分悪いとか、そんなことないよな？」

心配するオレは、自分自身のことも顧みなかった。オレは平気だから……いや、オレが味音痴で、入っていたものがなんであったのか分からなかったただけなのかも知れない……

「食べとくのやめといった方が良いのかな？」

箸を置く夕貴。

「うん……オレは平気だったから心配はないと思うけど……他の料理を頼んだら良いのでは？お腹空くぞ？」

何かを考え込んでいるかのような仕種をしている夕貴だったが、

「ううん。いいよ。栄養食持ってきて来るからそれを食べておくよ」

そう言うと、御飯に海苔を巻いて食べ終える夕貴。

何とか終わった食事会も、ここで一段落を終えた。

食べ終わった食器は、再びベルトコンベアーへと乗せる。オレ達が席を立ちこの部屋を後にした頃、ベルトコンベアーは動きを止めた。どうやら、人の出入りで作動するシステムになっているようだ。確かにその方が、省エネになる。

オレ達の宇宙船探索は引き続き行われた。次は、地下一階に行ってみる事にした。扉が開き、オレ達はフロアーに降り立った。そこは、三方に別れた通路が目の前に広がった。

オレ達は取りあえず、右の道を選び進んで行く。進んで行くと、両側に個室が連なっている。緑色の蛍光灯の明かりで、扉をよく観察すると細やかな番号がふられていた。

オレ達は、その扉を開く。中は薄暗く。扉近くにあるであろうスイッチを赤いランプに従い、手擦りで擦し当てて電気を灯した。パツと灯った部屋の明かりは、オレ達の視界を開けさせた。

「寝室の様だな……」

簡易的なベッド。そして、その奥にはユニットバスが設けられていた。

シャワールの蛇口を捻るとジャーツという水音が響く。

「どうやら使用可能のようだよ」

シャワールの蛇口を捻った夕貴は安心したように、バスの端に腰を掛けた。

「何とか寝床も確保できた様だし……ってそれよりさ、一体今何時なんだろう？」

オレは腕にはめた時計を見る。今まだ六時前であった。寝るには早すぎる時間帯だ。

「この部屋、晃が使いなよ。ボクは、この部屋の向い側を使うからさ！」

勝手に部屋割りを決めている夕貴は、ちゃっかり者でもある。

「そうしようか……この階は、寝所のある部屋だと分かったことだし、地下二階を探索しに行こうか！」

オレ達は部屋の電気を消して、地下二階へとエレベーターを動かした。地下二階は、広いスペースのある、まるで小規模の格納庫のようであった。四角い鉄の箱がたくさん積み込まれている。厳重に密閉されているらしく開ける事はペンチや、釘抜きでも持ってこない限り不可能のようだ。

オレ達はそんな格納庫の中を奥に到るまで探案を始めた。その中で、一つのアタッシュケースを見つけ出す事に成功した。それを見付け出すとオレ達は中央の通路に引きずり出しそのアタッシュケースの中身を確認しようとそれを開けた。

中にはMOがぎっしりと詰め込まれていた。

そのラベルには、ワープロで打たれた『ソリルの民の動向』と記された文字が一から三十まで書き記されていた。

「何でこんなものが……」

そう言ったオレには、理解する能力も持ち合わせていなかった。

「ボク達の事を観察している人物がいるって事なのかな……でも何のために？」

夕貴がそう言うってくれるまで、オレの頭の中は真っ白であった。

そして浮かんで来るのは、

「作られた世界……」

と言った、舞の言葉。

オレには信じられなかった。一体舞は何を知っているというのだ？

西園静と同じ『西園』という苗字を語る少年。全ては彼の望むシナリオの通りに事が進んでいるかのように気分が悪い。

「ねえ、このMO、中身気にならない？ブリッジに行けば、PCくらい積んでると思うよ？何だか気になるんだよね……見てみようよ！」

夕貴がそう提案すると、オレ達は、直ぐさまエレベーターに乗って三階にあるブリッジへと向かったのである。

#6 地球

▼『地球』

エレベーターで三階のブリッジに侵入したオレ達は、急いでMOを見るためのPCを探し始めた。

妙な機械類ばかりで、どれがそのPCに当るのか分別をつけるのに苦労したが十分後ぐらいに、サイドに位置しているモニター前にそのPCを探し求める事に成功した。

「夕貴！こっちにこいよ！MO用のPCを見付けたぜ！」

夕貴は、中央のリーダーの下に置いておいたアタッシュケースごとMOを持ってオレの所までやって来た。

「これだけの量となると、案外重いもんだね。ところで、PC立ち上げた？」

まず、周辺機器のスイッチを確認しその電源を立ち上げると、そのPC本体を立ち上げる。

辺りの暗い視界に眩い光が走った。

「最新式とか言ってたけど、何とか操作することができそうだな」

まず、ナンバー1のMOをセッティングするオレは、そのウィンドウにあらわれる、パスワード入力項目が飛び出した際にキーボードに手をおいたまま固まった。

「シールドが掛かってる。どう言う事だ？機密事項だとしても、これから訪れる先の人間にこのパスワードが分かるって言うのか？」

夕貴とオレは、またしても奇怪な現象にお互いの顔を見合わせた。「考えてみようよ……何か共通点があるはずだよ……」

『ソリル』まずそう打ち込んでみた。しかしエラーの文字が出て来る。『ディアノ』これでもない。

その後、いろいろな惑星の名を打ち込んでみる。しかしどれをと

つても、パスワードエラーの表示しかあらわれない。

「仕方ない……惑星の名前じゃないのかも知れないな……ならば！」

オレは、最終手段、一か八か、『ネオ・ロマンサ』という会社名を打ち込んだ。すると、確認OKの表示が出て来て、次のセクションに移ることができた。

「やった！凄いよ、晃く！」

夕貴は、オレの背後から半身を乗り出して、感嘆の声をあげる。

「しかし、嚴重に二つ目のパスワード入力待ち構えている」

よほどの機密がここに隠されているらしい。

思わずハッカーとしての能力があつたなら、こんなに苦労をする事なんてないのになと心の中で苦虫をかんだが、現実現実。またもや片っ端から、思い付く単語を考えていた。

しかし、夕貴がここで、

「『地球』」

と、こぼしたのが聴こえた。

「え？」

オレは耳を疑った。

「え？ボク何か言った？」

本人には何の意識も持ち合わせてなかったようだ。でもオレはその単語に従ってその項目に『地球』という言葉を入力することにした。

すると、たちまち、画面にズラズラと、何やら不思議な文字がスクロールし始めたのである。いわゆる化け文字と言うものであろう。

「これって……何語？」

オレ達には読む事が不可能な文字の羅列が次々と画面に流れて行く。その後その羅列が流れ終わったとき、一枚の画像がオレ達の目の前に飛び込んで来たのである。

「ネオ・ロマンサの建物？」

オレは次のページをめくろうと、マウスでクリックしようとした時。夕貴がその動作を阻止した。

「なんだよ、夕貴？」

「ちょっと待って。ここ、この日付けを見てよ！」

『ネオ・ロマンサ』の写真の下にある日付けを指差しながら夕貴はオレにのしかかって来た。

「西暦2230年？」

「変だよ……何故西暦なの？移民暦の日付けじゃなくて？」

オレはその言葉に、それとなく今の『ネオ・ロマンサ』とは何か遣う建物の配置に気付く。

「これ、今の『ネオ・ロマンサ』とは違う建物だ！それに、西暦230年は、地球が減んだ年だ！」

そう、色も、ドームも一見しただけではまったく今ある『ネオ・ロマンサ』と同じだと言っても誰も疑うことは出来ないだろう。しかし、あり得ないものが一つ有った。それは、湖のような、水の貯水地。

オレ達の知っている『ネオ・ロマンサ』の周りにはそんなものはいっさいなかった。周りは山ばかりである。

「これは何処なんだ？」

次のページへとマウスを動かす。

「これは……」

あの、ビーナス像のような人達が写っている画像が目飛び込んて来る。胸部は丸く膨らみ、肩や口も丸みがあって、まるっきりオレ達とは異種の者。その周りには、オレ達種族と同じ男達が行き交っている工場内。

「これは女だ。女と言う種族だ！」

オレ達は狐に摘まれたかのような表情で、ただ啞然と画像を見ていた。

次……次……オレは、ページをめくった。しかし、そこに写っている者達は、確かにオレ達男とは違う女と言う種族が共存しているのである。

「……」

オレも夕貴も言葉を無くしていた。

ただただ、次々現れて来る画像に集中していた。日付けもどんどん進められて行く。

一枚目のMOも見終わり、次のMOを挿入する。同じパスワードを打ち込んで、再び化け文字のスクロール。

その後、画像がパツと画面に映った。しかし今度の画像は、確かにオレ達の知っている『ネオ・ロマンサ』の物であるらしい。

「移民暦元年?……こんな頃からこの建物が存在するなんて……?」

「変だよ。開拓するのに百年はかかったはず……それなのにこんな設備が有ったなんて、まるで、この場所にボク達が移民して来る事を予知しているかのような……」

その時何処からか声が響いて来た。

『舞知ってるよ!そこに有る全ての情報のこと!』

背後からその声が聴こえて来る事が分かり、オレと夕貴は振り返った。

青白く光っているレーダーの上に鎮座している舞がフワリと飛び下りた。

「これはどういう事なんだ?地球は、やはり滅んだ訳じゃないんだな?まどろっこしい遠回りなこと言ってないで、率直に真実を言えよ!」

オレは椅子から立ち上がり拳を振り上げて叫んでいた。

『恐いな……舞は道しるべとしてしか存在しないの。遣伝子的記憶を辿ってみてよ!的場晃?君だって、純粋な地球人なんだから!』

舞の長い髪が、まるで風に煽られているかのように舞い上がる。

「は?そんな事分かる訳ないじゃないか!勝手気儘に現れて、助言だけ言っているお前にオレ達の気持ちなんてただの遊び道具なんだろうけどな、真剣に考えなきゃいけない状態なんだぞ。これは!」

「ちよっと落ち着いて。晃!……ボク達にこのMOを見るようにしむけたのは、君だね?」

静かに言葉に出す夕貴。しかし、その声には怒気が籠っている。

『舞にはわかんないや。だって舞は舞であって舞ではないものだから……プログラムにない事を話す事は出来ないよ……』

舞は片手に握っている野球帽を大事に両手で握りしめた。

「プログラム？」

オレは面喰らった。

「君は、何のためのプログラムなんだい？」

冷静になっている夕貴は問いたです。

『的場晃を、『地球』に導くためのプログラム……この宇宙船は、『ディアノ』には行かない手はずになってるんだ。舞は舞のためのプログラムに従ってこの宇宙船を動かしている……それしか答えられない』

そう言い残すと、再びスーッと周りの空気に溶け込むかのように消えた。

オレは、近くに有る壁に拳を打ち付けた。

「オレ遅の『ソリル』での記憶を抹消されて、あまつさえ訳のわからない事に……『地球』に運ばされてるだなんて……」

オレは悔やんだ。全てを投げ出してまで知らなければならなかったのか？ しかも、夕貴を巻き込んでまで……肩から指先にかけて震えが止まらなかった。

「晃？ 後悔はダメだよ……あの舞って子。プログラムって言ってたけど……高度な一種のホログラムでしかありえない……どこかで本体の舞があの子を動かしている……きつと『地球』のどこかで」

夕貴は、オレの腕を掴んでオレの震えを受け止めてくれた。

「済まない……夕貴。オレなんて言ったら良いか……お前まで巻き添えくわせてしまっ……」

ギュッと手の平を握りしめて怒りのやり場をそこに集中した。

「晃は悪くないよ。ちょっと好奇心に引かれて、こんなことになったけど、ボクは晃がいてくれる事で、全てが癒されているんだから」
今のオレの心に安らぎを与えてくれる優しい言葉だった。

「ねえ、もう休もう……ボク疲れちゃったよ。MOはこのままここに置いておいて、また明日調べよう。あの子はこれ以上のことは何も語ってくれないと思うから……ボク達で調べなきゃ……」

オレの肩を掴んで寝室のある地下一階へと歩き始める。

途中のエレベーターの中、オレは誓いを立てた。けっして、夕貴には危険な目に合わす訳にはいかない。全て、このオレが何とかするんだと……

#7 ホルモン

▼ホルモン

オレはベッドの中、眠れずひたすら考えごとで頭は一杯だった。

この宇宙船にはオレと夕貴の二人しかない。こんな世界で今まで想像もした事のなかった事が繰り広げられている。そう、『地球』この惑星にオレを導いていると言う人物。

滅んでなかったと言う真実を探して、今オレ達はその『地球』へと向かっている。

しかも、『ソリル』が『作られた世界』だとしたら誰がそうしむけたのか？何かの理由があったはずだ。

引き返せない以上オレは、その理由を探し出さなければならない。これは、きっと、オレ達の住む『ソリル』にとって重大な真実になり得るのだから。そんな事を知らなければならぬと思う優越感と、絶望がオレの中を今駆けずり回っている。

一度寝返りを打つ。

寝る前シャワーを浴び、備え付けのバスローブを羽織ったオレは、そのままベッドへと倒れ込んだ。それっきり起き上がる気力なんて持ち合わせていなかった為、うつ伏せのままだったのだ。

憧れの『ネオ・ロマンサ』そこを訪れることがオレの夢であった。もちろん、『地球』への熱望もあった。

しかし、その夢も全てついていた気がして、何だか今日あった事全てが嘘であつたら良いなんて勝手な被害妄想を打ち立てている。なんてヤツなんだと、いい加減自分自身が嫌になる。明日起きてみたら、いつものように恵が、オレのベッドの上でおたまを持って構えているシーンなんかを思い描いて苦笑する。お手上げだった。

何も知らない、無知なオレに対する最悪なジレンマ。

仰向けになった、オレの目に映っているのはただの白い天井。綺麗な升目が形よく並んでいる。オレはそれを見たくなくて再び寝返りを打つ。

「嫌なやつ……」

そうこぼしたオレは、何時の間にか眠りについ tara しく電気もそのまま、翌朝を迎えたのである。

コンコンとけたたましくドアをノックする音でオレは目を醒ました。

何だ。こんな朝早く？ シャワーを浴びた時はずした時計を近くの机の上に置いていたのを思い出し、オレは見ながら毒づく。

オレは知っての通り寝起きが良い方ではなかった。

「何だよ。夕貴はまだ寝ててもおかしくない時間だぞ。なんだよこれ。五時だなんて！」

オレは何だか重い身体を肘を使って持ち上げる。そしてドアの前へと足を運んだ。

すんなりと開かれるドア。

オレは、垂れている前髪をかきあげながら目の前にいる夕貴を何となしに見下ろした。すると、力を失った夕貴の身体が、オレ目掛けて倒れ込んで来たのである。

夕貴は肩で息をしながら、

「ごめん。何だか気持ちが悪くて……」

オレは夕貴の額に自分の手の平をあてがった。ひどい熱だ。

「おいっ！ しっかりしろよ！ 今、氷用意して来てやるから。うーんと……オレのベッドで休んでろ！」

夕貴をベッドに寝かせると、オレは駆け出した。確か、一階の食堂にでも行けば、氷くらいは調達出来るだろうと考えに及んだからである。

食堂室に入ったとたん、電気が灯る。

食券機の隣に設置されているセルフサービスの自動飲料水の氷のみをコップ三杯詰め込み、オレはその部屋を出る。

両手一杯のコップから氷がこぼれないように走るのはかなり困難だったけど、オレは必死に寝室へと向かった。

部屋に戻ったオレは、自分のリュックから、ナイロン袋を取り出し、氷と水を入れて、寝込んでいる夕貴の額にそれを押し付けた。

「気持ち良い……」

夕貴は、相変わらず肩で息をついている。見ているこっちも苦しい気持ちに陥りそうだった。

しかし、よくよく考えてみると夕貴は、健康優良児で、オレの記憶にはこんなふうに取り乱した事なんてなかったはずだ。いつもニコニコ笑って、元気が取り得ですというキャラだった。

「こんなこと初めてだな……」

一呼吸整えて夕貴が、

「うん。こんなこと初めてだよ……こんなに身体がだるい事なんて……部活で感じる辛さとは別だね……ボクこのまま死んじゃうのかな？」

天井を見上げながら答える夕貴に、

「アホ！死んでたまるかよ……あれかな？夕食で食べた生春巻き。あれが原因じゃないのか？変な味してたって言ってたし？食中毒か何かじゃ……」

オレは、天井を見上げている夕貴の視界に入るかのように見下ろした。

「はは。そうかな？でも……」

何かを言いたげに夕貴は言葉を返す。

「でも、何だ？」

「ううん。何でもないよ。こうしてればその内治る気がする……もっと近くに晁を感じていたいな……」

夕貴は両腕をオレに向けて差し伸べる。

オレはその様子を受け止めてその腕に抱かれるかのように身を託

した。

「へへ……晃の匂いだ……何だか眠くなって来たよ……ねえ、今だけが良い、ボクにキスしてくれないかな？」

そう言うともっすぐな潤んだ目でオレを見上げていた。

オレは、一瞬躊躇しながらも、望んだように優しく触れるだけのキスを、夕貴に与えた。

「柔らかいね……」

オレを抱き締めたまま夕貴は眠りにつく。オレは、何だか小さく感じた夕貴の身体に違和感を覚えたままその腕の中で目を瞑った。

こいつこんなに痩せてたっけ？それに……

違和感を覚えながらも夢心地の中オレは、そのまま眠りについた。

電子音が艦内に響き渡る。

「ビーツビーツ」

何事が起きたんだと、目を醒ますオレは時計を確認した。

つい寝てしまいもう八時になっていた。

寝返りを打っていた夕貴の腕から、オレの身体は自由の身になっていたため行動を始める。先ず、夕貴の熱が下がったか？を確認する。どうやら微熱状態の夕貴の身体はまだ回復をしている様子はない。そこで、一度肪れた二階の医務室へと夕貴の身体をおんぶし、足を運んだ。

あの時は、銃口を向けられ追い出されはしたが、非常事態だ。背に腹は変えられない気分である。恐る恐る、医務室に夕貴を抱えて進入した。相変わらず、デスクに腰を掛けたアンドロイドが静かに座っていた。

ウィーインと、開かれるドア。

「あなた方は……」

昨日の今日なのに、一変して態度が変わっている。
立ち上がってオレ達の元にやってきた。

「病人だ！治療宜しく！」

オレは、また銃口を向けられるのではないかと心配で、心中はドギマギしてはいたものの、病人がいる事を感知したのか、いたってアンドロイドは丁寧に対応してくれた。

「今日の朝からこの状態なんだ。少しは熟が下がったようだけど、まだ意識が無いようで……」

オレの言葉が耳に入っているのかいないのか、勝手にベッドの上で診察している。

『食中毒による、症状ですね。しかし、こういう例はないといっても過言ではありません……何でしょうか……』

次に夕貴の体をスキャンにかけながらそのアンドロイドは答える。

『この方は、両性具有。その為に、ホルモンが異常に分製を始めています』

「両性具有？」

オレの頭は一体何を言っているのか理解できず、アンドロイドを見る。

『男性ホルモンが一時的に活動を押さえられています……そして女性ホルモンの異常活発が見受けられます』

「女性？」

オレは開いた口が塞がらなかった。

「こいつが、夕貴が女性だって？」

失われた記憶の断片を思い返していた。

小さい頃から水泳の授業を放棄していた夕貴。しかし、部活動の時は何も女性と言う種的な体つきはしてなかった。それなのに？

『ある年令が来ると、男性ホルモンと、女柱ホルモンが入れ変わる人種が居るといふ異邦人がいる事は御存じでしょうか？』

「え？」

そんなこと知っていたたまるものか！オレの知識の無さは、宇宙のただ一遍に集中している。

「で、どうなんだ？夕貴は治るのか！」

スキャンから運び出されて来た夕貴の顔色は、青白くて痛々しい。

『そうですね。一週間もすれば回復する事でしよう』

そういうと、アンドロイドは夕貴を抱かかえ、ベッドへと移した。
「なあ、お前の名前なんて言うんだ？名なしで呼ぶのオレ嫌いなんだ」

その様子を見届けながら、オレはアンドロイドに問い掛けた。

『わたくしは、E R O 6 9 6 ラファエル特殊保健事務員。貴方の名前は？』

「晃。的場晃……数字なんかで呼ぶの嫌いだからラファエルとだけ呼ばせてもらうよ」

オレは、夕貴の近くに寄り添い、手を握りしめた。そして、

「ラファエル？オレ、ブリッジに用が有るから、こいつ……夕貴のこと頼むな。何かあったら、連絡をくれ。直ちに飛んでくるから！」

オレは、そう言い渡すと、直ぐさまこの部屋を後にした。

それは、全ての鍵を握っているであろう舞。あのMOを全て記憶したいが為であった。

運命の糸は何処から来て何処に撃がって行くのであろうか？そんな哲学的な事なんて今さらどうでも良い事のように思われて来る。そう、現実をこの手に受け入れる事が全てだとそう思ったからだ。

三階のコックピットに辿り着くと、まずレーダーを見た。始めの目的地『ディアノ』を迂回し、そ先に行こうとしているこの宇宙船。
「ちっ！まじかよ！」

舞の言ったことは本当のようである。正面のスクリーンには既に衛星『ディアノ』は映って無かった。そして、左スクリーンにはあの『ディアノ』が映り込んでいる。

「軌道を変えるなんて出来っこないに決まってるだろう……くそっ。舞め！」

オレは無償に腹立たしくなった。やり場のない思いが……自分の力の無さに腹が立っていた。

その後、すぐさま昨日まで見終わっていた2枚目のMOをPCか

ら取り出し、3枚目のMOをアタッシュケースから取り出すと、昨日と同じ手順で中身を拝借した。

そこには、西暦2230年。同じくして移民暦一年に移住したと思われる者達の顔写真が全てインプットされていた。

そのリストを片っぱしから見終えると、おかしな事に気がついた。なぜか男と言う種しか移民データに無いからである。

「おかしいな……確か、女と言う種は、『ソリル』という惑星では生息できなかったという事では無かったのか？それを排除したというだけなのか？」

オレは親指の爪を噛み締めながら、このデータを見終わると、次のMOを挿入する。

そこには、次の世代の子供達のデータが入っていた。しかし、いずれにしろ女と言う種は存在しない。その上そのデータの下にリンク付けがされていた。

子供の名前、生年月日、血液型、両親の名前。

これが一体何の役に立つのか分からないままオレは先を見続けて行く。

もう、MOも十枚目に突入していた。あいも変わらず、同じようなデータがインプットされている。

しかし、あるページでオレはマウスを止めることになった。

それは、『三谷望』の項が目にとまったからである。

苗字こそ違うが、名前も生年月日も、血液型も、それは父の物に相違なかった。ただし、子供の頃の顔写真だから、今の望の顔と一致する事は少し困難だったけど、面影が有る。それは確かに望だった。

「何故こんなところに、望が？」

両手で頭を抱え、デスクに肘を尽きオレは考えている。

「この分だと、どこかに、恵のデータもあるのでは？」

そう思い立ったオレは、先のページへと進んで行った。そして十枚目のMOでそのデータを引き出す事に成功した。

「望とは一年のズレが有る。確かにこの顔写真は恵だ」

補足の欄も恵と名前が有るし、血液型と誕生日も一致する。

オレは、この不可解なデータを目の当たりにして、気持ちが悪転していた。

「MO二十枚……どこかにこのオレのデータも有るというのか？」
アタッシェケースに残っている山のようなMOを見ながらオレはため息をついた。

その時、非常事態の警報が鳴った。

『的場晃。応答して下さい！お預かりしていた夕貴様が船内のどこかに移動されました！あの身体で動かれるには少し危険です。直ちに応援をお願い致します』

ラファエルの声が響き渡る。

オレは、ブリッジのPCの椅子を押し倒すがごとく立ち上がり駆け出すと、慌ててエレベーターのボタンを押す。すると、二階に止まっていたエレベーターは速やかにこのフロアーへと止まった。誰も使うことのないエレベーターなのに二階に止まっていた？しかも三階へと動き始めている。

そう考えると、すぐに状況がつかめた。思った通りエレベーターのドアが開くとそこには、壁に寄り掛かって座り込んでいる、夕貴が目の前にいたのである。

「おいっ！何やってんだよ夕貴！」

すぐに駆け寄ったオレは、夕貴の身体を抱き寄せる。

「えへへ……来ちゃった……」

だるそうな夕貴の身体を受け止めたオレは、夕貴の頭を小突いた。「そこで、倒れてるようなヤツ、オレは知らないからな……下に行つて、ラファエルに心配ないってこと伝えてくるからお前は、ブリッジで休んでろ……ホント世話の焼けるやつだな……」

いつも世話を焼いてくれてるヤツが言うセリフでも無いか……と思いつつも、オレに一度二階へと足を伸ばした。そしてラファエルに伝言して薬をもらい、それを飲むための水を一階からコップに

入れてコックピットへと戻った。

「これって、何なの？」

サイドシートに腰を掛けた夕貴がまじまじと見ているデータ。その様子を確認するように後から声をかける。

「これか？オレにもさっぱり分からないんだ。今まで見ていた限り、『ソリル』の住人の登録データである事は確認できたんだけど……」
水の入ったコップと菓を夕貴に手渡しながらオレは簡単明瞭に答える。

それから、近くにある椅子を引っばってきて、夕貴の隣に座る。
しかし、ラファエルの言葉を真に受けたているオレは、何だかいつもの夕貴のような気がしなくて落ち着かない。でもそう見せないためにも気を落ち着けようと努力した。

「オレのオヤジ……望と、おふくろ、恵のデータもあったぞ」
取りあえず付け加えておく。

「何のためのデータなんだろう？」

「さてね？もう訳わかんなくてお手上げだよ。まだ、二十枚近くも
のMOを見なくてはならない。いい加減目が疲れる」

そういうと、今度は、

「ボクが、この後を引き受けるよ」

夕貴は自分の体調の事も忘れたかのようにそう言った。

「莫迦！夕貴はオレがやってるのを見てろ。これ以上体調が悪化したらこのオレが……」

そこで口を噤んだ。

「……オレが？」

夕貴は熱で潤んだ目でオレの瞳を見返して来る。

「いや……なんだ……おもりするのは嫌だからな！」

素直に何故心配するからって言えなかったんだろう？

「分かったよ。ボクと椅子入れ代わって。そっちで見てるよ」

そういうと、立ち上がる夕貴の身体を支えながらオレ達は交代した。その後、オレは再び次に控えているMOを差し込む。

同じ動作を繰り返しているうちに、本当に目が疲れ始めたのを感じた。

オレはこのデータから何を調べたいのか？

根本的な事を考え始めた。

「検索すれば？名前を……」

タ貴は何気なしにそう呟いた。

「えっ？あっそうか……」

自らの父と、母のデータを見付けた時から心の中で何かが目覚めかけていた。それをいとも簡単にタ貴は見抜く。

「苗字が違うって事は、名前で検索すれば少しは楽になるな？」

早速、オレは検索欄をクリックし、自分の名前を検索した。

「晃っと」

100有るデータから、一気に20項目まで減る。

「さてと行きますか！」

オレは、選びだされたそのデータをくまなくチェックする。しかし、このMOには自分のデータは無かった。仕方なく、次のMOへと進んだ。次のMO……次のMO……そうして行くうちに、25枚目のMOに自分のデータを引き出す事が出来た。しかしそのデータを見てオレは驚愕した。

「……西園……晃……」

『西園』という名字にオレは考えにも及ばない何かを感じていた。

「舞って子と、晃、名字一緒だね……」

「舞だけじゃない静って言うあの民族音楽の作曲家とも同じ名字でもあるんだ」

どう言う事なんだ？そして、顔写真に従って配されているその両親の名前を見た。

「西園雫。西園静……静って！」

こんな時こそ、舞が出て来てこの事の真実を語ってくれない事には……パニックっていたオレはそれしか考えられなかった。

そんな時、

「ねえ、ボクのことにも検索してくれないかな？多分同じMOに入っていると思うから……」

確かに、MOに記録されている年代を考えると、夕貴のデータが入っている可能性がある。

オレは、混乱している頭を何とか正常に保とうとがきながら、検索欄に、

「夕貴っと」

名前を放り込んだ。

しかし、出て来たデータには夕貴の物は無かった。

「変だな……次のMOを見てみようか？」

オレは26枚目のMOを取り上げてまた検索した。

しかし、一向に夕貴らしい人物のデーターを得る事は出来なかった。

「おかしいな……何で、出てこないんだ？」

オレは、次のMOに手をのばした時、その手を夕貴が止めた。

「良いよ。これで分かった……ボクのデータはここには無いんだよ……」

夕貴はオレの手を握りしめてボソリと口走った。

「な、何言ってるんだよ。無いって……そんな事無いよ！あるに決まってる！」

オレは、あの、ラファエルの言葉を思い出しながら戸惑いを感じずにいらなかったが、夕貴の手を払いのけて次のMOを手に取り上げて同じように検索をかけた。

しかし、データには無い。結局30枚目のMOを手にとり中を見た。

しかし、そこには『ネオ・ロマンサ』のデータでぎっしり詰まっていた。

「何、何？」

中に書かれている内容と言えば、この者達がすべて、『ソリル』内で生存している者達であり、発育も良好。次の世代を求める。

そう言う内容であった。

つまり、オレ達は、地球で生まれたと此処で証明している。

しかし、思わぬ最後の1ページ、一枚の写真がページを飾った。

「夕貴！」

オレは、そのページを見た時、かの者の顔を見ざるおえなかった。ただ独り、惑星『ミトラボス』で捕獲した、生態。両性体である子供。一色グループの御曹司としてその身柄を補完する。その後の安否は良好といって良い。確かに、我々地球人と同じ生態を持った生き物であり……つらつらと書かれた文字。

「決定的だ……」

夕貴は、椅子に寄り掛かったまま目をつぶった。そして、再び目蓋を開けてオレを見てにこやかに笑ったのである。

この状況下、何故笑えるんだ？とオレは困惑した顔を歪ませて椅子から立ち上がると、夕貴に近寄った。

「おいっ。平気か！夕貴？」

肩を揺さぶると、力無い夕貴の身体はゆらゆらとその動きに合わせて揺れた。

「もうこんなの見てないで、部屋に。いや、医務室に戻ろう？そうしよう！」

オレは、夕貴の身体を抱き起こして肩に手をまわした。しかし、夕貴はそれを拒絶するかのように、オレの手を退けた。

「大丈夫。自分で動けるよ……今は一人にさせておいて……ごめん。晃……」

そういうと、片手でもう一つの腕を掴み、危なっかしい体を揺らしながらエレベーターへと足を向ける夕貴。オレはその後ろ姿をただ見送るしか出来なかった。こんな時どう話しかけ、どう行動すれば良いのかなんて、オレの単細胞な頭では考え付かない。

夕貴が、一種の実験体。そう観察されていた異邦人？オレの頭は自分の事も有り、混乱の絶頂だった。

自分のこと。夕貴のこと。もう何が何だかわかったものでは無か

った。

「ちくしょう！舞！出てきやがれ！」

オレは、両腕を振り上げ振り下ろし、叫んだ。

しかし、舞の姿はいつまで経っても現れなかったのである。シーンと静まり返った艦内。ただ、リーダーとオレ達が今まで見ていたモニターだけの光が煽っているのみであった。

オレが地球人であり、そしてその他の全ての者達が地球から派遣された子供であったと言う事実を掴んだオレの中には、ただ怒りだけが漂っていた。

何のためにこんな世界にオレ達を派遣したのか？生体実験の為か？それとももっともらしい理由が有るとでも言うのか？オレは食事をする前に一度夕貴の様子を伺おうと、二階の医務室へと足を伸ばした。

そこには、夕貴が点滴を受けながら、眠りにしているのが目に入った。

ホッとしたオレは、一階の食堂に顔を出す。

昨日のように食券を買って、飲料水をコップ一杯に注ぐとテーブルへとついた。

たった一人で、こんな事をしているのがなんだか不思議な感じで……夕貴の顔がちらつく。

「しょうがないだろう。夕貴があんな様子なんだから！」

オレはテーブルをドンと叩く。運ばれて来たどんかつがその勢いでガタンと宙に浮く。黙々と済まされる食事。しかし、何の味も無く感じられた。

食べ終わった食器をベルトコンベアーに乗せ、オレは席をたった。その時であった。

ガガガ……突然の轟音が艦内を支配した。

何事が起きたのかと、オレは三階のブリッジへと駆け出す。

ブリッジ内は、赤いランプが点滅して辺り一面を赤く染め上げていた。

スクリーンを見る。

そこには光に閉ざされた空間。いわゆるブラックホールとかいうものである。がオレ達を飲み込もうとしていたのである。

「なんてこった……こんな絶望的な事ってあったまるかよ！」

地球に導くと言っていた舞は、こうすることで、地球へと向かうことができるってのか？オレは、立て続けのこの駅の分から無い状況に終にキレた。

「いい加減に、舞出てきやがれ！この状況を説明しろ！」

オレは、腹の底から願った。

『お呼びですか？』

スーツと降りて来る舞。

「地球に向かってるんだろう！なのにこの状況下は何だ？オレ達を殺すつもりか！」

怒りのため言葉なんか選べない。

『これで良いんだよ。的場晃……いえ、もう御存じだとは思いますが。西園晃？』

「まさか、ブラックホールの向こうに、地球が有るなんて言うんじや無いだろうな！」

『はい。御名答！このブラックホールの先には、貴方達地球人が生存する『地球』があるよ。もちろん、太陽系も、銀河系も』

舞は青白く光るリーダーの上に腰を下ろし、そう言うと、

『だいぶ貴方が求める答えは近くなりましたね。後少しですよ。全てのベールが剥がれ落ちるのは……』

ふと、何を思ったのかブリッジの前方を見詰めて目を細める。突如振り上げる右腕。その指先にオレンジ色の光が宿る。

「おいっ！何をするつもりなんだ！」

辺りは、赤く点滅する光の渦で……オレは舞の奇妙な行動にそれすらも忘れかけていた。

『邪魔な物は取り除く！いち早く消え去れ、舞の行動を阻止する因子よ！』

スクリーン越しに放たれた光はガラスを通り越し、暗黒の渦へと注ぎ込まれた。すると、一気にブラックホールはホワイトホールと化し、オレ達を導くかのように流れを変えた。

『これで大丈夫。安心して地球に下り立てるよ。と言っても、その先には色々と困難があるとは思うけどね』

ニコツと表情を変えると舞は再び姿をくらます。

「困難？……これ以上の困難なんて……」

もう何ごとも起きない、ただの平凡な世界を望んでいるのに……オレの身体はその場に崩れ落ちた。

同じ姓である、舞は、これ以上一体何をオレに見せようと言うのか？もう見たくなんか無い？いやそれは真実か？どっかに好奇心なんて非道なものが有るのでは無いか？立ち直れない衝動がオレの中を駆け抜けていく。

「『西園』……」

未だ他人のものでしか無いその名字を真っ向から受け止める自信さえ無いオレは、虚ろにその力無き身体をゆすった。そしてその場であぐらをかく。腕の感触が自分のものでもないかのように、宙を泳いだ。

オレはここにいる。オレは『的場晃』

そう言い聞かせようと努力をしてみるが、一向に思考は言う事をきかない。

「オレは、誰なんだ……」

終にこぼれる言葉はただ一言だった。そう、一体オレが誰であるのか……それが今一番の謎であった。

#8 帰らない明日

▼帰らない明日

コックピットを離れ、一度医務室に入ったオレは、夕貴の状態を訊こうとラファエルに事の次第を訊いた。

『ホルモンの分泌活動の上昇の上、精神的な疲労が重なったようですね。本来、両性具有の時は感じたこともない刺激を、一度に受け入れてるのではないのでしょうか？』

オレは頷いた。病氣一つしたこと無かった夕貴のことだ、この状況はこの上ないものであろう。一気に抗体が活動しているに違いない。

「今日のところは、この部屋で看病してやってくれないか？きっとその方が夕貴にとって一番良い事だと思うから……」

側にあった椅子に腰をかけていたオレはそう言いながら立ち上がった。立ち上がりながらオレは、夕貴のいたたまれない姿を見下ろして、そっと夕貴の額に手を差し伸べた。少し汗ばんだ額は、微熱のせいもあるのかもしれない。オレの掌にジワッと感触を残した。

寝室に戻ったオレは今日一日に起こった全てのことを振り返っていた。

一日が何週間もの量があったような一日。時計はもう午前1時をさしている。

正直に疲れ果てた身体であるオレは、シャワー室でズリり座り込んで、ただ水を浴びている状態だったりもした。

今、『ソリル』では一体何が起きてるんだろう？

見る事も出来ないテレビ。隔離された部屋。オレは一気に押し寄せてくる嫌気に耳を手で塞いだ。何も聴きたくない。見たくない。

感じたたくない。シーツの感触に苛立ち、握りしめる。今のオレの中の反抗心はこの程度でしか補えなかった。

オレ達は『ソリル』の民ではなく、『地球人』であることの証明なんて何処にもなかったのに『ネオ・ロマンサ』は、そんな事を一言もオレ達に伝えたことなんてなかったのに……

一嘘ヲツイテイタンダー

オレは一気に『ネオ・ロマンサ』への信望が冷めて行くのを感じた。

考えてみれば、あの松永の、西暦2230年地球滅亡説を嘘だと言った時に気付くべきだったのかもしれない。

テーブルの片隅で、カチカチ鳴り響く時計の音が耳障りで、もう一度しっかりと手で耳を塞ぐ。時間が元に戻るなら、あの時に機関室に行かなければ良かったんだ。分かっている。でも……考えがいろんな方向に時間軸を作り、既に疲れ果てたオレは睡魔に勝てず眠りに入った。

それは、夢さえも見ない深層心理のより深い所に辿り着く所まで……そして、目が冷めた時、驚く事になる事態が発生している事なんて考えもつかない程グッスリと眠ることに集中していたのである。

過去に何回『ソリル』と『地球』を結ぶ船は行き来をしたのであろうか？そんな事は今のオレには分からない。

朝起きて、目に入ったのは、ライフルの銃口を向けた男。深緑色の迷彩服を着た自衛隊のような男が、オレの顔にそれを押し付けられていたことであつた。

「起きろ！そして、手を後ろにまわせ！」

厳重な体制下、オレは何も言い返すことが出来なかった。そして、言われるがままその通りの行動をする。

ガチャンと後ろ手に手錠をかまされて、立ち上がると部屋を出る

ようにともう一人の男が後ろからライフルを突き付けて来た。抵抗することも出来ないオレは、そのまま寢室を出た。

「一つ訊いて良いか？」

寢室を出てエレベーターに乗って、一階のこの宇宙船の出口へと向かう最中に、オレの前を歩いている男に声をかけた。

「黙って歩け！」

「……」

何も言い返すことが出来ない緊張感の中、ただ一つの気掛かりがあった。夕貴のことをどうしても問いたかった。

「医務室にいた夕貴……少年はどうしたんだ？あいつは、体調が悪いんだ……」

オレは、なるべく静かに話し掛けた。

「少女は、我らが丁重に迎えている」

「少女？」

オレは、今まで、前を歩いているその男の足下をただ見詰めていたが、ふと顔を上げた。

後ろから、グリツと、銃口が突き付けられる。

「痛っ！」

したたかな行為が全身に響く。

「黙って歩けと言っただろうが！お前の処分は、会長が全てお決めになられる！」

「会長？」

ムッとしたがその後、オレは静かに黙々とただひたすら歩いた。

そして、ハッチを出す。

宇宙船を下りると、広い敷地に出た。

まるで、飛行場をもっと大規模にしたような広い敷地。

ふと、振り返る。

そこには、何百メートル有るであろうか？高層ビルよりも大きな丸い、球の形をしたジオラマが宙に浮いていた。

それがなんなのか、その時はまったく分からなかったが、後に嫌

と言うほど驚かされることになろうとは、夢にも思わなかったのである。

逆三角錐のような建物の中にオレは導かれ、最上階へとエレベーターを起動する男。60階のその場所に案内されて、オレは導かれるまま通路を歩いて行った。

「会長！不法侵入者を捕獲しました」

「中に入れ」

落ち着いた声が電子音で聴こえて来る。二重のドアが開かれてオレは中に入った。

「お前が『ソリル』からの不放侵入者だな」

中央にある椅子に座っているその者は、後ろ向きに座している。よくよく観察すると、この部屋は、ガラス張りの向こうに熱帯魚を飼っているらしく、青白い水のイメージが、辺りを包んでいる。

「手錠を外せ」

未だ顔を拝む事さえ適わないその者は、静かに男達に命令する。

「しかし、暴れる可能性が！」

戸惑った男は一瞬身じろぎをした。

「私が言った事が耳に入っていないのか？良いから、手錠を外せ！」
今度は威圧感がある声。

「了解致しました！」

ガチャガチャと、手錠をはずす音が、背後でする。自由になった手は軽かった。

「では訊こう……私の名前は水上聖と言うが。お前の名前は？」

クルリと椅子をオレの方に向けてデスクに肘をつきながら話しかけて来るのは紛れもなく女と言う種族に相違なかった。グラマーなインテリ風の眼鏡をかけたその水上は、一見して物静かそうな感じをも与える。

「あんた……女か？」

自由の身になったオレの身体は、一歩前へと足を進めながら尋ね

る。初めて目の当りにした女という種族。

「そうだ。お前の惑星には存在してないから珍しいだろう？で、話を戻す。お前の名は？」

その女の目尻が少しだけきつくなつたのをオレは見逃さなかった。ただ質問に答えろ！そう言いたいに違いない。

「オレは、的場晃……またの名を、つまり、この地球での名は西園晃と言うらしいが……」

言葉の端々は弱くとも眼光だけは威厳を持たせたつもりだった。

「『西園舞』の兄か……」

「兄？」

「そうだ、あの女、何時になく静かだと思いきや、こんな事を企んでいたのか……」

視線を逸らせ何かを考えている水上。

「事の次第が、オレにはさっぱりなんだが……兄とは何なんだ？」
チンプンカンブンな言葉にオレは問いかける。

「双子なんだよ。お前達は……」

答になってない。つまりはオレの思考回路に『兄』という言葉が理解できない事が原因なんだと気がつくに時間が掛かった。

「だから兄とか双子とか、オレには理解不可能なんだって！」
にじり寄るオレの身体を、背後に控えている男が腕を掴む。

「同じ女の身体から生まれた子供。つまり同じ血縁関係だと言う事で、理解は出来るだろうか？双子の場合、同じ日に生まれ落ちる二人の子供を意味する。お前達は、二卵生双児なんだよ」

同じ女の身体から？やはり、チンプンカンブンだ。オレの知っている範囲で言うと、試験管に保存された精子をなんらかの形で、もうけられると言う事しか記憶に無い。

「晃くん？君は、舞の導きによりこの地に訪れた口だな……違うかい？」

静かに問いかけられた。

「そんな所だ……で、その舞は何処にいるんだ？一度会って、色々

問いただきたい事が山のようにあるんだ。こっちだって!」

そう、オレは腹を立てていた。オレがその舞の兄であろうとなんだろうと、こんな仕打ちを受けなければならぬ謂れはない。

「舞は、ESP保持者でね。隔離病棟に監禁している……逢いたいたいのか?」

「是非ね!」

オレは、間髪入れずそう言い放った。

「この少年を、舞がいる病棟へ案内しろ」

水上は、男達にそう命令した。

「このままで平気でしょうか?」

「この男も、ESPを使う可能性だってあり得ますが?」

二人の男は、少し躊躇したようで、ちょっと弱気であった。

「そうだな……まだ使い方も分からない者が突然ESPを使うことになったら厄介だ。補助システム用の手錠をかけておけ」

水上はそういうと、立ち上がり、部屋の両端に位置している水槽に寄り沿った。

「生愈の神秘。それは何処から来ているんだろうな?」

何やら意味ありげな言葉を発していたが、オレには理解不可能で、男達に改めて手錠を後ろ手にかまされ、この部屋を出るように促された。

「晃の部屋を当てがってやれ。こいつは地球人であって、訪問者でもある。手厚く持てなしてやれ……手荒な事はこの私が許さない」
部屋を出る寸前だったが、確かに水上はそういい残した。男達は、その言葉を心に止めたのか、左肩に装備しているライフルを使う事はその後なかった。

60階のこのフロアーから、まず、50階までエレベーターで下りると、渡り廊下にそってオレ達は歩いていた。その周りは、空滴の丸い穴が吹き抜けておりその向こうには、真つ自な壁が、行けども行けども続いている。終わりが有るんだろうかと皿える程に。

「舞って、どんなやつなんだ？ESPって？」

前を先導して歩いている男に、オレは問いかけた。

「お前の、双子の妹だ。ESP。つまり超能力を発揮して、物を動かしたり、瞬間移動したり、残留思念を残したりできる。一風変わった少女だ。ESPを使われたら手の施し用がない。だから、ESP封じの為に別室に隔離している」

「妹？」

「女の子なんだよ。彼女は……」

オレの頭の中で、あの少年が実は女であつたなんて思いも寄らない事実を知り困惑した。そんな時目の前に扉が立ちふさがった。

「終にご対面だな。ここで待っていてやる。思う存分話し合いをして来てくれ」

部屋の前に有るカード挿入機にカードを差し込む男は、扉が開いた瞬間手錠をはずしたオレを前に押し出した。瞬間扉が自動的に閉じた。

中は、いたってシンプルで、あのオレの家に届いたカセットテープの曲が流されているのが耳に入った。

前のめりに倒れこんだオレの視界に一瞬入り込んだ世界。

目の前には、あの少年。いや、オレの『妹』と言う少女が、まるで、あの学園のビーナス像のごとく、オレの前に手を差し伸べて来たのである。

その手を取るべきか否か一瞬躊躇ったが、少女の方からオレの手を受け止めてきた。

「初めまして。と言うべきかしら？お兄ちゃん」

『お兄ちゃん』といわれても、まだ実感なんて湧かないオレは戸惑った。

「舞。色々迷惑をかけてしまったようで、ごめんなさい。謝らないといけないね」

長い髪が、首をちょこんとかしげる度にサラサラ揺れる。良い香りがした。

今までの怒りを忘れその手に導かれてオレは立ち上がった。そして、中央にあるテーブルに導かれ、オレはその席に座る。

「何だってこんなまねしたんだよ！ていうか、こんな部屋に監禁されているのに、どうやって、オレの故郷『ソリル』に、荷物がよこせたんだ？」

何だか他人を見ている気がしないのは何故だろう？まるで生まれる前から知っている者と話をしている気がする。

「それは簡単よ。荷物をテレポートさせたの。あの荷物の意味は、舞達のお母さんが死んだからなの。舞やお兄ちゃんが生まれた日に……」

「お母さん？」

舞もテーブルの椅子に腰をかけながらそう言った。

「お母さんって？」

「舞達を生んでくれた人。この曲達を生んだ人……聴き覚え有るでしょう？舞達がお母さんのお腹の中にいた頃、この曲をかけては舞達の事が安らげるようになって、祈りを込めて作った曲なんだよ……」

舞は、オレの目をしっかりと見据えて静かに言った。

「お母さん？オレ達を生んだ？」

「そうよ。子供はね、お母さんの体内で成長して生まれて来るの」

「詳しくは理解できないけど……女の身体から生まれてくるという事は理解……したよ」

「ちなみにお父さんは、作詞家でね。もう何年も前に死んでしまったの……音楽家族だったんだよ。今でもお父さんの面影は忘れられない……ごめんなさい。こんな事言ってもお兄ちゃんは、お父さんの事分らないものね。ただ忘れないでいて欲しいの。お父さんは、お兄ちゃんが生まれて、異端審問会……つまり、『ネオ・ロマンサ』から匿おうと必死に活動をしてくれた人物だったって事を……テロ組織に組してまでね……」

「……」

そうはいわれても、実感が湧かない。オレの父は、望、ただ一人

りだから……

「この地球はね、西暦2230年に、第四次ベビーブームを迎え、人口百億をこえる種にまでになったの……そこで、考え出されたプロジェクトが移民。滑走路近くにまあるいジオラマが有るんだけど見たかな？」

そう言うと、舞は席を立った。近くにある。電気コンロの前に行く。隣に有るポットの下に二人分のマグカップを置くと、紅茶のパックを詰め込みお湯を注いだ。そして、そのマグカップを手に取るとオレの前に差し出した。

「そうそう、クッキーも有るんだった。ちょっと待っててね」

近くの棚に有るお菓子入れを取り出して、テーブルの中央に置く。そして蓋を開けた。

「ああ……巨大な真っ黒なジオラマを見たぜ」

オレは話の続きを舞のその勘作が終わる頃、話し始めた。

「あれは、擬似宇宙。地球の人口密度の余りの目覚ましさに画期的に作られた安住の地」

一口カップに口をつけながら舞はそう言った。

「疑似宇宙？」

「発展した地球の科学者が発案した宇宙なの。そうね……異空間のような物だと思ってくれれば良いわ」

「ふーん。にしては、凄く小さなジオラマだな。あんな所に『ソリル』やいろいろな惑星が存在するなんて……まるで、ミクロの世界に住んでいる住民のような気がして来た」

「そうよ。あの世界にいる者達は、いわばミクロ人。わたし達はマクロ人と言うものになるのかしら……」

舞は、ちよつと考えるかのようにそう答えた。

「……ミクロ人ね……所で、オレ達は何で男しくないんだ？地球には女がいるじゃないか……それに減んだなんて、嘘なんてつく必要性なんてないじゃないか？」

「それはこれ以上、人口を増やす訳にはいかないからと言えば分か

るかしら？今の地球は、一家族一人の子供しか許されていないの。もちろん、子供を作らない家庭は、一級の保護を受けているわ」

マグカップを両手で包み込むようにして、舞は話す。

「じゃあ何か？オレ達、つまり、オレとお前は、一度に二人生まれた事で、何かしらの理由でオレが、『ソリル』に送り込まれたと言うのか？」

「そう。その時は男の子を優先的に選んだというのが理由なんだけどね……間違ってたなら舞がそう言う運命にあったとしてもおかしくはなかった……」

一瞬舞の目が曇った気がした。しかしオレはそのまま話を続ける。

「何故男なんだ？女は？」

「双子の女の子が生まれていた場合。または、隠れて二人三人と、子供を作った場合は強制的に『メトロ』に送り込まれているはずよ。あそこは女の子しかない惑星だから」

オレは、出された紅茶に手も触れないで、舞の話に聴き入っていた。

「先住民は、それで納得したのか？」

「先住民は、もともと同性愛者が志願したのだから、何の問題も起こらなかったわ。同性愛者にとって周りに気を配る事なんてないんですもの」

ふーっと、湯気を吐く舞。その湯気がオレの前を通り過ぎて行く。

「同性愛者？」

「つまり、男が、男を愛し、女が女を愛する人達の事」

オレは考え込んでしまった。つまりなんだ？志願した者達は全てを承知の上でこの境遇を受け入れたと言う事なのか？

考えてもその感覚が解らないので、話をそらした。

「あ、そうだ。ESPを使えるとか聴いたけど、オレにもその力は有るんだろうか？」

有るのなら、今すぐにでも、身に着けたいものである。

「どうだろう？遺伝的なものだったら、使えると思うよ……でも、

この部屋では余り強力なのは使えないから……」

少し考えるかのように小首をかしげる。

「どうしても、会いたい人物がいるんだ。夕貴。あいつの事が心配なんだ!」

そう、あの宇宙船から降り立ってから一度も夕貴を見ていなかった。異邦人としての彼を、これ以上、地球人の実験体として扱われる訳には行かない。

「大事な人なんだね……やはり、血縁関係よりも、時間が人の気持ちを動かすのかな?」

舞は悲し気に微笑む。

「10年も一緒にいた友達だ。いつもオレの事を気づかってくれて良いやつだよ? 舞。お前も会ってるんだけど?」

「ごめん。あの宇宙船の舞は本当にお兄ちゃんを呼び寄せるためのプログラムしか組んでなかったの……だから、その夕貴って子のことは分からない……」

考えてみれば、あの宇宙船にいた舞と、ここで話をしている舞はまるで別人だ。本当だったらこんな風に話ができるはずも無かったし、するつもりも無かった。

「なあ、夕貴の事分らないかな?」

オレはテーブルに両手をつき、身を乗り出した。

「ちょっと待って。今、探りを入れてみるから……妨害が入るかも知れないから、詳しくは分からないけど良いかな?」

そう言うと、舞は目蓋を閉じ神経集中を始めた。

静かな部屋の中、ただ奥でポットが沸騰している音だけが耳に入る。

「何処だろう? ここは……横たわっている一人の少女が、CTスキヤンにかけられてる」

「少女?」

又しても、この言葉に耳を傾ける。

「あつ、今度は脳波を調べてる……」

生態実験か？

「なあ、夕貴の所に行きたいんだけど、どうすれば良い？」

「瞬間移動で連れて行ってあげたいんだけど、それはちょっと出来そうにないの」

舞は残念そうに答える。

そんな折、扉が開いた。

「そろそろ、時間だ。懐かしいからと言っても生まれたばかりの子供に記憶なんてないかも知れないけどな。こっちに来い！お前の部屋の用意が出来た。早速案内してやる」

そう言うと、オレの腕を二人掛かりで掴み上げると、オレは強制的にこの部屋から出る事になった。もちろん再び手錠をかけられてテーブルの上には冷めた紅茶が取り残されている。

舞は、心配気にこちらを見ていたが、扉が閉まる瞬間、微かだが微笑んでいた。その時はその微笑みの意味も分からずに、オレはこの部屋から連れ出されたのである。

『心配はいらないわ。お兄ちゃんはお自分の意思でこの境地を抜け出す事ができるから……』

部屋を出て真っ直ぐ来た道とは逆の方角へ……つまり、吹き抜けの周りをぐるりと一周する感じに歩き出した。オレを連れに来た二人の男達は、オレの前と後ろを付かず離れず歩いている。

何処まで行っても白い空間はオレの心を苛立たせる。そして鳴り響く足音は不安にさせる。

さっき頭の中に響いて来た声は、確かに舞のものであった。

それだけが今のオレの安らぎになっているに他ならない。

実際、今この場を上手く切り抜けたとしてオレに何ができるだろう？『ソリル』に戻るには、一体どうすれば？

しかし、まずは夕貴の事が優先だ。あいつがこの訳も分からない所で実験動物のように扱われている事に苛立ちはじめる。

「なあ、お兄さん達……夕貴は？」

黙々と歩く二人の男に向かってこびを売りながらオレはまず問にかけてみた。

「夕貴？」

「オレと一緒に宇宙船でやって来たやつだよ」

オレは夕貴の名前も知らない男相手に話をするのも面倒だと、話の要点を言う。

「ああ、今、医務室で精密検査を行っている所だ。何やら騒いでいるようだが、我々には関係ないな」

騒いでる？ああ、なるほど。異邦人としての夕貴にあらゆる学者の興味が注がれているに違いないというところか。

「オレ、夕貴に会いたいんだ。連れてってくれないかな？」

無理は承知だ。だけどオレは訊いてみた。

前を歩く男の足が止まり、オレはその背中に顔をぶつけた。

「我々は、会長の意志で動く者だ。勝手なことは出来ない。その内、会長から内定が下されるのを待ってみろ。希望は伝えておく」

そう言い終わると、再び歩き始めた。そして、立ち止まった部屋に案内された。カードキーを差し込み中に入るように命令が下った。シュンツと軽やかな音を立てて開かれたドアは、オレの前に全貌を明らかにした。

舞の部屋のごとく、生活には困らない程度の内装。手鍵をはずされ、オレ達は中に入った。

「大体のものはここに備わっている。自由に使うが良い。食料は一日に三度、持って来てやる。まあ、一応の簡単な食料は、冷蔵庫に保存されてはいるがな」

ひと通り、部屋の説明を受けた後、二人の男達は出て行った。一人取り残されたオレは、取りあえずシャワーを浴びたかった。そこで隣の部屋のユニットバスへと足を向ける。操作はいたって簡単で、適度なお湯がオレの身体の汗を洗い落としてくれた。出て来たオレは、何日も洗っていない服を着たくなくて、近くの衣装箆を開けててみた。そこには、下着から洋服から何でも備わっている。

「助かった」

と、思ったが、頭の片隅で、この境遇を受け入れて良いのであろうか？という疑問が掠める。そう、敵と言っても過言ではない者達の手による物達。

バスローブを身に纏いつつも、オレは衣服を手を掴んで立ち尽くした。しかし利用出来る物は、利用すべきなんだと言う意識がまざり、終にはその備わっている衣類を見に纏ったのである。

一息つきたくてオレは、テーブルの前の椅子に腰をかける。

その視界に入るテレビのリモコンらしい物を見付け、手を伸ばし電源を入れた。

ピシッという電源の入る音で、映像が現れた。一体何日映像を見なかった事であろう？指折り数えてオレは数える。画面には、地球の放送局が流している番組が流れていた。何かのドラマ。しかし、こんな物は、今のオレには分らない。

チャンネルを変えてみる。今度は、映画。またチャンネルを変える。

何度チャンネルを変えたであろうか？100局近くも有るチャンネル。何処を見ても、映画やらドラマやらスポーツやら。

肝心なニュースは何処にも流されていなかった。

地球の動向を知りたいのに……と毒づきたかったが、それがオレに架せられたものだど気付くには遅かったのである。全チャンネル変えてみた所、何処にもなかった。

テーブルの横に有る新聞を取り上げる。しかし、配されているのはテレビ番組の項目だけであった。

頭が変になりそうだ。

自由とは名ばかりに監視下に置かれている。そう気が付いた時、オレはドアの前に立った。しかし、ビクリとも動く気配はない。つまり、閉じ込められた。有意義に過ごす事ができるただの牢獄なのである。

ふざけんな！と叫びたい所だが、適わないのはもう承知の上だ。

あの男は、夕貴の事を会長水上に伝えておくと書いていたが。その許可が何時おりるのであろうか？

この部屋に、ただ独り隔離されているオレにはもう我慢がならない。ふと、子供の頃に飼っていた小鳥のことを思い出す。籠に閉じ込められ、自由に空を飛ぶ事無く死んでいったあの小鳥。

オレは、大切に育てたつもりだった。『ソリル』で許されている、ペット。逃げないように羽まで切り落とした。だって、自分の元にいつまでもいて欲しかったから……

その小鳥は、数週間も持たずに死んで逝った。オレは悲しくて泣いた。あんなに可愛がっていたのに、何故？

今オレはその小鳥の気持ちを理解した気がする。

自由に生きたかったんだな……

籠の蓋を取り外し。オレは手厚く埋葬した。

ちゃんとお墓も造った。あの鳥が、今でも生きていたならば、オレはこんな気持ちになる事はなかったであろうか？そんなことを考える。

『自由』……

それが、今のオレの最大の望みであった。

そんなことを考えている時、少し離れた所に備わっている電話が鳴り響く。

オレはその電話に飛びついた。

「水上です。ご機嫌いかがです？その部屋はお気に召しましたか？」
凜とした声がオレの耳に響き渡る。

「ああ、最悪だね。こんな所で一生匿われているなんて考えると、反吐が出るよ！」

嫌みたっぷりに返事をする。

「そう。先ほど、貴方の連れ、夕貴さんの処置が無事完了しましたが、到って、順調に回復の兆しを見せておりますよ……ただし、彼女は異邦人。その分析からすると、子供を授かっている様子なのですが？貴方は彼女に手をかけたのですか？」

「子供？」

「そう。子供は性行為をしない限り、生まれて来る事は適いません。手をつけたのであれば貴方は、彼女の子供の父になるのです。その所をお聞かせ頂きたいのですが？」

莫迦な……

「手をかけたなんてそんなことしてない！何かの間違いなのでは？」
受話器に掛ける手がブルブルと震える。

「彼女は異邦人。しかも、両性具有体であった可能性は十分です。しかし、今は少女としての身体に異変をきたしています。つまり、貴方の行為で彼女に子供を作る事はできる身体になったと言っても過言ではありません。その所はどうなのですか？」

突如、テレビ画面が水上を映し出す。

「あいつは、少なくとも、オレの事が好きだよ。でも……」

そういいかけた時、オレは、あの時の事が走馬灯のように思い出されたのである。

一キスして――

沈黙を守っているオレに、水上は、

「何か思い出したようですね。それは一体なんなのですか？彼女……失礼、夕貴さんの身体は、早くても後、三ヶ月もすれば子供を出産する事でしょう。これは異例です。こんなに急速に大きくなって行く胎児なんてこの世には存在しない！」

オレは、受話器を耳から少し遠ざけた。

水上の言う通り、話すべきなのか？でも、そんな事をすれば夕貴の身柄はにもっと拘束されてしまう。

「一つ聞いて良いか？子供はどうすれば生まれるものなんだ？」

「今さらながら、そんな事を聞かれるなんて心外ですね……男と女が交わる。女の体内にある卵子に男の精子が上手く宿れば子供は出来ます。失礼。『ソリル』では必要のない知識でしたね」

ならばオレは、夕貴に手を出してはいない事になる。

「ただ、言うなればキスをしたことは……一度だけ交わした事はある……それは、子供を作る原因にはならないはずだよな?……そんな事より、夕貴に会わせてくれ!あいつの事が心配なんだ!」

受話器を握りしめながら、映像の水上の顔を一睨みした。

「ほう……キスね……」

水上は、少し興味あり気に画面から目を逸らした。そして、再びオレの方を見て、

「良いでしょう。明日、夕貴さんにお逢い出来る手はずを整えておきます。ただし彼女は神経的に参っていますので、そんなに時間はとれませんが……慎重にお預かりしていますので安心していて下さい。では明日、朝早く彼女に引き合わせて差し上げますのでまたその時に御連絡を差し上げますわ。では」

ツーツーと、一方的に切られた電話と映像にオレは虫酸が走る気分で受話器を叩きつけた。

手ごまにされている……そう感じたからだ。

神経を集中させる。わずかだが、オレの中に力が湧いて来たような感覚を覚えた。

「明日、夕貴に会えるんだ……」

そう思うと、ベッドにボスンと身を投げた。

次から次に起こる出来事の中で、ただ一つの希望が見えて来た気がする。

「夕貴……」

しかし、子供とは一体どう言う事なんだ?しかも、少女の姿になっているなんて……ホルモンの分泌とか言っていたが、そんな事があり得るのか?

謎ばかりである。

もし、オレの事を思い遣って、女の姿になったとしたら、もう夕貴は『ソリル』に帰る事を拒むかも知れない?あそこは男が住む世界。女は住む事が出来ないんだ。

それとも、オレもこのまま地球に定住する羽目に会うのか？

舞……あいつは、あの場所から抜け出せないと言ったが、一体どれほどあの場所で我慢して来たのであろう？

自由のないこの地球で、彼女が感じていたこと。真実を目の辺りにして、オレに何をさせたいのか？考えると自分の無力さに絶望感が押し寄せて来る。

舞……オレにESPの使い方を教えてくれ……

オレは心の中で念じた。何度も何度も。自分でも頭が麻痺するくらいに念じた。その内身体の力が抜け、思考回路のみが発揮した感じになる。

ブラリとベッドから垂れ下がった腕の感覚なんて既にある。右脳の感覚を司る思考回路だけを使おうとしているだけに、無理が出て来ているのかも知れない。

そんな時である。

『お兄ちゃん……聴こえる？』

瞬間脳の中に響く舞の声。声と言うにはちょっと違う感覚だが、「舞か！」

凄く乱れたノイズが入る。頭が痛い。

『これが妨害電波……ちょっとした事で、妨害をして来るの……どう？ESPの初歩が使えた気分は？』

「最悪だね……気分が悪い……」

脱力感で一杯だ。

「聞いてくれ。明日、夕貴に会わせてくれることになった。何とか助け出すことは出来ないかな？」

気力で何とか持ちこたえながらオレは舞に問いかける。

『『ネオ・ロマンサ』の、システムは絶大よ。そう簡単に突破できるものではないわ。舞が、外に出る事ができれば少しは違うんだけど……』

「へへ……そこをなんとかならないものかね……それとも奇襲をかけるしかないか？」

『奇襲？無茶だわ！相手は銃を持っているのよ。ひとたまりもないわよ！手錠をかけられてるんでしょ？あの手錠は、ESPを封じる力を兼ね備えてる物よ……』

「それを逆手に取るのさ……オレは、舞。お前程の力を得てる訳じゃない……相手はオレの事を力の無いものだと思切っている。だから、上手く騙せるかも知れない。それにオレの最大の武器は、足だ！」

オレ達はこうやってテレパシーなる物で、暫く会話を交わしていた。

『分かったわ。お兄ちゃんのやりたいようにやってみて。加勢出来る所までは舞も加勢するから……とにかく自分を信じてて。明日、また連絡を取りましょう。動く時は声をかけてね！』

長い時間ESPを使っていたオレは、意識を体に移した。すると、今まで感じない何か奇妙なガタつきを感じた。

「フウ……」

こうやって話をするのも何だか自分の身体に戻ったと言う感じで……手の平に力を入れて結んだり開いたりしてみる。そうすることで何だかやっと、自分を取り戻して来たようだ。

ESPというものを使うのが、こんなに大変な事だなんて思ってもいなかった。し出来るとも思ってたなかった。ベッドの端に何とか腰を落ち着ける頃。部屋のドアが開き、夕飯を運んで来た女がわざわざテーブルまでやって来た。

女は何事もないように下がって行く。

夕飯は、質素な物で、スープとサラダ。ミートスパゲッティであった。オレは、昨日の夕食から何も食べてなかったことを思い出し、無我夢中でそれに飛びついた。生きるために必要な力を身につけるために……そう、ただそれだけの為だった。その後、食べ終わった食器を、近くのダストに収め、オレは何も出来ない身体をベッドに預けると、仕方なくテレビをつける。

ドラマや、映画を見るのもなんだか飽きて来た、近くのCDプレ

ーヤーを稼動する。そして、ラジオにしてみた。暫くすると驚く情報が入った。そこでは、『ネオ・ロマンサ』の動向があらゆる面で流されていたからである。

「まさか、ラジオを聴くなんて思ってもいなかったんだな……」

水上の、演説らしい言葉が耳に入ってくる。

「今日も多くの子供達が、新しき未来宿る世界に羽ばたこうとしているのを目にし、私は、嬉々としてこう告げたい。これは創生であり、無に帰すこととはある意味違うのです。つまりは、子供達の前途ある未来を補完しているに相違ないのです。これから、私達『ネオ・ロマンサ』は全力を尽くしこの世界の人口の減少を図って行く所存です。ですから皆さん、安心して下さい……建ち並ぶビル街。お墓さえ建物の中に納めなければならぬこの不快な現実はどう、なくなります。そう、太古の草原を今取り戻すのです！」

オレは、カーテン越しに、窓の外を見た。確かにこの建物から見る遠くの景色は重圧なまでも高い建物で埋め尽くされているのが、眩しい程の灯された明かりを見れば分かる。

オレ達の住む『ソリル』と比べると、より高い建物。その人口の多さを明らかにする建物を見た時、オレの中で水上がしようとしている計画は、なんらかの根拠のある目的に馳せられているのが分かる気がして来た。

この地球で生まれてきたはずのオレ達『ソリル』の者達は、実は何も知らなくても良い平和な民なのかも知れないのだとも思えたりもした。だから、子供の事を公にしないのかも知れない……

しかし、オレは知ってしまった。もう後戻りは出来ない。そう、前に進むしかないんだ！

明日。夕貴に会う事を許されたオレがすべき事はなんなのか？それが今のオレの課題だ。オレはシミュレーションをしてみる。

明日、オレを迎えに来た者達を上手く騙す事。そして、まだ不完全なESPを何処まで使いこなせるかが勝負の決め手だ。

そんな事を考えていると、オレの身体は眠りに就く事が出来ない

ようになって来た。神経が研ぎ澄まされて来て……休もうとする身体を押し退けてしまう。

こんなこと生まれて初めてだ。きっと、これ以上にならない緊張感がオレの心を支配しているからであろう。そう考えれば考えるほど今必要な睡眠が遠退いて行ってしまうのだからどうしようもない。

オレは、考えることを止めるようにした。しかし、逆効果になったのである。眠ろう眠ろうと考えれば考える程、眠りに就くことは出来ない。眠り方を忘れた、みじめな異端者のようだ。腕時計は、すでに午前1時を回っている、もう寝なくては……明日は……そうして、無の境地を保ちはじめようとし始めたオレの身体は、終に、三時過ぎ頃意識を失った。夢の無い眠り。オレは疲れた身体をベッドに突っ伏した状態のまま眠りに落ちたのである。

#9 胎動

▼胎動

シュンッと開かれたドアの音で目が覚めたオレは、事の状況を把握するまでに時間が掛かった。

「これから、お前の相棒の所に案内する。早く用意しろ!」

昨日の男達と違って、女二人がオレに指図をする。

一瞬何事か理解に苦しんだが、ハッと我に返り早速夕貴の元に出かける準備を始める。そして、突然服を脱ぎ始めたオレに気付き、女達は目を背けた。

「?」

オレには奴らが何故そう言う行動に出たのか分からなくて、一瞬戸惑ったが、機転を利かしこれが何かの役に立つ事になるのではないかと睨んだ。

オレの着替えが済んで、再び後ろ手に手錠をかけられたオレは、先を歩いている女を眺めていた。オレより小柄で、歩く度に良い香りがする。

長い渡り廊下を延々と歩き、昨日下りたエレベーターで55階とボタンを押す女は、しげしげとオレを眺めていた。

「あの、何か?」

オレはその視線に気付き問う。

「いや……何でもない。気にするな……」

そう言われると逆に気になるってものだ。

オレは、その女の後ろ姿をじっくりと観察した。がっしりとしているかのように思われるその後ろ姿は、やはり、男よりも丸みを帯びた体つきをしている。

「着いたぞ降りろ!」

もう一人の女が、オレの後ろから押し出すようにしてエレベーターから下ろされた時思わず前のめりになりかけたが、必死に左足で自分の身体を支える事に成功した。こんな所で、転んでみせたくはない。これ以上の失態なんて恥ずかしいものは一切持ち合わせたくなかった。

下りた先には、やはり渡り廊下が延々と続いている。オレのいる階と同じ構造なのだと理解した。

オレ達は、その渡り廊下をただ黙々と歩き始める。立ちはだかるドアが有るその場所まで。

先を歩いていた女はカードを脇のボックスに差し込み、確認を得るとドアは開かれた。その先には、オレを待ち構えていたかのよう

に水上とその従者がガラス張りの前に立ちはだかっていた。

「良い眠りが得られましたかな？」

水上は眼鏡を直しながらオレに問いかける。

そんな、いけしゃあしゃあと言われた言葉にオレはカチンときた。

「御大層に寝ていられたら、何の苦勞もねえな！」
不機嫌なオレに、したり顔の水上とその側の男達は、にやにやとした顔をオレに向ける。

よけいに腹の中が煮えくり返りそうになる。

「御覧の通り、君の友人タ貴さんはあのように預からせて頂いている」

本題に移る水上。

ガラス張りの向こうは真っ白な壁に囲まれた個室の診療所があった。

「かなり衰弱しているようで、栄養剤を打ち続けているのだが、いっこうに目を醒ます気配がない。このまま出産をするのは危険きわまりないな。晃。君が来れば少しは違うかと思ってこういう処置を取らせて頂いた。近くに行ってみたいかな？」

水上は、ガラス張りの向こうの夕貴の様子を伺いながらオレにそう持ちかけた。

昨日もそうだったが、呼び捨てにされるような間柄でもないのに……何だか苛立つ。その答えは言わなくても分かっているはずだ。

「そんなの決まってるだろう？ いちいち聞くんじゃないよ！ オレの答えなど分かっているだろう！」

そう、今にもぶちまけたい感情が沸々と煮えたぎっていた。

「分かった。ならば、晃。君を特別中に入れてあげよう。麗華その手錠を解いてやれ」

オレの後ろに控えていた女に向かって放たれた、突然の水上の言葉にオレはしめたと心の中でほくそ笑んだ。これで、まだ使い慣れないESP解放が出来るってものだ。舞にも連絡がとれる。

「こちらだ……」

水上自身がオレをガラス張りの向こうに通じているドアに導いて行った。ドアを開け、オレと水上は真っ直ぐ夕貴の眠っているそのベッドに歩いて行く。

傍目から見えていて分からなかったが、夕貴の表情はかなり険しい。というか、蒼白で、あの元氣滲刺ないつも夕貴とは別人のようだった。点滴のスタンドを避けてオレは夕貴の真横に足を進めた。そして、もっと顔が見える位置へと顔を寄せる。夕貴の眠っているその布団の中央部分が膨らんでいることに気付き、

「これは？」

と、疑問を呟いた。

「子供をお腹に宿らせているんだ。もうこんなに分かるくらいに大きくなっている」

その膨らみの上に手を置いて眠りに就いている夕貴は、今どんな夢を見ているのであろうか？ そんな事を考えてみた。

「さて眠り姫は、どんな夢を見ている事であらうな？」

オレの考えを読むかのように、水上はオレの頭上からそう問いかける。

「さあな……良い夢を見ていてくれればそれに越した事はないよ……」

オレは、夕貴の手の甲の上に自分自身の手の平を置いた。表情とは裏腹に温かな体温が伝わって来る。

「……ん……」

今まで身動き一つしなかった夕貴の口元から、声がこぼれる。

「夕貴？」

オレは夕貴のその様子に意識を取り戻したのかと手の平で夕貴の手を握りしめた。しかし、夕貴の意識が戻った訳ではなかったようで、再び静かな寝息だけを残し夕貴は沈黙した。

「分かったかね？君の力を持っても、夕貴さんは意識を取り戻すことが出来ない。きっと、お腹の中の子供の急速な成長の早さが原因ではないかと思われる。きっと、『ミトラボス』星人の特徴ではなからうかと医師達は見当を立てている。夕貴さんは、少なくとも安定期に入るまで目を醒まさないであろうとな……」

「安定期って？」

オレは分からないことだらけでいつもの様に混乱した。

「母体と子供とがお互い保とうとする時期をさす。今はまだ子供の方が先走って大きくなろうとしているんだよ」

「その安定期ってのは何時ごろ訪れるのか分かるか？」

オレは、今すぐにでも夕貴をこの場から奪い去りたい気分だが、この様子では上手く行くはずもない。きっと、夕貴を傷つけてしまいうに決まっている……そう判断したからこそ、今は静かにしておいた方が無難であると思った。今はE S Pは必要ない。舞に連絡する必要性も……

「それは……」

水上は分からない様子で近くに控えている医師に目配せした。

「そうですね。早くても一週間は見ていただければ良いかと思われますね。何しろ異例なもので、我々にも全く分からないのです。ただ、今までの母体の中で成長している子供の様子から計算すると、一週間ぐらいとしか言い様がないですね」

その医師は興味津々な……オレからすると嫌な視線で夕貴を見下

ろしている。何だか胸くそ悪い気分だ。

「晃？これで分かったでしょう？君が何か企んでいるとしても、夕貴さんをどうする事も出来ないと言う事が。三ヶ月の間静かにしておくことが良いでしょう？それとも、事を引き起こしても、夕貴さんの身柄を引き取りたいですか？」

全とお見通しとでも言うかのような水上の言葉に一瞬ドキツとしたが、オレはなるべく平静を保つように心掛けた。

「何の事だ？こんな設備の中、オレ独りが何かしでかす事が出来たら、それこそ凄い事ですね。そこまでオレは莫迦じゃない」

夕貴の手から身を離しオレは立ち上がった。

「そう簡単ではない事くらい分かっているさ。時は金なりっていうし。夕貴の意識が戻ったら教えてくれ。お前たちにとって、異星人と地球人の混血の子供がそれほど気になるんだったら、大人しくオレに従ってもらおうか？そうした方が身の為だよ？夕貴が目醒ましてオレがいなかったらどう言うことになるか試してみても良いぜ？」

オレは、夕貴を信じている。そう、確信したからこそこれだけの事を堂々といえるんだと頭で考えると顔から火が出る思いだったが。「分かった。晃の要求は飲もう。しかし、勝手なまねができると思っているのであればそれは思い上がりだから心に止めておくが良い……さて、そろそろ部屋に戻ってもらおう。そして有意義にあの部屋で生活してもらおうか？きつと、舞の気持ちも分かるようになってくるであろう……」

クルリとオレの前から背を向けた水上はスタスタとガラス張りの部屋へと歩き始めた。オレは、一度夕貴の顔を見下ろして頬に手の平をあてがった。

「きつと、お前を助けに来るからな！」

そう念を込めてオレは水上の後に続いた。

その後は、再び麗華と呼ばれた女と、もう一人の女に連れられてオレは自分の部屋へと戻ったのである。

結局、どうすることも出来なかったオレは、ベッドに横になり天井を見上げた。そして、舞に連絡を取るためESP使おうと静かに右脳に神経を送った。

暫くすると、靄の掛かったような感覚に陥る。

『どうしたの？今日は行動を起こさなかったのね』

舞はちよつと残念そうな口調で話し掛けて来る。

「夕貴が、今動かせる状態じゃないんだ。少なくとも一週間は目を醒ますことはないそうだよ……残念だけどね」

『そう……なら、今の内にESPを自在に使えるように訓練しておいたら良いかもね。まだまだ思うようには使いこなせていないようだし？集中力アップさせるまでの時間短縮を考えておいた方が、いざと言う時に彼に立つから』

「それは考えている……これって凄く時間掛かってるよな？オレも感じてる事だ」

トホホなオレに、

『お兄ちゃん的能力は、未知だからね。舞には分からない。もしかしたら舞には使えないようなESPを使いこなすことができるかも知れないよ？スキルアップに良い時期じゃないかな？夕貴……ちゃんの意識が戻るまで、舞も手伝ってあげるよ。あっ！一つだけ言うっておきたい事があるんだった』

舞は今思い出したかのように、

『絶対に自室で物質移動の練習をやっちゃダメだよ！お兄ちゃんがESP保持者だという事が監視カメラでばれちゃうから……』

『監視カメラ！』

オレは驚きの為に一瞬意識をぐらつかせた。

『各部屋に取り付けられてるの。舞の部屋の物を移動させるんだったら良いんだけど……それにはまず、透視能力を強化しなくちゃね。そうしてから、物質移動の訓練をするようにする。私だったらもうばれてるから、勝手気ままにESPを使ってると思われるから良い

んだけど……お兄ちゃんはそうはいかないでしょう？」

舞の言っている事はもったもなことであった。

「分かった。透視能力を身につけて、舞の部屋の物で物質移動の訓練をやってみるよ」

オレは素直にそう答える。

『じゃあ、まず、透視能力を身につけなくちゃ…』

舞は少し考えるかのように語尾を押さえる。

『ええと、舞の部屋のことを思い描いて。覚えてるかな？』

「ああ、覚えてるよ。オレの部屋と良く似た間取りで、中央にテーブルが有って……」

オレは、一度しか訪れた事のない舞の部屋を思い描く。そうすると、だんだんイメージが浮かんで来て、リアルなものになって来た。

『どう？私が今いる所が分かる？』

舞の気配を擦ろうとオレは集中する。何だかぼんやりとした人らしい物が脳裏を駆け抜けて行った。

「テーブルの椅子に座ってる？」

今度はハッキリとした輪郭が浮かんだ。

『へえ……お兄ちゃんやるじゃない！正解。結構スムーズにESP能力を発揮してるじゃない？私の時に比べると凄く早いよ！』

その感嘆の言葉に、

「そうなんだ？」

オレは呑気に素直に驚いたような言葉を返す。

『じゃあ、移動するね。今は何処にいるでしょう？』

席を立ち洗面所へと歩いて行く舞の姿がぼんやりと浮かんで来る。

「洗面所！」

オレは即座に答える。

『正解！十分だね。後は、細かい事までの的をしばれるかに挑戦だよ！』

そう言うのと、手に何かを持つ仕草をしている舞。

『さて、舞は一体何を持っているのでしょうか？当ててみて？』

洗面所に有るもの……歯ブラシか？それともタオルか？

オレは、細かい像のそのものを答えるのに手間取る。

「いや……そこまでは分からないや……」

うすぼんやりとしている輪郭で、オレには全く分からない。

『妨害電波かな。それとも、お兄ちゃんの今の能力がそこまでしかないからなのかな？』

舞は残念そうに呟く。

「そこに有りそうな物といえば、タオルか石鹸か？歯ブラシって所だろうけど……」

オレは勘に頼った物いいで……

『お兄ちゃん。そんな事ではESPの役割は果たしてないのよ。ちゃん透視しなくちゃ意味がないの！』

舞は当然の事をそのまま返して来た。

「でもよう……分からないんだから仕方ないじゃないかよう……」

『まだまだね。私はお兄ちゃんが今何をやっているかちゃんと分かるわよ。ベッドに寝っ転がってしかも仰向け。そして神経を集中させてるの！』

あっさりと答えられて、オレは驚く。

「お前は神経を集中させなくても分かるのか？」

『うん。もう慣れちゃったから。いつでもトリップ出来ちゃう……特に今は、お兄ちゃんの意識が舞に向けられているから簡単だね』

オレは、こんな風になんか力を使うことができるようになるのであるのか？たった一週間という短い時間で……何だか先の長いゲームをしているかのようだ。

「なあ。物質移動はどうすればできるんだ？」

『気が早いね……まあ、自ずと分かって来る事なんだけど、リアルに、ある物質を思い描いて自分がそのものを掴み持ち上げた感覚を取り込めば簡単にできるようになるよ』

「ふむ……」

『それにはまず、舞の部屋に有る物をリアルに透視する事が出来な

い限り無理だね……ハッキリと覚えている物は何?」

舞の部屋に入って一番に心に止めたもの……それは、オレの為に
出された紅茶のマグカップ。一度も触ったことはないが、確かに一
番印象深い。幾何学横様のシンプルなつくりのカップを思い出した。
「カップだ。それを手に取る感じで持ち上げてみるよ」

オレは神経を集中させてカップを手にとる感触を心に思い描く。
すべすべしたそのカップの取っ手に手をかけ、オレは紅茶が入って
いたであろうそれを持ち上げようとする。イメージは掴めた。

『お兄ちゃん! カップが浮かんでるよ! 成功だよ。上手い上手い!』
キッチンと言うにはお粗末なその場所に収納されているカップが
自動的に浮かび上がっている。

「他には……お菓子箱!」

木製で作られたちよつとアンティーク風のその箱を思い浮かべる。
そしてその蓋を取り外そうと思い描く。

「どうだ? 蓋開いたか?」

『成功! 中のお菓子がなんだか分かる?』

オレはその中に入っているクッキーの詰め合わせ。ちよつとサブ
レなクッキーを確かに透視できた。

「サブレクッキー! チョコ味と、バニラかな? これは……縞々模様
のものもあるな……」

あの時、そこまで目に入っていなかったオレの目に確かにそう映
った。なんて事だ……実際、こんな事ができるなんて夢にも思っ
ていなかった事をオレは体験している。

「今まで使わなかった能力を使っているからかな? 何だか疲れて来
たよ……」

そう、だんだんと頭痛がし始めて来た。

『無理しちゃダメだよ! ESPは、かなりの心労をきたすから! 今
日はこの辺にしておく方が無難ね。まだ一週間有るんでしょう? だ
ったら、明日もその次の日も舞が協力してあげるから、一時中断し
よう。その内慣れてくるから』

その言葉に、

「ありがてえ……また明日連絡するよ。今日はありがとう。舞……」
オレはそう言うのと、自分の身体に力を注いだ。一時的な事とは言え、やはりすぐには動けない。どうも幽体離脱というものをしていくような感覚に陥ってしまう。

舞はそんな感じを微塵も見せたりしなかったのに……そう考えると、オレの能力はかなりまだまだ開花されていないのだと思い知らされる。

オレは、遠くても、夕貴を連れだせるような力を身につけたい。それは、ESPを使いこなさなければ適わない事であろうか？

次の機会を待って上手く連れ出す方法を考えた方が賢明ではなからうか？そんな弱気な考えにまで陥った。が、そんなことでは駄目だ。

まだ、昼過ぎのこの時間帯。オレは、疲れ切った身体をベッドから起き上がらせ、まず、至る所に隠されているであろう隠しカメラの事を考えて行動をする。確かに疲れ切っている身体ではあるが、まず透視能力の強化をこの部屋の中でだけでも良いからできるようになりたい。そう考えると、部屋の隅々まで見て回る。

そんな頃、食事を持って来た女が部屋のテーブルまでその食器を運んで来た。一瞬、タイミング的には合っていたので良かったなと思う。

オレは、必要な栄養源の補給を終えると、再び部屋の中を十分に探索しはじめる。その後またベッドに横になり、透視能力のレベルをあげる練習をし始めたのである。

そう、神経が疲れ果てるまで……

この一週間、外の空気に触れる事無くこの隔離された部屋でオレは、何展も何度もESP強化の訓練を積み重ねた。時には、舞の助言も有り、スムーズに行かない能力の引き出し方を教わりもした。何時の間にか自然体のままのオレもESPを使いこなす事が出来る

ようになった。

なんと短い間の特訓であっただろう？今思うととてもない事のように感じるさせる。

舞は、急成長するオレに感嘆の言葉を返してくれる。それほどまでに上達したからである。きつとこの部屋を出ると、自分でも分からない能力が発揮出来るかも知れない。そう考えると、なんとも言えない気分になる。

「なあ、舞？……一つ訊きたいことが有るんだけど……」

オレは、テーブルの椅子に腰をかけて、テレビのモニターを眺めながら舞に問いかける。

「以前から気になっていたんだけど……何でお前ここに閉じ込められることになったんだ？ただ、ESPを使えるからってだけじゃないんだろう？」

そう、この部屋に閉じ込められたなら、そうやすやすと、『ソリル』のオレの元に宅急便なんかを送れるはずなんかない。

しかも、あんな、手のこんだプログラムなど不可能に近い。

『お兄ちゃんに荷物を送ったのは、私がここに入るほんの一瞬をついた時に行ったの。私は、お父さんの後を引き継ぎ、テロに加担していた人物として、以前から目を付けられていた……』

まるでオレの心を見すかしたかのような言葉にちよつと気を乱す。

『テロをやった時に身について来たESP能力は、一気に『ネオ・ロマンサ』の意表をつき、一時、舞達が優勢に立ったの。私達の仲間に、活気を取り戻し、一気に本拠地に乗り込んだ迄は良かったけど、ESP封じの機械が効をそうしたのね。舞達は一気に『ネオ・ロマンサ』の前に崩れ落ちて行ってしまった』

舞は何か思いを馳せている感じである。

「色々あったんだな……オレが平和に暮らしている時に……」

『時々お兄ちゃんのことを見守っていたんだよ。気付く事はなかったみたいけど。でも、お兄ちゃんは来てくれた。舞は信じていたよ！きつとお兄ちゃんは、この『地球』に辿り着く事ができるんだ

ってこと!』

まるで、オレの前に舞が座って話をしているかのようなビジョンが流れ込んで来る。

「辛かったか？」

オレは、今にも泣き出しそうな表情の舞になんて言ったら良いかちよつと悩んだ。

『……仲間がいてくれたから……もし、いなかったら挫けていたかも知れないな』

「……そうか……で、その仲間はとうなっただ？」

『今は、各地に散らばっているわ。時を待っていてくれる……舞のことを案じていてくれるの。それが、心の中に響いてきて、いても立ってもいられない気分』

舞は、卓上で両の手の平を組んでいる。

『悪かったな……氣に触ったら許して欲しい……この『地球』の事を何も分からないオレが口を挟む事じゃないのかも知れないけど、知っておきたかったんだ。舞の事……オレ、血のつながりってのがなんなのか今になっても分からないけど、舞のことは好きだよ』

照れくさくて、ちよつと視線を泳がせる。

『舞も、お兄ちゃんの事、好きだよ。こんなに離れていても、いつでもお兄ちゃんの事は思ってる。今となってはたった一人の肉親だし、想いを馳せる所を同じにした、同士ですもの』

舞は真剣にオレを見返した。その視線を真っ直ぐ受け止める。

「一週間経ったな……そろそろ戦闘を始める用意をしないと……きつと、夕貴が目覚める頃だろう。おっとお迎えも来たことだし、時を見逃さないようにオレの目で見る物を、感じ取ってくれよ。じゃあ、また後で……」

オレ達は、終には、一心同体のESPをも得る事が出来るようになった。そう、オレの眼で見る光景を、舞も見ることが出来る。これは、双子であったがゆえにできるなことなのかも知れないと、舞は語っていた。

シュンッ。軽やかなドアの開く音でオレはそのドアの方を見た。

「お前の相棒が目を醒ました。約束通り相棒に逢わせてやるとの事だ。準備をしろ」

その言葉に、何も知らないような雰囲気で、

「本当か。分かった支度をする！」

オレはここに来た時の服装に着替え。この部屋を後にした。麗華と、もう一人の女が前来た道を案内する。もちろん、今まで通りオレの手首には重い枷が付けられていた。

シュンッと研究所の扉が開き、水上の姿を見付けた時、オレは一瞬だが隠れた闘志を滾らせた。

「眠り姫が目を醒ましたよ。王子様？」

水上は平然とそう言い放った。

「鎮静剤を投入している。目を醒ましたとき、あまりにも興奮して、手が付けられなかった……どうやら兎の言った通りになったようだわ」

そう言うと、ガラス張りの奥に視線を流す。

「会わせてくれるんだろうな？」

一にらみしたオレの様子を、水上はこともなしげに返す。

「約束は守ると言っただろう？麗華、手錠を解いてやれ」

以前と同じシチュエーション。オレは心の中で笑った。この事が後でどんな結果になるか思い知らせてやる！

オレは、ガラス張りの向こうの部屋へと移動した。そして、夕貴の横に腰を下ろした。夕貴は、静かに眠っている。そっと手の平を夕貴の手に持って行く。

「う……ん」

と、言葉を漏らした夕貴は、重たい目蓋を持ち上げるかのようにして、目を開いた。

「気分はどうだ？」

夕貴はオレの声を聴いて安堵するかのように言葉を発する。

「晃？……良かった。いてくれたんだ……目覚めた時、いなかったから、ボク……」

涙目になりながらも小声で囁く。

「ああ、心配しなくて良いよ。オレはここにいるから……やっぱ、気分が悪いのか？」

オレは夕貴の手を握りしめた。

「ううん……今は気分が良いよ。晃に会えたから……でもここは何処なの？なんでボク、こんな所で寝ているの？」

何も判らない夕貴は、オレに問いかけた。

「……」

オレは返す言葉が見つからず、ただ夕貴を見詰めていた。

「お答えしましょうか？夕貴さん。貴女は、この『ネオ・ロマンサ』で、大切に捕獲させて頂いているんですよ。大事な次世代の子供を妊娠していい身体であり、異邦人の生体実験の為にね」

オレの後ろに控えている水上がズバリ事の真相を告げる。

「妊娠？」

夕貴は何を言っているのか分からないとでも言いたげに問いかけます。

「初めまして。取りあえず自己紹介をしましょうか？私は『ネオ・ロマンサ』会長水上と申します。貴女が、『ミトラボス』出身の異邦人である事は、もう御存じのことかも知れませんが？貴女と、ここにいて晃との間の子を、貴方は身ごもっているのです。これは、人類始まって以来の大快挙です。どう言う経緯で身ごもったのか、貴女の惑星の生態がどう言う物なのか、全く私達の考えにも及ばない物をお持ちだ！是非、出産の日までここで安静にしていってもらいたいものですよ！」

水上のこの言葉に終にキレたオレは、

「夕貴は誰の手にも触れさせない！お前達の研究材料になんかにされてたまるものか！そんなこと、このオレがさせない！」

オレは、この時とばかりに、周りを覆いつくしているガラスに念

を込める。

すると、一気にガラスが割れて行った。

「何だ？ きゃーっ！」

そこに控えていた者達の悲鳴が轟く。

そして、オレは夕貴の身体を念動力で持ち上げる。それからオレの腕に抱きかかえた。

「晃？」

オレの顔を見上げながら夕貴は驚きの表情を隠し切れない表情だった。

「お前、ESPを身につけていたのか！」

水上は今までの監視下でオレのESP能力はないものだと思っただけらしい。

「この一週間で、身につけた即席のESPだけだな！ 近寄ってみろ。これ以上の被害を被りたくなければ、オレのする事に一切関与してくれなよな！」

二人分の重さを抱えたオレの身体は少し重たいが、このまま夕貴をこの場から連れ出すことは可能だ。

そんな状況下、水上はニヤリとオレの顔を見据えて笑った。そして、オレに向けて銃口を向ける。

「私が欲しいのは、夕貴さんだ。お前がどうなろうと知ったこっちゃないのよ。晃！」

そういうと、オレの顔横ギリギリの所目掛けて銃をぶっぱなした。その風圧でオレの頬に一筋の血が流れ落ちるのが分かった。

「そう来たか……では……」

オレは、舞に信号を送る。オレの目を通してみて来たであろう舞。その一瞬の出来事で、オレの身体は宙に浮く。

「余りオレを甘く見て欲しくはないな！」

オレは、瞬間移動でこの部屋を出ようと神経を集中させようとした時、視界が揺れた。

一瞬何が起きているのか分からなかったが、水上達の驚きようは

深刻そうであった。

「地震だ！かなり大きいぞ！」

ガクガクと揺れている視界。慌てている一同。近くの機具が次々に倒れて行く。一体何が起きているんだ？地震と言うものを知らないオレには全くこの状況を飲み込めない。

『お兄ちゃん！今よ。水上達は慌てているわ。早くこの場を抜け出して！』

オレの頭に響いて来る舞の声。

「これは一体？」

『地殻変動のプレートが歪んで起きる現象よ！『ソリル』ではない現象かも知れないけどこの東京では、ある現象なの！かなり大きいわ！……きゃあっ』

突如途切れる舞の思考。

「舞！」

それを皮切りに、オレはこの部屋からの脱出を心試みる。身体が宙に浮いているせいか、この地震の影響は少ない。瞬間移動をするまでもなく、入り口からオレはやすやすと逃げ切る事に成功した。

未だ続いているこの地震。だんだんと揺れは厳しくなる。

パラパラと、天井の壁が崩れ始める。

「晃！危ない！」

オレに抱きかかえられている夕貴が、天井から崩れ落ちて来る瓦礫に気付き、オレに指示する。渡り廊下は吹き抜けになっているため、一階の床まで見下ろすことができる。一步踏み間違えたら、この高さからだと御陀仏だ。そんなことに気を取られていたためか、足下がおろそかになった。もう一段階の大きな揺れが起きた時、床が崩れ落ちたのである。オレは、必死で宙に浮かぼうとしたが、間に合わず、足下を踏み外す。

一気にオレと夕貴の身体はまっ逆さまに落ちて行く。

オレは必死に念を込めて宙に浮かぶESPを唱えていたが、集中力散漫で、思うように行かない。このままでは二人共、落下死は覚

悟しなければならぬ。落ちて行くスピードはどんどん増す。

一方で、オレはせめて夕貴だけでも助けようと、体を捻った。オレが下敷きになれば、夕貴だけでも助かるかも知れない。そう思ったからである。

55階からの高さから落ちて行くオレの頭に浮かんで来たのは、今までの『ソリル』での生活であった。

恵、望。南先輩。岩泉副キャプテン。それから、クラスの友達……みんな元気だろうか？

それから……舞。

次々と走馬灯のように流れ込んで来る意識の中、オレの身体は必死に夕貴をかばっている。オレ、夕貴の子供の顔も見ることなく死んでしまうのか……？ 何だか父親として子供の顔を見たかったな……男の子かな？ 女の子かな？ まだまだやり残している事沢山あるのにこのざまかよ？

そんな事を考えている。

重力の最高潮がオレの服を棚引かせて、落ちて行く。

後どのくらいなのであろうか？ と一瞬考えた時。落下速度が緩やかになった。オレは、恐る恐る下を見た。すると、床ギリギリの所で宙に浮いていることに気がついた。オレはゆっくりと体制を整えて、床に足をつける。その目の前に、宙に浮いている舞の姿があった。

「遅れてごめんなさい！」

舞は静かに床に足をつけた。

「舞！ お前あの部屋を出る事が出来たのか？」

驚きの余りオレは舞の顔を凝視した。

「あの地震で、ESP解除システムがいかれてしまったのね。それから、扉が壊れたの」

「それじゃ、あの悲鳴は？」

「突然落ちてきた戸棚に驚いたのよ。恥ずかしいことだけども……」
舞は一瞬と惑っていたが、正直に答える。

「舞：ありがとう」

オレは、自分の未熟さに呆れつつも舞に礼を言う。

「お兄ちゃんの気が簿れたから、何か有ったんだと悟ったんだけど。本当に良かったわ。間に合って！」

舞はオレの方に近づいてきて抱き締める。オレより頭一つ違う体格の舞は甘い香りがした。

「夕貴ちゃん、気絶してるみたいね」

オレが抱きかかえている夕貴の顔を眺めながら舞は安堵のため息を一つつく。

「ああ、オレがダメでも、せめて、夕貴だけは助かって欲しかったからな。何も知らない方が、こいつにとって良かったのかも知れないよ。正直、こうやって夕貴の顔をもう一度拝めるなんて思ってもいなかった」

「さて、お兄ちゃん。そろそろ、脱出するよ！舞について来て！」

舞は、オレを先導するかのように1階のロビーを案内した。

その後をオレはできるだけ夕貴に刺激を与えないように早足で走っていた。

#10 決着

▼決着

ロビーは、先程の地震の為に瓦礫の山となっている。そんな中、オレと、舞は入り口へと進んで行った。無防備な体制化、オレと舞はすんなりとロビーを抜け、外に出る事が適った。

外は真っ昼間で、サンサンと照りつける太陽の下、オレ達は滑走路のあるあの宇宙船へと足を運んだ。

「あの地震で、宇宙船に異常が出てなければ良いんだけどね……」
舞は、先を進みながら心配そうに言った。

途中、滑走路に抜ける所に、検問所が有った。しかし、地震の事もあり、簡単に抜け出すことに成功する。

「ところでさ、なんでESPを使わないんだ？ここまで歩く必要なんてないだろうに……」

そうだ、オレは引っ掛かる何かがあるとは思っていたが、こんな単純な事であった。

「今は使えない……温存しておかないと、あいつが来る……」

「あいつ？」

一体誰の事をさしてそう呼んでいるのか見当がつかない。しかし、舞がここまで用心しているとなると、厄介な人物なのであろう。

「そう……あいつ！」

そう言って、前を指差す舞。

その指先には、あの、研究所にいたはずの水上が宇宙船の前で待ち構えていたのである。

「先回りしているなんて、よく気の効いた真似をするわね！」

「あなたこそ、よくあの部屋から抜け出すことが出来たわね。舞！」
まるで一触即発のムードであった。

「どういうことだ？オレ達よりも早くあの場所から抜け出すことができるなんて！」

オレは何がなんだか判らなかった。

「聖……水上も、ESP保持者なのよ。お兄ちゃん！」

「水上が？」

オレは呆然とした。

「よくも、私達を裏切ってくれたわね。聖！貴女のせいで、どれだけの犠牲者が出たか分かっているの！？」

舞は顔に似合わず、あからさまに怒りをぶつけている。

「裏切った？それは違うわ！始めから、舞。貴女の事が嫌いだったのよ！テロリストの真の指導者の西園舞をね！」

舞が、テロリストの真の指導者？

「そう……嫌いであつたならば、何故、私達テロリストに加担していたのよ！」

「舞？あなたから、ESP能力を盗むためよ！私は、私の信念に従って『ネオ・ロマンサ』を引き立てたかった。全ては私の中に流れる血がそうさせているのだわ。『ネオ・ロマンサ』を今まで高めて来たその子孫としての誇りと、願いが！そのただけに、テロリストに加担していたのよ！でなければ誰が好き好んで年下のあなたに従ったりする？」

水上はせせら笑った。

「聖！貴女が何を考えて、何を信念にしているかは、理解する事はできる。だから、貴女が『ネオ・ロマンサ』総指揮者だったその末裔でも黙って私は受け入れた。一緒にこの世界を変えられるならって思った。でもね、やってはいけないことくらい分かってもらわないと……テロを起こしている者達の気持ちも知っていて……裏切ったのよ！貴女は！」

瞬間移動で、舞は水上の懐に入る。オレにはその速い動きを何とか目で追う事が出来た。そして、顔面に平手をかます。しかし、それを予期していた水上は左腕でその行為を妨いだ。

飛び退く舞。

「舞。貴女の行動は私の頭脳にインプットされているわ。そう簡単に、やられたりしないわよ？もう一度、あの部屋に帰って頂くわ。あの自由の効かない牢獄に！」

水上は念動力で、銃口を、舞のこめかみに押し付ける。

「そう簡単に私が、貴女の手には落ちると思ったら、大間違いよ！」
舞は、その銃口の先を念動力でねじ曲げた。

「自然を取り返したいと願う聖の気持ちは分からない訳じゃない！もちろん舞だってそんなこと重々承知の上よ！でもね、その為に疑似宇宙なんかで、人口を操るなんてことは自然の摂理に逆らっているとは思わないの？矛盾しているのよ！聖達がやっている事は！」

舞は、ねじ曲げた銃口をESPで水上の手許に戻す。そして、鬨髪入れずその引き金を引く。

『バン！』

爆発的な音が辺りに響き渡る。片膝をつく水上。右腕から血が滴り落ちていく。

「！」

それでも右腕を支えながら立ち上がる水上。

「御託は要らないわ！こんな世界で、今みたいな地震を受けるとどうなるか……それこそ、この世界の滅亡を招くのだから！分かってないのはそっちでしょう！高いビル。住む所に困って、こんなビル街を作りはじめる。そんな事をしたら、それこそ、自らの危機を受け入れてしまう事になるのよ……だから私達の御先祖様は疑似宇宙を作り人口減少の糸口で、この世界をより良くしていかなければならなかった。間違ってるんかいなわ！」

水上は後に引かない。

「私達人間は、神じゃないのよ！疑似宇宙を作ってはいけなかった。しかも、繁栄しない世界なんて！それを、舞達人間が指示することは出来ないのよ！……ここに、次世代の亚当とイヴがいるわ。それさえも阻止つもり？」

舞は、オレと夕貴の方に視線を移す。

オレと、夕貴が次世代のアダムとイヴ？

「『ソリル』や『メトロ』は、私達の管轄内。もちろん、この二人をこのまま還す訳には行かないわ！しかも、『ミトラボス』は、疑似宇宙内に新しく出来た惑星。こんな新種、学者達の最高の研究材料よ！ほっておく事なんて出来やしないわ！」

「分かってないのね……『ミトラボス』が、『作られた世界』でないのであれば、それは既に神の領域よ。舞達『地球人』が関与するのはさけるべきだわ！疑似宇宙を作った時点でその世界はそこにいる人達の物なのよ！『地球人』が関与すべき事ではないわ！」

舞は真剣に水上を見返す。

「何故、こんなにも意見が合わないのかしらね？私達は……しかし、こうなった以上私達は、神同然なのよ！創造を繰り返しできる範囲のあらゆる方向性を確かめる。いわば、新世紀の訪れを導いて行かなければならない……物語の主人公や脇役の配置も決めなければならぬ。言わば、創造主。そうしないと、民はついてこないの。貴女もテロ組織の指導者ならばそのくらい分かるでしょう？舞！」

激論は続く。オレの想像を絶するその会話は、何時まで経っても水掛け論だ。と、オレは思った。

「指導者は神ではないわ！絶対的な力なんて持ち合わせてはいないのよ。そのくらい分かるでしょう！」

二人の間に見えない火花が散っている。

オレの考えにも及ばない、舞の姿がここに有るのだと初めて知った。

「口論はもう止めにしない？手っ取り早く私達の間の決着をつけましょう！」

水上はこの口論に終止符をつけたのであろうか？攻撃体勢に入る。

「仕方ないわね。聖が、その気なら舞はもう何も言わない。決着をつけましょう！ただし、一階勝負。どちらかが膝をついたらその時

点で負けよ！殺し合いはごめんだわ！分かったら、行くわよ！」

舞が言い放ったその言葉に水上は、

「ああ！」

宙に舞う舞。その舞に合わせて宙に浮かぶ水上。

突然吠く突風で二人の衣服がパサパサと揺れる。

オレにも伝わってくるこの二人の闘志。もう誰にも止められない状況だ。オレはゴクリと唾を飲み込んだ。周りは滑走路。二人を阻むものは何一つ無い。五メートルほど離れて宙に浮かんで向かい合っている二人。そして先に攻撃を仕掛けたの水上であった。まるで空气中に刀でも有るかのような、閃光が舞の頬を擦める。舞の頬から一筋の血飛沫が飛び散った。

「よく避けたわね！でも次はそうはいかないわよ！」

上半身を捻り再び真空を切るようにして放たれる刃。

しかし、舞はそれを待っていたかのように瞬間移動をして、水上の背後に移り水上の方を振り向く。そして、一発の光の玉を水上目掛けて放つ。その光の玉を背後に感じた水上は瞬間的に交わした。

「あら、なんて姑息な真似を？正面から戦えないのかしら？」

水上は振り返り笑いながら舞をののしった。

「機動力って言う言葉知っている？真正面からだけが勝負の決め手にはならないのよ！」

そう言うと、瞬間移動で水上の頭上に移動する。そして、一気に掌を振り下ろす。それを間一髪交わした水上。その反動で、勢い余って地上に着地する舞。直ぐさま空中を見上げる。そこにいるはずの水上の姿を追い掛けるかのように。

「あの頃よりESP能力の使い方に慣れて来たみたいね？聖！」

再び宙に浮く舞。

「日々鍛えるようにしているからね！」

負けずに言い返す水上は、余裕の表情を浮かべている。

「でも、舞の足下に及ぶかしら？本家本元のESPを越すことが、聖！貴女にできるかしら？」

舞は両腕を開き頭上高く振り上げる。そして、瞳を閉じ何やら集中をしている、きつと、誰にも判らない気を、その両腕に込められているのが感じられた。

「そんな無防備な状態で、どうするつもりか知らないけど、私の攻撃を避けきれるかしら？」

水上は一気に舞へと詰め寄り、そして気孔弾を打つ姿勢に入る。その砲弾が舞の眼前に来た時、まるで時間が止まったかのように砲弾が止まった。収縮するかのように、小さくなるその光は、まるで壁にでもぶつかったかのように跳ね返って真っすぐ水上の眼前に舞い戻る。

「キャーッッッ」

その砲弾は見事水上を捕らえてしまう。吹き飛ばされ、地上に腰から落ちる水上。

「痛っ！」

その様子を見てか見ないでか、舞は水上の方に向かって気を発した。立ち上がろうとする水上の行動はまるでストップモーションにでもなったかのように動かない。

「残念ね。聖。貴女の負けよ」

瞬間移動で舞は水上の元に降り立つ。そして、水上の膝を地面につくように水上の体を操る。終に決着はついた。水上は膝をつく形で舞の前に跪いたのである。

「お待たせしたね。お兄ちゃん！」

舞は何事もなかったかのようにオレの前に足を向けて来た。

「さあ、宇宙船に行くわよ！私に捕まって！」

そう言う。瞬間移動の体勢に入ろうとした。

「待ちなさい！」

後ろ向きのまま……座ったままの水上が何かを言いたげに叫んだ。

「何？勝負はついたはずよ。お兄ちゃんと、夕貴ちゃんは、『ソリル』に還るの。もう、とやかく言われる覚えは無いわ」

舞は水上に背を向けたまま静かにそう言う。

「『ソリル』に、女が紛れ込むという事は今までの秩序を乱す事になるとは思わないの？きっと取り返しのつかない事になるわよ！」

オレはその水上の言葉にドキリとした。

「この二人なら、きっと乗り越えてくれるとそう信じているもの……舞はね……」

オレは舞の顔を覗き込んだ。真剣な表情の舞にオレはどう言おうか一瞬悩んだ。そして、

「オレは……小さい頃から夢を見て来た。何故、男しくない世界が従来の『地球』と違うんだろう？きっとどこかに女と言う種族がいるはずだ。そう思って来た。それが異邦人でも、なんでも構わない。オレは守りたい者を手にすることができれば……どんな困難でも立ち向かってみせると。そう考えていた」

オレは両腕に抱えている夕貴の顔を覗いた。

「こいつが、異邦人でも女でも。今では何の疑問も持ち合わせていない。ただ守りたい」

オレの子を身ごもっているからだけではない。そう、ビーナス像の事なんてもう頭にはなかった。

「私達『地球人』が、『ソリル』の『ネオ・ロマンサ』に、圧力をかける事だってできるのよ……？」

「それは、舞が阻止してみせる！安心してお兄ちゃん。聖！あの疑似宇宙は、舞の手で封鎖する事だって可能なんだよ？知ってた？」

「！」

水上は驚いたかのように、舞を振り返る。

「お前は、それほどまでに疑似宇宙を許せないのか！」

沈黙が走る。

「……舞はね、多くの肉親を失って来た者達の心の痛みが分かるのよ。私がそうだからかも知れない……今までのことはもう取り返し

のつかない事だと思ってる。だからここに居てはいけない。お兄ちゃん達には、『ソリル』に還ってもらわなければならない。『作られた世界』はもうこれで、『新たな世界』になるの。そう、これから先は違う！もう終わりにしなくちゃ……」

「……舞……」

オレはどう答えたら良いのか分からずにただ舞を見詰めた。

「『ソリル』に、新しい風が吹くの。もう地球人を送り込むことはないの！『ソリル』の歴史は、この二人から始まる……先にも言ったように、アダムとイヴは『ソリル』に戻って真の世界を築き上げていける！こんな喜ばしい事はないんじゃない？」

「……」

「是非とも、夕貴ちゃんには女の子を生んで欲しいなあ……でも、両性具有に生まれてくるかも知れないね？それも有りかなあと思うんだ。舞は……だって、幸せじゃない？自分で性を選ぶ事ができるんだよ？きつと、利発な、元気一杯の子供が生まれてくると思うな。お兄ちゃんや、夕貴ちゃんに似た……」

何だか、空元気な舞の様子にオレは、

「……舞？お前も一緒に来ないか？」

ふと言葉が口から溜れた。

「……」

「そうすれば、イヴが二人になるだろう？」

オレは名案だと舞に言い放った。しかし、

「イヴはね、二人居ちゃダメなんだよ。お兄ちゃん……」

「？」

「新しい未来を築くには、『地球人』である舞が、居てはダメなの！」

「オレだって元は地球人だろ？」

その言葉に対する返事はない。

「……それに、舞はこの『地球』の仲間達と戦って行かなければならない。どんなに時が流れようと、お兄ちゃんとうして会う事が

出来て舞は幸せだった……だって、他の子供を奪われて行った人達には決して出来ない事だもの……もう二度とこうして会う事は出来ないけど……同じ時間を離れて共有していると感じる事ができれば舞は幸せだよ。だから、お兄ちゃん、前を向いて、夕貴ちゃんを幸せにすることだけを考えて。時には舞の事を思い出して欲しい……けど、もしかしたらそれは叶わないかな？」

必死で涙を堪えようとしているのが分かった。

「なんだよ？それってどう言うことだよ？」

そんな話をしている時、水上がやっと立ち上がった。

「舞……それって……」

何の事だかさっぱり分からないオレは呆然と再び始まる二人の会話に耳を傾けた。

「ある条件を飲んでもらわない限り、迷いはないわ！」

「本気で、あの力を使うつもりなのね！？」

何だか慌てている水上の様子にオレは、

「おい、何の話をしてるんだ？」

訳も分らず問い掛けた。しかし二人の間に俺は見えては居ないらしい。

「舞は神じゃない……でも、この力は今使わなければならないんだってそう分かったの……全人類を巻き込んで、この『地球』を滅ぼす力。こんな力無ければ良かったのに……」

地球を滅ぼす……？

「やめて！そんなこととしてはダメ！まだ、『地球』は病んではないない！お前の仲間まで見殺しにするつもりか！それにそうする事で、擬似宇宙までも滅ぼすつもりなのか！それこそ矛盾している！」

水上は舞の肩を激しく揺さぶる。

「そうしたくはないわ……そうしなくて良いように、聖が、もう擬似宇宙に手を出さないと誓うのであれば、テロも止める。どうする？今答えて！私の力を解放するのは簡単なのよ！」

舞と水上は向き合ったまま微動だすらないのである。それ程繁

迫している状態であった。

「……分かったわ……疑似宇宙からは手を引くわ……舞、貴女の条件を飲むわ……」

水上は、フツと笑って左手を舞に突き出した。舞はそれに同意して今初めて二人は握手を交わす。

「ならば、舞達もテロ組織を解散するわ。そして、私個人としてこの世界を変える様にする。それには、聖の力も必要だわ？ 勿論協力してくれるわね？」

緊張の糸が解けるのが感じられて、オレはホッと息をつく事が出来た。

「でも、新しい世界を構築するのであれば、晃達の記憶を消さなければならぬ。違う？」

水上は突然オレの話を振って来た。

「オレ達の記憶を消す？」

「ごめんね。お兄ちゃんの記憶は消させてもらうわ……この『地球』の存在を知る者の記憶は抹消しないと、新しい世界は訪れない」

舞は真剣にそう言いつた。

「どういう事だよ？」

「『ソリル』は、地球から逃れた民。しかし『地球』は滅んだことにしないといけない」

水上も同じ事を言っている。

「冗談だろ？ それじゃあ、『ソリル』に居たと言う記憶も、『地球』での記憶も消されるって事なのか？ 冗談だろ？ 舞！」

オレは一步後ろに引いた。

「冗談なんかじゃないよ。お兄ちゃん」

「晃。貴方は新しい時代を告げる異邦人として、『ソリル』に戻ってもらう……『ソリル』の民が貴方達をどう受け止めるかは分からないけど……それはもう賭けの領域に達するわ……でもね、自然に打ち解けることができるのであるならば、『ソリル』の新しい時代は開かれるのよ。次世代の新しい息吹を『ソリル』の民はどう受

け止めるかしらね？」

水上は腕組みをしてオレの方を伺っている。

オレは夕貴を抱えたまままた一步引くしか出来なかった。

「さあ、これ以上の長居は無用ね……お兄ちゃん？舞はずっと見守っているよ。お兄ちゃんが、舞の事を忘れてしまったとしても」

そう言うと言は、オレと、抱えている夕貴に向かって掌を掲げ眩い程の気を込めた光をぶつけてきた。その光を浴びて意識が遠のくオレ。立っていることさえままならない。

次第にフェードアウトしてゆく意識の中、オレは脳裏にこのことを焼きつけようと必死になった。が、終には夕貴を支える力さえ残されてはいなくて……地面に突っ伏すのであった。

忘れたりなんかしない。

舞の事も。

地球の事も。

水上や、『ネオ・ロマンサ』の事も……

そう。消え行く意識の中、オレは呪文のように何度も何度も繰り返したのである。

#11 新世界

▼新世界

次に目を醒ました時、オレはベッドの中であつた。

空虚に目つめる視線の先には、ただの真っ白な天井が広がっていた。オレは、ここが何処なのか知りたくて、上半身を起き上がらせる。

「先生！患者が目を醒ました！」

近くにいたのであろうか？看護師らしき人物が、背を向けている白衣の男に声をかけている。

その様子を何と無し気に見ているオレはまだ覚醒し切れてはいなかった。

「君！名前は？何処から来たの？」

先生と呼ばれたその男は、オレに心配げに話し掛けて来る。

「オレは……晃」

そう、オレは晃だ。

「何処からって？……えーと……」

考えるが全然記憶がない。

「分かったよ。今暫く安静にしてて良いよ」

そう言うのと、近くにある椅子に腰をかけるその男。

「二日前に、この『ソリル』に不時着した宇宙船に二人の乗客が乗っていた。それが、君。晃君と、もう一人の女の子だったんだ」

と、オレの横に眠っている子をさしてそう言った。

「……夕貴……」

オレは、おぼろげな口調でそうこぼした。

「夕貴さんって言うのかい？あの子は、妊娠しているようだけど、何処の感星から来たのかまでは思い出せないのかな？」

その男は興味津々に聞いて来る。

「……夕貴……」

ただひたすら、何かが頭の中を駆け巡ってる。

「ここは何処？」

オレは、取りあえず、今いる場所を知りたかった。

「『ソリル』という惑星の、『ネオ・ロマンサ』という病院だよ」

「……『ネオ・ロマンサ』……」

オレの頭はどうかなくなってしまったのか？

聞いた事が有る名前なのに一切思い出せないのである。

「あの子……夕貴さんのお腹の子供は、晃君の子かな？あの子、この惑星に入ってからまだ目覚めないんだ……やはサ、『ソリル』では、女という種族は生存できないのかも知れない。君が目覚めてくれて良かったよ。早く君たちの惑星に戻りなさい」

そう言うと、隣の夕貴の方に身体を捻るその男。

「脈は正常だよ。ただし、夕貴さんの子供はかなりのスピードで成長しているようだ。過去の『地球』でのデータを洗いざらい調べては見たものの、異例な現象だ。晃君は別にして、夕貴さんは、私達『地球移民の民』とはまったく別の生態をしている。君たちは何が目的でこの『ソリル』にやって来たのか、私には分からないが、子供の事を思うのなら早めに立ち去った方が良い……」

背中を向けたままその男はそう言った。

「……その必要はないよ。夕貴は死んだりはしない……オレの子供を身ごもってるのだから……『ソリル』にやってきたのは、もうオレ達の住む場所が此処しかないからだ」

自然と動く口が、思考とは裏腹で、自分でも驚く。

「オレと夕貴をこの『ソリル』に置いて欲しい。そう言ったら困るのか？」

男は直ぐさま背を向け、席を立つ。そして、この部屋の扉を抜けて、どこかに行ってしまった。それがどう言う事なのか、今のオレにはどう言う訳か分かる。何故？

『夕貴』、『ネオ・ロマンサ』、『地球』この三つの言葉に何かを感じ取ったからだ。

オレは再び、ベッドに横になり、そして目蓋を閉じる。

まだ、何か足りない……重要な言葉が。

オレは自然と、思考回路だけに集中する。

そう、以前にもこんな風に、取り組んだことが有る。深く。そしてじっくりと時間をかけてオレは思い描こうとした。

オレの失われた過去。

そんな時、フラッシュバックがオレの頭を支配した。

……そうか……

バタバタと廊下が騒がしくなって来た時、オレは強い信念を持って、これから始まるであろう事に立ち向かうとした。

シュンツと扉が開かれると、背広を着た男が入ってきた。

「気がつかれたそうで何よりです。えーと、晃君？」

背広を着たその男は真剣な眼差しでオレの顔を立ったまま眺めている。

「ええ、オレの能力が、今までの事を思い出してくれましたよ。お話ししましょうか？『ネオ・ロマンサ』ソリル内総指揮官殿？」

そう、オレのESPの一つであろう、過去見。

きつと、舞はこの事を知らなかったはずだ。

残念だったな……

オレは、舞の顔に泥を塗ってしまったのかも知れないが、敢えて、この能力に感謝している。

「話して頂けますね？」

男は、二人にして欲しいと周りの者達に告げる。速やかに立ち去る人達。その様子を見送りそして、オレとその男のみになった時話

を始めた。

「オレは、的場晃。いや、地球では、西国晃。あんたたち『ネオ・ロマンサ』が極秘事項で行って来た、子供を授かる方法を、二日前まで見て来た一人だ」

男は、微動だにせず、オレの話に耳を傾けている。

「夕貴は『ミトラボス』の異邦人。オレ達『地球人』とは違った、この世界唯一の新たな生命体。オレの子を今、宿している」

「『地球』の水上会長から、私にのみ報告が入っている。今後一切の干渉はしないとの事。つまり、擬似宇宙自体、『地球』への侵入を封鎖することだ。その理由は、アダムとイヴを、この『ソリル』に委ねるからと言うものだった」

物静かな、深みの有る声でそう言う。

「上層部のみのトップシークレットってやつか？まだ、何処にも秘密は漏れてはいないんだな？ならば、オレはどう対処したら良い？」

これからの事。

「水上会長は、二人を束縛する事だけはしないで欲しいと言い残された。つまり、君たちは自由の身である。もう、『ネオ・ロマンサ』は、必要のない組織だ。これからは、君達の保護と『ソリル』繁栄の道を最優先に考えて行くことになりそうだ」

じっとオレを見据えてそう答える。

「オレは、『ソリル』では身寄りの無い者となった。父、母そして、友人さえいない世界に突然放り込まれたと言っても過言ではない。保護を受けられるのであれば、それは気持ちよく受け入れることにしましょう」

まるで、一皮剥けた感じだった。そう、晴れ晴れとした気分である。過去を思い出したからか？それとも、もう戻れない過去の産物に頼ることは必要無くなったからか？

「もちろんです。こんな記念すべき日がくるなんて、想像もしてい

なかった。こうやって話が出来て良かったですよ。水上会長は、記憶を消した。と言ってらっしゃいましたからね」

そういうと、初めて笑顔を見せる。

「オレと夕貴の子供。何時頃生まれそうですか？」

ふと、隣を見る。夕貴は静かに寝息を立てていた。

「そうですね。あと二ヶ月半は掛かるでしょう……切めて、この『ソリル』で生まれる子供です……楽しみな事ですよ」

オレとその男は静かに夕貴を見守っている。

「それでは、身体の方が落ち着いたら、『新ネオ・ロマンサ』にお越し下さい。是非とも本格的なお話をしたいと思っておりますから」

それだけ言い残すと、男は席を立った。

暫くオレはボーッとしていたが、ベッドから腰を上げ夕貴の元に行く。そして床に膝をつき、夕貴の手を握りしめた。夕貴が目覚めたら、オレの事なんか忘れてしまってるんだろうか？それとも、覚えていてくれるんだろうか？

夕貴のお腹は少し膨らんでいて、布団の上からもその様子が伺える。この中に、オレの子供がいる。直に生まれて来る子供。どんな子に成長するんだろうか？名前はなんて付けよう？『ソリル』で初めて生まれて来る子供。

歴史は生まれ変わる。

そう思うと、以前感じていたドキドキする感覚が蘇る。

早く目を醒ませよな。そう念じた時、

「……晃？」

ボソリと確かに夕貴の口からオレの名前が溢れた。

「夕貴？」

オレは驚きの余り、近くの椅子の足を蹴飛ばしてしまった。

「気がついたか？夕貴！」

「此処は何処？ボクは何をしているの？何だか長い夢を見ていた気がするよ……それにお腰が重たいや……」

オレの名前しか覚えていないようで、夕貴は不安そうであった。

「ここは、病院だよ。お前のお腹には、オレの子供がいるんだよ。あと、二ヶ月半程で生まれてくるそうだ」

「そう……晃と、ボクの子供……」

別段何も驚かない夕貴。何を思っているのだろうか？

静かにオレの方を見る夕貴。

そして、オレの頬にそっと手を伸ばす。温かい手の感触がオレの頬に感じる。夕貴がちゃんと生きている証。

「安心しろ。きっと元気な子供が生まれるよ。名前考えないとな……」

その言葉ににっこりと微笑む夕貴の笑顔が眩しくて……オレは、涙が出そうだ。

ふと、窓の外の景色がオレの目に入ってきた。

地球で見たのと別段何の変哲もない空の青。雲一つないこの空の下、綺麗な日差しが入り込んでくる。

季節はもう、秋になろうという頃だろう。

しかし、オレの中の熱い気持ちはあの夏の日と変わらない。

「これから一緒にやって行こうな？」

オレは、この日を境に、夕貴の伴侶となったのである。

▼エピローグ

この記録を見た我が子孫達に、オレが送る事ができる事はただ一つだ。

大切なモノを守る力を身につけて欲しい。

それが、男であろうと女であろうと自然であろうと動物であろうと何であろうと構わない。

そして、何時の日かその力を生かして欲しいとそう思っている。

大切なのは、真実を見極め、大切なモノを守ること。

オレの子孫が、この『ソリル』で生きている以上、そのことを念頭において、これから先の人生を生きて行って欲しい。

我妻、夕貴に、言い残している事は山ほどあり語る事も出来ない事もあり、残念ではあるが、お前達の胸の内にしまっていて欲しい。オレのいなくなった後、この先、何世紀も生きて行く夕貴を残して逝くことは不本慮では有るが、決して彼女にこの真相は知れてはならない。いつか気付くことが有るかも知れないが、それが彼女への愛だと信じてやまないから。

きつと、『ソリル』は生まれ変わる。

そう信じてこの記録を子孫に送る。

希望と平和に満ちた世界を。

そして、愛を……

#11 新世界（後書き）

もう十年前の作品です。

書き直したいところもあったのですが、これはこれで残しておくのもまた良いかなど。

人口増加とありえないんですが、この話の中では、少子化を逆の眼で見て書いた作品でした。

主人公晃は、最後の最後まで、客観的にこの出来事を見守る。と言う設定にしています。でも、話の中で思った事はそのまま垂れ流しますが。

夕貴に関しては、異邦人であると言う設定なので、このまま生き続けます。

晃と言う愛するものをなくした後も。

それに関して道考えるのかは省きました。

が、きっと、自分でも悟ってる事でしょう。

そして、子供達は、新ネオ・ロマンサから解放たれ、子孫を残していきます。

それが、『ソリル』というこの惑星ミクロの繁栄になります。

まだまだ未熟だったときに書いた作品でしたが、思い入れはあって・

・まあ、初めて取り組んだSF作品として何か心に残っていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7673g/>

ナビゲーション・セイリング

2010年10月8日14時21分発行